研究社學生文庫

— 334 —

特263
300

師法好兼

草然徒

大島庄之助解釋

研究社

始

67

特263
300

研究社學生文庫
—334—

師法好兼

徒然草

大島庄之助解釋

省務內
15.3.-6
(版出通普)

昭和十五
研究社藏書

緒　言

一　徒然草は、短章の間に、幾多の語法・語彙を豐富に含有して、文は遒勁である。これに習熟したならば、國語古文を解釋するに甚だ便益を得る。誠に精讀する必要のある書である。宜しく各種の學校にては教科材料として採用してある。

一　本解釋には、故實に關するもの、厭世に關するもの、其の他教育上如何はしきものを省いて全卷二百四十三段のうち、目ぼしいものは殆ど採擇解釋した。故に本書を讀了したなら、原書を凡て讀んだと同樣の價値があると思ふ。下段「參考」の部は省略しても他は精讀すべきものであると思ふ。そして其の眞意を捕捉する樣にしなければならない。只表面上の逐條譯の如きは取るべきものではない。

一　隨筆として、程よき長さの文章で、又趣味津津たるものであるから、精讀熟讀すべきものである。

一　年齡の程度に應じて、其の都度都度に思ひあたる心證を得るものであるから、永く愛

讀すべきものである。徒然草によつて智を得るのではなく、我が識を徒然草によつて裏書きして貰ふ考へでなければならない。

一　卷末の索引の頁數により本文中に其の頁を見る時には、其の部の下段の「參考」をも併せ見られたい。

著　者

目　次

緒　言
解　題……（一—八）
徒然なるままに……一
いでや此の世に生れては……二
いにしへの聖の御世……一一
不幸にうれへに沈める人……一三
あだし野の露……一四
家居のつきづきしく……一五
神無月の比……二二
同じ心ならん人……二四
和歌こそなほをかしけれ……二七
いづくにもあれ……三三
人はおのれを……三五
折節の遷り變るこそ……三七
萬のことは月見るにこそ……四七
齋宮の野宮に……四九
飛鳥川の淵瀬……五一
靜かに思へば……五六
人のなき跡……五八
雪のおもしろうふり……六三
九月廿日の比……六四
朝夕へだてなく……六七
名利につかはれて……六八
五月五日賀茂のくらべ馬……七六
春の暮つかた……八〇
あやしの竹のあみ戸……八二
公世の二位のせうと……八六
或人清水へまゐり……八七

仁和寺にある法師(石清水)……八九
これも仁和寺の法師(鼎)……九一
家の作りやう……九六
大事を思ひ立たむ人……九七
眞乘院の(芋頭)……一〇一
筑紫に某の押領使……一〇三
名を聞くより……一〇五
世にかたりつたふる事……一〇六
何事も入りたたぬ……一一一
屏風・障子の繪……一一三
法顯三藏……一一五
人のこころすなほ……一一六
或者小野道風の(朗詠集)……一一九
奥山に猫また……一二〇
或人弓いる事を習ふ……一二三
牛を賣る者……一二六
大覺寺殿(謎)……一三〇
寸陰惜しむ人……一三二
高名の木のぼり……一三七
鎌倉の海(鰹魚)……一三九
顏回は志、人に勞を……一四一
物にあらそはず……一四四
まづしき者(禮)……一四七
花は盛りに……一四九
身死して財殘る事……一六二
悲田院の堯蓮上人……一六三
人の終焉の有りさま……一六七
能をつかんとする人……一六九
筆を取れば……一七三
一道にたづさはる人……一七六
年老いたる人の……一八〇
さしたる事なくて(訪問)……一八三

相模の守時頼の母……一八六
萬の道の人……一八九
今日は其の事……一九一
くらき人の(文字の法師)……一九四
達人の人を見る眼……一九六
人の田を論ずるもの……二〇一
萬の事はたのむ……二〇三
平の宣時朝臣(時頼と)……二〇七
そのの別當(鯉)……二一〇
萬のとがあらじ……二一四
人の物を問ひたるに……二一五
ぬし有る家には……二一八
丹波に出雲(獅子)……二二一
八つになりし年……二二五
索引……二三七

解　題

徒然草（フレヅレグサ）といふ書名は、その開卷第一に、

つれづれなるままに、日ぐらし硯に向かひて心にうつりゆく……

と記されてある冒頭の言葉を採つて名づけたのである。平安朝時代の枕草子（マクラノサウシ）と並んで我が國隨筆文學の雙璧とたたへられる。この徒然草は、今から凡そ六百年前に兼好法師（ケンカウ）によつて書かれた。

兼好法師は俗名を卜部（ウラベ）（又、吉田（ヨシダ））兼好（カネヨシ）といつて、家は代代京都の吉田神社に奉仕した神道家である。彼の父は治部少輔兼顯（ヂブセウカネアキ）といつて三人の男の子があつた。長子は大僧正慈遍（ジヘン）といひ、次子は民部大輔兼雄（ミンブタイフカネヲ）といつた。兼好は第三子である。兼好は正平五年四月八日に六十八歳で歿したといふことであるからして、逆に生まれた年は算へれば弘安六年頃に當る。弘安四年元兵大擧して九州の地を侵し、その騷動の未だ治まらざる時である。兼好は長じて宮仕へをし、藏人（クラウド）・左兵衞尉（サヒヤウヱノジヨウ）等に任ぜられたが、後宇多上皇の御寵遇を被り、歌人

としても搢紳の間に名を知られるやうになつた。特に和歌に於ては、「和歌の數寄者なり」といはれたことがあり、頓阿・淨辨・慶運と合はせて、當時の和歌の四天王と稱されたほどであつた。然るに、寵遇を辱くした後宇多上皇は正中元年六月二十五日崩御遊ばされたので、彼は世の無常を感じて剃髪し、俗名をそのまま音讀して兼好とし僧門に入つた。かくて、時世は漸く亂雲あわただしき有様となり、正中の變をその萠芽として遂に元弘の亂となつた。兼好は戰亂の巷となつた京洛の間を避けて、木曾路に赴き、暫く隱棲してゐたが、更に東國に下向し、再び京に立戻つて京都附近に寓居し、又雙の岡に草庵を立てて、

—徒然草—

雙の岡に無常所まうけて、かたはしに櫻をうゑさす
ちぎりおく花とならびの岡のへにあはれいくよの春を過ぐさむ

と詠じたりして、風月を友としてゐたが、晩年には伊賀國の國見山の麓の田井の庄（今は種生村といふ）に移り、そして正平五年に、その地で歿したのであつた。

兼好法師が東國へ下つたのは前後二度あつた。初度の時は彼が三十八九歳の頃であつたと傳へられてゐる。此の東國下向については、彼が或婦人との問題について惱んだ結果であるとか、或は京都朝廷に於かせられて、關東方の情報を蒐集せんための密偵の役を帶びて下向したのであるとか、種種の說が傳へられてゐるが、未だ俄に信をおき難い。又彼れの歿した月日についても、或は二月十五日といひ、或は二月十八日と色色の說が行はれてゐる。

—題解—

さてそれならば、徒然草は何年頃に書かれたかといふことになると、「春湊浪話」（土肥經平の著）といふ本によると、上卷は建武三年以前に書かれた。その理由は冷泉萬里小路の内裏を里内裏と書いてあるが、その内裏は建武三年の正月に燒失したからである。又下卷は建武三年以後に書かれた。それは、藤原公明を大納言といつてゐるが、この人は建武三年五月に大納言に補任された人である。この二條によつて、その著作年代を推測する事が出來るといふのであるが、この推測は甚だ杜撰なものであつて、今は一般に省みられてゐない。大體は、元德二年以後建武三年以前の數年間に亘つて書かれたものであらうといふことは、書中に散見する記事によつて判定されるのである。先づ兼好の四十歳から五十歳頃に至る間の或時期に執筆されたものであらう。元弘の亂の起る以前の數年間に於いてで

あるといふことになる。上下二卷中に、當時としては驚天動地の一大事變たる京都方と關東方との爭ひに關する記事、建武中興の記事、吉野朝廷の記事などが見えてゐないことは注意しておくべきであらう。

次に此の徒然草は、果して兼好の直筆本が後世に傳はつたのか、それとも兼好は單に草稿として書きちらしたものを、たれかが編輯したものかといふことに就いては、古來、三條實枝の崑玉集の記述が一般に信ぜられてゐた。その記述によれば、兼好が徒然草を作つたことは、その在世中は誰にも知られてゐなかつたが、その死後、今川了俊が、何か遺稿めいたものはないかと考へ、兼好の歿後、了俊の手許に引取られた兼好の童の命松丸に尋ねたところ、あるといふことなので、その命松丸と從者伊豫太郎光貞を、雙が岡や伊賀の田井の庄に遣はして、遺つてゐた草稿を求めさせ、之を本として徒然草二卷を編輯したのであるといふのである。然し全篇を通讀してみる時、その記述には前後に脈絡ある物多く、殊にその初めの邊りは、いかにも讀者を豫期した書き方であり、秩序も整然としてゐることなどから見て、やはり、兼好法師が自から書いた稿本が大體遺つて今日に傳はつたと見

るのが今日の通説になつたゐるのである。

徒然草上下二卷は、著者が折に觸れ時に應じた感想を集めたものであり、その內容は、自然の觀察・人生の觀照の凡ゆる方面に亘り、追憶の記事もあり、哲學的な思索もあり、人生の處世訓もあり、風月に吟詠する趣味談もあり、有識故實に關する說話もあり、自分の自讃の文もあるといふ風に、雜多の種類に分れてをり、文章も僅か一行ぐらゐの短かいものから、堂堂數頁に亘る長大なものまで色色である。大觀するに、それら長短種種な隨筆は、前後連絡するものが多く、感興の推移につれて筆を運んだに相違ないと思はれる一群となつた記述があり、又突如として見聞した記事を點出し來るとも、何かそれに連絡のある記述がその次に追隨してゐるといふ場合が多く、その點、決して紛亂錯雜を極めたる隨筆ではなくして、著者の思想なり感情なりが、見えつ隱れつして水の微かに苔の下を行く如く全篇を貫いてゐるものがあるのである。

徒然草は德川時代になるまでは轉寫されて傳へられて來たのであるが、その割合に異本と稱すべきものが少い。普通流布本といはれてゐるものでは、嵯峨本と烏丸光廣本とが古い

ものであり、なほ宮内省圖書寮に一二の古本が收められてゐる。その他には京都の龍谷大學に藏せられてゐる延德本、靜嘉堂文庫に所藏されてゐる正徹本などが異本と目されるものであるが、それとても、流布本に比して著しい相違のあるものではない。

徒然草の著者兼好法師の略傳は前に述べた。然らば彼れは、如何なる思想の持主であつたかといふ事を徒然草によつて推斷するに、先づ、歌人としての兼好を一瞥する必要があらう。歌人としての兼好は、當時の和歌の四天王として重きをなした人であり、彼れの自筆の家集が現に前田侯爵家に收藏されてゐるのであるが、それによつて見るに、彼れは歌才によつて後宇多上皇の寵遇を忝うしたのみではなく、貴顯搢紳から屢〻歌合等に招かれた事が分るのである。彼れの詠歌の二三を揭げ、歌人としての彼れの風丰を偲ぶならば、

ひさかたの雲井のどかに出づる日のひかりにほふ山櫻かな

いかにして慰むものぞ世の中をそむかですぐす人に問はばや

住めばまた浮世なりけりよそながら思ひしままの山里もがな

都にて思ひやられし富士の根をのきばの岡に出でて見るかな

兼好は和歌に巧みであり、又その緣で貴顯搢紳の許に出入したことは、右に述べたやうである。彼れの家は代代神道家であつて、彼れ自身は佛門に入つた。從つて彼れの學問は儒教をはじめ老莊の間に出入し、和歌に巧みにして且つ佛典に通じてゐた。卽ち彼れの經歷と學殖とは極めて多岐にして多樣であつたことは推察するに難くない。徒然草の中に、

法師ばかり羨しからぬものはあらじ。「人には木の端のやうに思はるるよ」と淸少納言が書けるも……

九條殿の遺誡にもはべる。順德院の禁中の事ども書かせ給へるにも……

顯基の中納言のいひけむ、配所の月罪なくして見むこと……

「末のおくれ給へるはわろき事なり」とぞ、世繼の翁の物語にはいへる……

などあるのを見ても彼れの國文に於ける知識の廣かつたことは察しられるし、

文は文選のあはれなる卷卷、白氏文集・老子のことば、南華の篇……

とあるにても、漢籍に並並ならぬ造詣ありしを知ることができるのである。

儒佛道敎の思想を併せ有し、源氏・枕時代の細やかな情緒に憧憬を感じてゐた兼好は、畢

竟ずるに一個の複雑な思想の持主であつた。されば徒然草一篇の中にも、彼れのこの複雑さが遺憾なく現はれゐるのである。著しいものを擧げても、情緒尊重の主情主義あり、佛教的な現世厭離の思想がある。老子・莊子の虛無的思想があるかと思へば、孔孟の中庸を重んずる傾向があるのであつて、彼れは人生萬般の現象に對して、それぞれその物そのままの姿を肯定しつつも、彼れ自身何等矛盾を感ずることなしに一生を過したのであつて、恰も北條執權終末期の混沌とした世相はそのまま徒然草の中に反映してゐると見るを得るのである。

兼好が出家後、吉田に居た頃、頓阿法師の許へ、

夜も涼し　ね覺めの垣ほ　た枕も　ま袖も秋に　へだて無きかぜ

(即ち「米賜へ。錢も欲し」の沓冠歌)と遣したのに、頓阿は、

夜は憂し　ねたく我がせこ　果ては來ず　なほざりにだに　しばし訪ひませ

(即ち「米は無し。錢少し」の沓冠歌)と返しをした。

徒然草

序

徒然なるままに、日ぐらし硯に向ひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、怪しうこそ物狂ほしけれ。

【口譯】 退屈であるにまかせて一日中硯に向つて、何か書いて見る氣になつて、次次に心に浮かんで來るつまらないことを、何といふ目的も無く書き附けますと、誠に變な氣違ひじみたことであります（即ちさういふ書き物が出來ました）。

【摘解】 ○徒然草—徒然は退屈のこと。草は材料。退屈であつたから其れを消す爲に書いた材料の書であるといふ意○ままに—まかせて○日ぐらし—終日。一日中○硯に向ひ—物を書かうとして文机に向つて硯に親むこと○うつり—「移り」とも

【參考】
○日ぐらし　一日中とか終日とかの意である。これを「日くらし」と清んで讀むと「日を暮らす」意。
○徒然　一、退屈。二、つくづくと物思ひに沈み焦慮する。ここは普通に一の意にするが、二の意が更によいと思はれる。
○硯に向ふ　は、机に向ふといふも同意で、物を書かうとする意を硯といふ一物であらはしたいひ方である。
○よしなし事　由緒(理由・

「映り」とも見られる。次次と心に浮かび出ること○ゆく―彼方へ行くことも、此方に來ることもいふ。ここは來る意○よしなしごと―とりとめもないつまらない事○そこはかとなく―何といふ目的も無く。つい○書きつくれば―書き附けると○怪しうこそ物狂ほしけれ―「怪しく狂はし」を強くいふ爲に「コソ」といつてある。誠に變に氣違ひじみてゐるの意。謙遜して言つたのである。この詞があるので、却て、此の本は發表する考へであつたことがわかる。

（第一段） いでや、此の世に生れては、願はしかるべき事こそ多かめれ。帝の御位はいとも畏し。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御有樣は更なり。ただうども舍人など賜はる際はゆゆしと見ゆ。その子・孫までは、はふれにたれど、猶なまめかし。それより下つ方は、程につけつつ時に遇ひしたり顏なるも、自らいみじと思ふらめど、いと口惜し。

【口譯】 偖、人が幸福を願ふ此の世に生れた以上は、何になりたいと希望に堪へないことが多いものらしいと私は思ふ。先づ帝王といへば、帝

○怪しうこそ物狂ほしけれ　怪しうこそ物狂ほしけれの二つではなく、「怪しう狂ほし」を強める爲コソ（從つてケリがケレとなる）を入れたのである。「う」は「く」の音便、「狂ほし」「狂はし」と同じ。

【參考】

○帝　御門といつて、天皇のことをいふ。それは直接に天皇をさすことが失禮であるから、其の入口にある門を以て其の本體たる天皇をさすのである。

○竹の園生　親王。支那前漢の孝文帝の子たる梁の孝王は、梁といふ地に封ぜられ、兎園といふ三百里の園を作り、多く竹を植ゑて樂しんで住んでゐられた。此の故事によつていはれ）もない事柄。

位は甚だ畏れ多い、ついで皇族はといへば、親王の子孫までも帝王同樣これは神界のお方で人類ではお有りでないから、貴く、とても希望の餘條の中には入れるはずのものではない。次に吾吾が望み得る一番えらい攝政・關白の御有樣は勿論、それ以下の官吏たる高等官程度のものでも朝廷から護衞兵をいただく身分の人だちは、誠にえらいと見える、その人だちのみならず、其の子や孫まではいくら零落しても、まだまだ優美なものである。これを希望する人もあらうが、之は家格上の制限が有つてとても希望は出來ない。其の以下の官吏は、がら相應に官位を得、得して其の世に成功して得意の樣子をしてゐるが、其の人自分だけは、えらいと思つて居るだらうが私から見れば、そんな俗惡なものになつてゐるとは甚だ遺憾に思はれて、私は希望しない。

【摘解】 ○いでや―「さあ」といふ言ひ出しの意味になる時と、「いやはやあきれた」といふ意味になることがある。ここは前意。偖○此の世―「此の世」といふ意味よりも深めた「此の幸福を希ふ人人の住んでゐる世」の意○多かめれ―「多くあるめれ」の約まつた意味。「多くあるらしい」「多いやうだ」の意○帝の御位―帝位○いとも畏し―甚だ おそれ多いことだ○竹の園生―皇族○末葉―子孫の意。「竹」の縁語で「末葉」といふ○やんごとなき―貴い。「已むこと無き」の意で「捨て置かれない」の意からいふ○一の人―攝政や關白。イチジンと讀めば天皇、「一

て親王を竹園といひ、國語では竹の園生といふ。「生」は、蕗生・蓬生・茅生・芝生・淺茅生の「生」の如く「生えて居る處」の意。

○人間の種ならぬ　我が皇室は天照大神の直接の子孫で、神の界に屬して居て、人間世界の人ではないといふ思想。和漢朗詠集に、菅原文時（菅三品）と大江朝綱（後江相公）との詩に二人が暗合して「此の花（親王）は是れ人間の種に非ず」とある。それによつて書いた。

○舍人　昔、近衞府の兵士を舍人といふ（時には、近衞府の將曹・府生・番長をも加へていふ）。昔は天皇よりの命によつて、

の上」は左大臣○御有様○更なり―勿論である。「ゆゆし」き事は勿論の意○ただうど―唯人。「うど」は「ひと(人)」の音便。一、普通の人。二、帝・后に對していふ、臣下のこと。三、官位の低い人。四、官吏ならぬ人。五、高位の人に對し、其の次位ぐらゐの人。六、僧侶に對して俗人のこと。ここは五の意で、「一の人」に對していふ「唯の人」であつて、やはり貴族であるが、一の人の次位ぐらゐの人。「無官の人」の意ではない○舎人―本府の隨身のこと。即ち「護衛兵」のこと○賜はる―いただく。其の護衛兵を定員だけ天皇からいただいて隨身として從伴にすること○際―身分○ゆゆし―えらい。善いことにも、悪いことにも遣ふ語である。ここは善い方についていふ。意味も一、いやである。二、えらい。の二つあるがここは二の「えらい」こと○孫―ウマゴ。まごの意○はふれにたれど―零落したといつても○猶―一、其の上もつと。二、でも、やつぱり。ここは第二の意で、それでも、やつぱりの意○なまめかし―一、優美だ。二、媚かし。ここは一の意○下つ方―「つ」は「の」○程につけつつ―身分相當(柄相當)に、しし、してゐる○時に遇ふ―其の時世に成功してゐる○したり顔―得意さうな樣子。顔は樣子の意。

法師ばかり羨しからぬものはあらじ。「人には木の端のやうに思はるるよ」と清少納言が書けるも、げにさることぞかし。勢猛に罵りたるにつけても、いみじとは見えず、増賀

【參考】
○木の端のやう　木のきれつぱしは何の感情をも持たない無情なものの意。清少納言の枕の草子に

院には十四人、攝政・關白には八人、大臣・大將には六人、納言・參議には四人、少將には二人、衛門・兵衛の督には四人、その佐には二人といふふうに近衛の舎人を護衛兵にくだされたその護衛兵を隨身又は舎人といふ。それは、主人が外出の時は、劍を帶し弓箭を携へて之に從つた。
右表は弘安禮節のであるが兼行時代は稍衰へた。

ひじりの言ひけんやうに、名聞ぐるしく、佛の御教に違ふらんとぞ覺ゆる。ひたぶるの世捨人は、なかなかあらまほしき方もありなん。

【口譯】　次に法師ぐらゐいやのものは外にはあるまいと思ふ。「他人からは木の切れ端の樣に無感情なる者だと思はれてゐるよ」と清少納言が其の著、枕の草子に書いてあるのは、成程、さういふもので、私もその語には同感でありますよ。そんなものには私は希望しない。法師は優勢で、世人の評判が高いが、それについても私はえらいものとは思はれない。彼の増賀上人の言つたかと思はれるやうに、名譽外聞の高いのは、眞の僧から思へば心苦しい事であつて夫では佛(釋迦)の「欲を去れ」といふ御教へにも反さうと思はれる。但し、名譽外聞を離れた全くの世捨人たる僧は、それは却つて、僧にもなりたいといふ思ひ方もあらう。しかしそれも、僧であるから十分の希望のものではない。

【摘解】　○羨　しからぬ者はあらじ―羨しくない者は外にはあるまい。即ち甚だ厭なものだらうの意○げに―なるほど○さる事―然る事。即ち、もつともな事○ぞかし―「ぞ」も「かし」も「よ」といふ意。「ぞ」は強める助詞、「かし」は、言つたこと

「思はむ子を法師になしたらむこそは、いと心苦しけれ。さるは、いと頼もしきわざを、ただ木の端などのやうに思ひたらむこそ、いと、いとほしけれ」とある。
○勢猛に　勢が猛烈で。
○罵り　一、他人をどなりちらす意と只、二、大聲をあげてはしやぎさわがしくいふこととある。ここは一の大威張りに威張り散らす意。
○増賀ひじり　増賀上人。參議たる橘の恒平の子。比叡山の天台座主たる慈惠を師とした人で、大和國多武峰に四十一年も住んで、長保五年六月五日に八十七歳で死んだ。慈惠が僧正に任ぜられた時に其の禮に參内したが其の行列が盛んであつた。

とを更に念を押していふ助詞○イ勢猛に―猛烈な勢で○に、つけても―と、したからとて○いひけん―言つたかのやうに○名聞くるしく―名譽外聞の高いのは、本當の世捨人になつてゐる僧の考では心苦しく思ふ事で○ひたぶる―一圖の。まるつきりの。本當の○なかなか―却つて○あらまほしき方―さうあつてほしいといふ方面○ありなん―有るであらう。「な」は完了助動詞。

人はかたちありさまの勝れたらむこそ、あらまほしかるべけれ。ものうち言ひたる、聞きにくからや、愛敬ありて、言葉おほからぬこそ、飽かずむかはまほしけれ。

【口譯】 人間は容貌・風姿の立派であらうといふそのことが、誠に願はしい事でありませう。ちよいと物をいつても、それが耳ざはりでなく、愛嬌があつて、口數が少い、と、かういふやうな人は、誠にいつまでも對ひあつて話しがしてゐたいのであります。

【摘解】 ○かたち―容貌・顏つき○ありさま―風采とか風姿とかいふ意○あらまほし―望ましい。さうありたい○ものうち言ひたる―「うち」は接頭語。ちよいと何か物をいつても。「言ひたる」の下に「事も」など入れて見る○愛敬―今いふ愛嬌。態度や容貌がかはいらしいこと○むかはまほし―好きで向かつてゐたい。

増賀は乾鮭を太刀のやうに佩き牝牛に乘つて其の行列に加はつて「名聞こそ苦しかりけれ。乞食のみぞ樂しかりける」と歌つて去つた。此のくるしを連濁して「ぐるし」とし其の言の意をとつて「名聞は苦しい」とする。

【參考】
○あらまほし　ありたいと思ふこと。「むかはまほし」の「まほし」も、この「まほし」も同じ語。「何何して欲しい」といふ願望の意を表はす。
○飽かず　飽きないで。何時までも何時までも向かつて對談してゐたいことをいふ。

めでたしと見る人の、心おとりせらるる本性見えむこそ、口惜しかるべけれ。品かたちこそうまれつきたらめ、心はなどか、賢きより賢きにも、移さば移らざらむ。かたち心ざまよき人も、才なくなりぬれば、品くだり顏にくさげなるにも、立ちまじりて、かけずけおさるるこそ、本意なきわざなれ。

【口譯】 立派な人だと思つてゐる人が、案外さうでなくて、どうかした拍子に、鍍金が剝げてその輕蔑に價する、地金が表はれたとしたら、誠にどうも、殘念千萬なことでありませう。門地とか容貌とかは生れつきのもので仕方ないとしても、人の心といふものは、自分でさうする意志さへあるならば、賢い上にも賢い方へと移し變へることがどうして出來ないでせうか、必ず出來るのであります。たとへ、容貌や氣立が立派な人であつても、學藝がなくては、自分よりも門地も下で容貌も醜い人とも伍して、それらの人からわけもなく壓倒されてしまふのでありまして、誠に情ないことでございます。

【參考】
○移さば移らざらむ　「移さば」は將然形である。「移せば」の已然形でないことに注意。まだ移さないが、もし移すとするならば、移らない筈はないといふ意である。心を賢い方へ移さうといふ意志がありさへすれば、必ず移るといふのである。意志がなければ、移る筈はない。一語「移さば」を挿入しただけで、文に含蓄が深くなつてゐる。
○才　サイでは無くザエと讀む。學問や藝術、若しくは其の兩方をいふ。
○めでたしと見る人の「めでたし」は甲人。「見る」は乙人。「人」は甲人。「の」は「が」
○心おとりせらるる本性見えむ「心おとり」は乙人が心おりして見る、即ち

【摘解】 ○めでたし―愛(メ)でたしの意。偉い。結構な。立派な○心おとりせらる る本性―「心おとり」とは前以て我が考へてゐたのよりも劣る。「本性」は見られる人の本來の性質。即ち今までめでたしと見てゐた人は、實は、見られる人が下劣な本性を隠してその上に鍍金をしてゐたので、その鍍金にだまされてめでたしと思つてゐたのであつて、その本性つまり地金を知るに及んで、心外に思ふこと○口惜し―物足りない。殘念である○品かたち―門地と容貌。「品」は次の「品くだり」の「品」と同じ○などか―「どうして……であらう、否必ず……である」といふ意を示す。反語○心ざま―心の持ち方。氣立○才―學藝のこと。才能といふ意味に用ひられることは、中世の文章では、殆どない。「才なくなりぬれば」は「才がない」との意。元あつたのが無くなるのでない○かけず―軍記物語などにある「胸板かけず射通し」の「かけず」と同じで、滯ることなく、すつぱりとの意。ことでは從つて、何の手答へもなく、わけもなくの意○けおさるる―「け」は接頭語。壓されることの○本意―階級論で望まれないものを上にいつたが、今度前節とともに人間一般について述べた。即ち容貌・風采のよからんことは望ましい事だが、それは先天的であるから希望してもだめである。それよりは心の修養が大切である。それは希望すべきものである。それには才即ち學藝が大切であるの意。

ありたきことは、まことしき文の道、作文・和歌・管絃の道。また有職に公事の方、人の鑑ならむこそいみじかるべ

豫想に反して、つまらぬ甲人だなあと思ふ。「せらるる」は、つい乙人が、甲人をさう思ふやうになる。「本性」は甲人の本性。「見えむ」は「見られる」即ち、甲人が乙人に、豫想に反して、つつまらない人であつたと見拔かれる其の本當の性質。

○口惜しかる 一般に云つて「口惜しい事だ」の意。

○品くだり 額にくさげなる下に「人」と入れて見る。甲が斯ういふ人物だといふのでは無い。斯ういふ下層社會の人の意。

【參考】

○管絃 古代の日本音樂で用ひられた樂には、打

けれ。手などつたなからずはしり書き、聲をかしくて拍子とりいたましうするものから、下戸ならぬこそ男はよけれ。

【口譯】 人として具へたいことは、(一)實際的の學問の道、(二)詩文を作る力・和歌・音樂の道であります。(三)更に又、有職とか公事の方面で、人の手本となるといふやうなことも大變結構なことであります。その他、字も相當に達者にすらすらと書き、聲面白く拍子を取つて歌の一つも歌ひ、恐縮して辭退はしてみせても、全くの下戸ではなく、少しは酒の相手もできるといふやうなのが、男としては贊成できるのであります。

【摘解】 ○まことしき文の道―實際實用になる學問といふので、つまり國家經綸の上に役に立つ學問。儒道でいふ修身・齊家・治國・平天下の道を學ぶことである。四書・五經等に通ずること。「四書」「五經」等の經書をいふ○作文―漢詩賦を作ること○管絃の道―管は管樂器(笛の類)、絃は絃樂器(琴の類)で、音樂の道をいふ○有職―官職や公家の故實をいふ○公事―朝廷に於ける政務だの行事だのをいふ○人の鑑○いみじ―えらい。結構である。「いみじ」は非常にの意。善惡共に用ひる○つたなからず―拙からず。まづくなく○はしり書き―走り書き。達者にすらすら書くこと。急いで書くといふ意ではない○拍子(ホウシと發音)拍子をとる事。

樂器に太鼓・小鼓・鼓等、管樂器に、横笛・篳・篥等、絃樂器に和琴・琴・琵琶等がある。

○有職 有職故實ともいふ。有職は有識の誤りであるが、古來有職とも書き來つた。朝廷・武家の、きまりの儀式をよく知つてゐる事。

○まことしき文の道、作文・和歌・管絃の道 文脈は、

(一)まことしき文の道
(二)作文・和歌・管絃の道

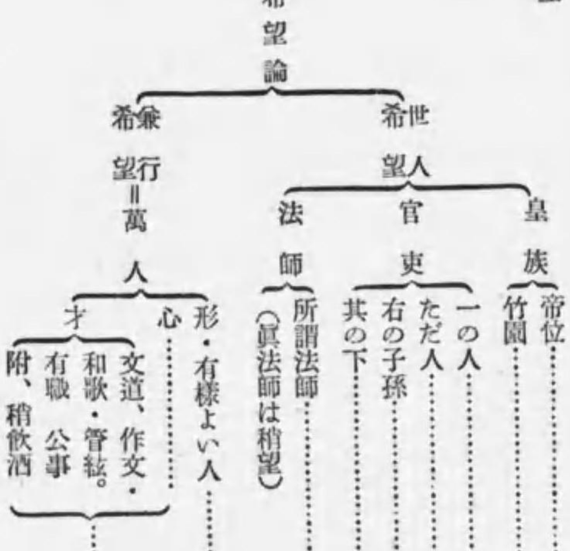
○ゾ・コソ(ナン・ヤ・カ)は係辭である。ゾは活用言の連體形、コソは活用言の已然形で結ぶ。

人間のたねならぬゾやん
　　どとナキ

佛の御敎に違ふらんとゾ

歌を歌ふ時に、手や、或は手にした笏でもつて「ひやうし」を取ること。「聲をかくして拍子とり」は「上手に拍子をとつて聲面白く歌を歌ふ」の意である○いたましうするものから―「いたみ入つて恐縮はするものの」の意。「ものから」は「ものながらも」の意○下戸―酒を多く飲まぬこと○男―女はいけないが男ならばよい。

全文組立



疊ユル
かたち有様のすぐれたらんコソあらまほしかるべケレ
言葉多からぬコソ飽かずむかはマホシケレ
本性見えむコソ口惜しかるべケレ
品かたちコソ生れつきたらメ
けおさるるコソ本意なきわざナレ
人の鑑ならんコソいみじかるべケレ
下戸ならぬコソ男はヨケレ

（第二段） いにしへの聖の御代の政をも忘れ、民のうれへ、國のそこなはるるをも知らず、よろづに清らをつくして、いみじと思ひ、所せき樣したる人こそ、うたて思ふところなく見ゆれ。

【口譯】 昔の聖天子の御代の仁慈な政治をも考へず民の憂愁も國の損失も構はず、萬事に華美を盡してそれが偉いと考へ、あたり狹しと傍若無人の樣をしてゐる權臣は誠に歎かはしく、思慮の淺い人間だと思はれる。

【摘解】 ○いにしへの―日本のみならず―支那も含む○聖の御代―聖天子。德の高い君主の治世○清ら―華美なこと。「きよらか」といふ意もあるが、ここでは奢侈華美の意○いみじ―えらいことと思ふ○所せき樣―まはりが狹いやうな樣子。つまり、あたりせましと横行闊歩すること○うたて―歎かはしくあつて○思ふ―考へ。

「衣冠より馬車に至るまで、あるに從ひて用ひよ。美麗を求むる事なかれ」とぞ、九條殿の遺誡にも侍る。順德院も禁中の事ども書かせ給へるにも、「公のたてまつりものはお

【參考】
○聖の御代　支那で古くは堯舜の世、周の文王・武王の世、下つては唐の太宗の貞觀の治などを指し、日本では延喜・天曆の御治世の如きをいふ。權臣ならば、聖天子の意を體して銳意治を助けようと考へなければならぬ又人民の疾苦も察してますます善政を考へて君を補佐してその人民を安らかにすべきであるのに、さうはせざる意であるから、うたて思ふところ無い權臣だと爲好はいふ。

【參考】
○九條殿の遺誡　「衣冠より始めて牛車馬に及ぶまで有るに隨ひて之を用ひ、美麗を求むる勿れ。

ろそかなるをもてよしとす」とこそ侍れ。

【口譯】「衣や冠を始として馬や車に至るまで、わざわざ立派なものを作つたりせず、有りあはせの物を用ひよ。好んで華美な物を求めるな」と、九條師輔公の遺しおかれた誡めに記してあります。順德天皇が宮中の事を種種お記しなされた物の中にも「天子の御召し物は粗末なのがよい」と書いてありますよ。

【摘解】○衣冠―着物と冠と○馬車―馬と車との意。車とは牛車○九條殿―九條（藤原）師輔のこと。關白忠平の子、天暦元年に右大臣に進み、天德四年に五十三歳を以て薨じた。朱雀・村上兩天皇に仕へ、子孫のために遺誡一篇を殘した人○侍る―ラ變の連體形○順德院―第八十四代順德天皇を申し奉る。後鳥羽天皇の第三皇子、承元四年御即位、承久三年位を仲恭天皇に讓らせられ、承久の亂後佐渡國に御遷幸なされ、その地に崩じ給うた、時に仁治三年、寶算六十四○禁中の事ども書かせ給へる―禁秘抄をいふ。「給へる」は「給へる書」の意。禁中は宮中○公―天子○たてまつりもの―奉り物。御召し物。「たてまつる」は「まゐる」と同じく、廣く、食ふ、飲む、着る、乘るなどの動作について用ひる敬語であるが、ここでは「着る」について用ひた。臣下より奉納するものの意ではない。

（第五段）不幸にうれへに沈める人のかしらおろしなど、ふ

【參考】己の身を量らず、美物を好めば、則ち必ず嗜欲の誘を招く」（原漢文）○禁中の事ども云云　禁秘抄の卷上の「御裝束事」「但し天位着御の物、疎を以て美と爲す」（原漢文）○係結法

……とゾ―九條殿の遺誡にも侍ル

……とコソ―侍レ

○命令形

用ヒヨ

ナカレ

○給ヘル

下に（書き物）などを入れて見よ。「給へ」といふ四段已然形の下に「ル」といふ完了助動詞の連體形。

つつかに思ひ取りたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つこともなく、明し暮したる、さるかたにあらまほし。顯基の中納言のいひけむ、「配所の月、罪なくて見む」ことさもおぼえぬべし。

【口譯】不幸な立場にあつて哀愁にとざされてゐる人が、例へば剃髮してこの愁を忘れるとか、又僧となつて一旗揚げようなどと、あわてて前後のわきまへもなく一途に思ひつめて佛門に入るといふやうなのではなくして、大仰に出家するほどでもなく、家の内に閉ぢこもつて、住んでゐるのか居ないのか一寸見では分らないやうに靜かに住んで、門も閉ぢ、何といつて別に期待することもなく、毎日を靜かに暮してゐるといふやうな生活態度にありたいものであります。源顯基中納言が「配所で見る月は靜寂で捨て難い趣があるものである。その配所の靜寂の月を、何の罪もなく晴れ晴れした心で眺めたい、さぞ好い氣持がするでありませう」といはれたやうだがいかにもたしかに、さう感ぜられるでせう。

【摘解】○不幸に―不幸によつて○かしらおろし―剃髮して佛の道に入る○ふつつか―不細工であること。深い思慮のないこと。「かしらおろしなどふつつかに思ひ

○配所の月　撰集抄に、「中納言天台山に登りて頭おろして大原といふ所になむ行ひすましていまそかりける。朝に仕へしそのかみより、明け暮れ、あはれ罪なくして配所の月を見ばやと涙を流し」又、發心集の卷五の中納言顯基出家籠居の事の條に「若うより司位につけてうらみ無かりけれど心は此の世の榮を好まず深く佛道を願ひ、菩提を望む思ひのみあり、常の言草には、彼の樂天が詩に、古墓いづれの世の人ぞ、姓と名とを知らず、化して路傍の土となりて、年年春草生ひたりといふことを口づけ給へり。…朝夕琵琶を彈きつつ、罪無くして罪をかうぶりて配所の月を見ばや

取りたるにはあらで」は、途中に挿入された句で、文は、「不幸にうれへに沈める人の、あるかなきかに門さしこめて云云」と續くのである。「かしらおろしなど云云」の挿入の一句は、「不幸に見舞はれてすぐ何の深い思慮もなく、あわてて剃髪して佛門に入つてしまふといふのではなく」といふのである○さしこめて―鎖(サ)して我が身を入れこめ○さる方に―さういふやりかたで○顯基中納言―源　顯基のこと。長元二年に參議になり、同八年權中納言になつた。後一條天皇の近臣であつたが、天皇崩御の後出家して、京都の北郊の大原の里に住んでゐた。永承二年に歿した。年四十八○配所の月云云―「配所」は罪人の流された土地。罪に落ちて配所に流された人が、そこで月を見るときは、故郷の事や、親子兄弟のことが種種思はれて、その靜寂の月の光も雜念が入つて寂しさに徹することが出來まいが、流人でなくて此の靜寂の月を見たい○さもおぼえぬべし―然やうに思ふことであらう。

(第七段) あだし野の露、消ゆる時なく、鳥部山の烟、立ち去らでのみ住みはつる習ならば、いかにものの**あはれ**もなからむ。世は定めなきこそいみじけれ。

【口譯】 人は、間も無く消ゆる露（例へばあだし野の露）の如く死に（消ゆる）去る、といふ死の時もなく、間もなく立ち去る烟（例へば鳥部山の烟）の如く死に（立ち去る）去る、といふ死もなくてばかし、永久に生き住みおほせる習はしのものであるならば、物の趣きといふものもどんなになくなることでありませうか。一體、世の中は無常で常に變化があることが誠にいはれぬ面白味があるのであります。

【參考】
○あだしの露、消ゆる時なく、鳥部山の烟、立ち去らで住みはつる習　露の如くに消え、烟の如くに去る、それをせず、永生のものならばの意。無常の哀れを連想させる爲、となん願はれける」とある。
○おぼえぬべし　「ぬべし」の「ぬ」は現在完了、「べし」は推量の助動詞である。この場合「ぬ」には時間の意味はなくて、「きつと、それにちがひない」などの意。
○罪なくて見む　「見ん」は、ここでは「見よう」といふのではなく「見たい」といふ意味である。

【摘解】 ○あだし野―京都市右京區嵯峨の奥、愛宕(アタゴ)山の麓の地で、昔は墓地があつた○消ゆる―（あだし野に）おく露は間もなく消えるのがあたりまへで、それが此の世のならはしである。その如くは消えないといふのだから、死なぬの意○鳥部山(トリベヤマ)―京都市東山區阿彌陀峰の附近。山の下を鳥部野といつた。火葬所があつた。それで煙といふのは、この火葬場の煙である○立ち去らでのみ―死なぬの意。この「のみ」は「少しも消えず、全く立去らず」といふ風に上の句の意味を強める時に用ひる○住みはつる―住んで住んで、住みぬくこと。「はつる」は最後まで行くこと○もののあはれ―「もの」は、漠然といつてゐる言葉、「あはれ」は趣味、面白み○定めなき―變化流轉してゐる無常○いみじ―えらい。それが、えらく趣があるの意。

(第十段) 家居のつきづきしくあらまほしきこそ、かりのやどりとは思へど、興あるものなれ。

【口譯】 住居の樣子が、すべて似合はしく、何もかもよく調和がとれて

「あだし野」「鳥部山」を序として附けたのである。
○鳥部山の烟　トリベヤマノケブリ。烟はケブリともケムリともいふ。ここはケブリと讀んでである。
○去らで　「デ」は「ズテ」の意。「ズシテ」の意である。
○いかにもののあはれもなからむ　「物の哀れも、いかに、無からん」の意である。
○無きコソ　コソと係つた故、イミジケレと結ぶ。

【參考】
○家居　強ひて區別すると、「家」は建築物の方をいひ、「居」はそこに住まつてゐる人の住みかたをいふ。

ゐて、ああこれはよいわいと思はせるやうなのは、無論家など此の浮世に於ける、ほんの假の宿とは、十分承知してゐるものの、誠に面白いものであります。

【摘解】 ○家居(イヘヰ)―家屋に住まひするといふこと○つきづきしく―似合しく。即ち、庭でも部屋でも何もかも、しつくりとよく調和されてゐること○あらまほしき―さうありたいこと○かりのやどり―佛教思想から來た語。此の世の中のほんの一時の假り住居。

よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、一きはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきららかならねど、木だち物ふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子(スノコ)・透垣(スイガイ)のたよりをかしく、うちある調度も昔覺えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

【口譯】 相當の身分もあり、物の趣味をも解する人が、のんびりと物靜かに住んでゐるところは、その家に差込む月の光までさへも、外(ホカ)の所よりは一層、身にしみて趣ありげに感じられるのでありますよ。で、その

○つきづきしくあらまほし 「つきづきしく」ありたいのではない。一方に於て「つきづきしく」一方に於て「あらまほしき」のである。「つきづきしく且あらまほしき」のである。

【參考】
○わざとならぬ 庭師の手をわづらはして、殊更に植ゑ附けたり、刈込んだりしたのではなく、自然のままのやうに見えること。兼好の趣味の一つは、「何事もわざとならぬ」ことであつた。
○心ある 「心」には理性の方面と感情の方面との二意がある。「心ある」も、從つて、「思慮のある」と「情趣の深い」との二つ

住居のさまは、當世風に派手な華美な點はないけれども、庭の植木なども、どこか時代がついてをり、自然のままの庭前の草の一つ一つさへも、いかにも趣が深いやうに眺められ、又、簀子(スノコ)縁(エン)や竹垣などの造り方も面白く、何氣なく置いてある手廻り道具も、技巧を加へぬ昔風であつて、少しもわざとらしくないのが、誠に奥床しく感じられます。

【摘解】 ○よき人―地位も相當で、教養を持つてゐる人○のどやかに―のびのびと。靜かに○住みなしたる―住んでゐる。「なしたる」は「住む」といふ動作を「してゐる」の意、つまりここは住居をしてゐるといふ意○月の色―月の光○一(ヒト)きは―一際。外(ホカ)の所に比較して見て、一層の意○今めかしく―當世風に。現代式であるが、その悪い點、缺點の方をよけいに取込んだ現代式の意○きららか―きらきらと光つてゐること。不必要にまで飾りたてたのをいふ○木だち(コ)―立木(タチキ)。庭に植ゑこんだ木○ものふりて―「もの」は何となくの意。「ふり」はふるびて。時代がついて○わざとならぬ―わざわざ手を加へた所も見えないで、自然のままのやうに見えること○心あるさま―情趣ある樣子で○簀子(スノコ)―竹又は細い板を、少し間をすかせて並べて、打附けた縁(エン)○透垣(スイガイ)―透けて向うが見えるやうに造つた垣。スキガキの音便○たより―造りぐあひ○うちある―ただ、ちよいと何氣ないやうにしたことをいふ○調度(テウド)―手廻りの諸道具類○昔覺(ムカシオボ)えて―昔ふうで。由緒ありげに古風な感じのすること○やすらかなる―わざとらしいのではなく、穩當(コシタウ)であること○心にくし―奥床しいの意。

がある。ここは「情趣ある」方の意。
○調度 今ではテウドと清(ス)んで讀むが、昔はデウドと濁つて讀んだ。
○ぞかし 「ゾ」は其の說述したことを、强く言ひ定める意である。「何ゾヤ」などといふ說述に誤り認めて「カ」といふ疑問の語としてはならない。「カシ」は說述を終へた後につけて、更に「念を押していふ」語である。「サウデスヨ」と繰り返して念を押していふ語である。
○心にくし 憎い意味ではない。奥ゆかしい意味である。「詞がたき」なども敵の意ではなく、仲のよい話相手の意。

多くのたくみの心をつくして磨きたて、唐の、大和の、珍らしく、えならぬ調度どもならべおき、前栽の草木まで、心のままならず作りなせるは、見る目も苦しく、いと侘し。さてもやはながらへ住むべき。また時のまの烟ともなりなんとぞ、うち見るより思はるる。大方は家居にこそ、ことざまはおしはからるれ。

【口譯】 數多の工匠達が精魂を傾けて磨きあげた家・邸に、支那から渡來したのや、或は日本で出來たのや、すべて珍奇で、いふにいはれぬ立派な諸道具を並べて置き、庭の草や木の一本一本に至るまで、草木本然の性質を無視して、無理に人手を加へてこしらへてある、かういふ住居は、見ただけでも、もう不愉快な感じがしてしまつて、實にいやなものであります。さういふ風に磨きたて、飾りたて、造りあげて見たところで、何時までもそこに永生きすることはできはしません。また、一瞬の間に火に燒けて、煙と化しさることもあらうと、ひよいと見ただけでもすぐ考へられます。大體、住居の樣子を見ると、誠に、その家の主人の平生

【參考】
○たくみ　一、經營。二、器械で物を造る職人。三、大工。ここは三の意。
○前栽　ゼンサイとは讀まず。センザイと讀む。
○心のままならず　草木の自然のままの發育を無視して、人間の望む通りに、曲げたり刈込んだりすることをいふ。
○大方は云云　「大方は家居にこそ、ことざまはおしはからるれ」の一句は、今迄いろいろと述べて來た住居に關することを一括して結論的に述べた兼好の感想である。
○磨きたて　「たて」の意が強めるものであることは「數へ立て」「言ひ立て」「論じ立て」などでも知らる。
○唐　昔、朝鮮のことを韓

の樣子は推量されるものであります。

【摘解】 ○たくみ―工。工匠。大工○唐の―支那製の。支那から舶來の珍奇な品物○大和の―日本製の○えならぬ―何ともいへないほど立派な○前栽―庭○心のままならず―草木の自然の發育にまかせずに。「心」は草木の心である○見るめも苦しく―見てもいやになる。見た感じもわるく○詫し―それを見て「わびしく」なることである。「わびし」はつらい。いやになる○さてもやは―「も」は「さて」を強めた助詞。さうして見た所で、その家にいつまでも住むことができようか、いや、できはしないといふ反語○時のまの烟―「時の間」は一瞬の間のといふ意。一瞬の間に煙に化し去ること。火事で燒け失せる事○大方は―大體は○ことざま―事の樣子。ここでは、そこに住む主人の心の樣子である。

後德大寺大臣の寢殿に、鳶ゐさせじとて繩を張られたりけるを、西行が見て、「鳶のゐたらんは、何かは苦しかるべき。此の殿の御心、さばかりにこそ」とて、そののちは參らざりけると聞き侍るに、綾小路宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩をひかれたりしかば、かのためし思ひいでられ侍りしに、誠や、「烏のむれゐて、池のかへるをとり

といつた。支那は同じく日本からいへば外國であるから、韓の意を延長して唐といふ。それを更に延長してひろく南洋・前印度邊までも唐(漢とも)いふ。
韓をカラといふは、崇神天皇の御代に今の朝鮮の西南端なる伽羅國の王子が來朝し、外人歸化の始をなした。それ以來外國の意で朝鮮をいつた。

【參考】
○寢殿　南面して寢殿といふ。主家があり、東方に東の對、西方に西の對（これらを總稱して對の屋といふ）がある。寢殿の前は庭になり、泉水を掘り、築山を作り、中島を作る。東西の對の屋から南方に廊が渡され、東方は泉殿、

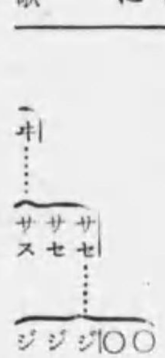
ければ、御覽じかなしませ給ひてなん」と、人のかたりしこそ、さてはいみじくこそと覺えしか。徳大寺にもいかなるゆゑか侍りけん。

【口譯】 後徳大寺の左大臣實定卿が自分の邸の寢殿に鳶をとまらせまいとして、繩をお張りになつたのを西行法師が見て、「鳶がとまつたからといつて、何が不都合だといふのだ。此の殿様の考へも、そんな程度かな」といつて、それから後には、實定卿の所へは伺候しなかつたといふことを聞いてをりますが、綾小路宮様のいらつしやる小坂殿の屋根の棟に、何時でありましたか、やはり繩をおはりになつたことがありましたので、例の西行法師の話も思出されましたところが、これは、ほんにまあ、「烏が澤山居て、池の蛙を捕りましたので、それを宮様が御覽になりまして、可哀相に思し召され、それで繩をお張りになりましたのです」と、或人が語りましたが、さういふ次第であつたと知つては、まことに御殊勝なことだと考へたのでした。それにしても、後徳大寺殿の方にも、何か、理由があつたのかもしれません。

【摘解】 ○後徳寺大臣―藤原實定。（ジッテイとも讀む）。左大臣に任ぜられ、和歌西方は釣殿に連なる。

○西行が云云　此の話は古今著聞集の十五卷に出てゐる。

「西行法師、出家よりさきは、徳大寺左大臣の家人にて侍りけり。多年修行の後、都へ歸りて、年頃の主君にておはしますむつまじさに、後徳大寺左大臣の御許にたどり參りて、まづ門外より内を見入れければ、寢殿の棟に繩を張りけり。あやしう思ひて人に尋ねければ『あれは鳶するじとて張られたる』と答へけるを聞きて『鳶の居る何か苦しき』とてうとみ歸りぬ」



の名人。建久元年に辭職し、翌年入道したが、間もなく薨じた。年五十三。「ほとときす鳴きつる方を眺むればただ有明の月ぞ殘れる」の歌はこの人の作である○寢殿―所謂、寢殿造りの建築の正殿○西行―歌僧。俗名は佐藤義清。後鳥羽上皇に仕へて北面の武士となつたが、世の無常を感じ、二十三歳の時に入道して西行といつた。各地を行脚して風月に吟詠し一代の歌人といはれた。建久元年二月十六日、七十三歳で入寂した○此の殿―後徳大寺殿○綾小路宮―性惠法親王を申す。龜山天皇の皇子○小坂殿―性惠法親王の御住居になつた御殿の名○かのためし―あの例。つまり、今いつた西行の話○まことや―ほんたうにまあ○御覽じかなしませ給ひてなん―「なん」の次に「かくはせさせ給ひしなる」といふやうな語が省かれてゐる○覺えしか―思はれた。感じられた。「しか」は上の「こそ」の結○徳大寺―後徳寺と同じ。煩はしいから本來は「後」があるが、略した。

（居）

キ
キル
キル
キレ

（サスル
サスレ

○人のかたりしコソ（さてはいみじくコソ「アレ」と）覺えシカ

○さばかりにこそ　下に「あれ」、「給ひてなん」下の「ある」の意を略す。

○參らざりげると　文法的には「ける」を「けり」とすべきである。

（第十一段） 神無月の比、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ること侍りしに、遙かなる苔の細道をふみわけて心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるるかけ樋のしづくならでは、つゆおとなふ物なし。閼伽棚に菊・紅葉など折散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。

【參考】

○遙かなる苔の細道をふみわけて、心細く住みなしたる庵あり　苔の細道が一本、いかにもほそぼそと續いてゐる。誰一人通らない。細道の奥に、一つの庵を見出した。兼好の趣味に完全に合致する

【口譯】 十月の頃、栗栖野といふ所を通りかかつて、とある山里に訪ねはひつて行つた事がありました。で、遙かにつづいてゐる苔むした一本の細道を踏みわけたその奥に、いかにも、しんみりと心細げに住まつてゐるやうな庵が一つあるのが見えました。そのいほりに行つて見ると實に閑靜を極めてゐる所でして、まづ訪れるものとては、落葉の一杯たまつてゐる下の筧から落ちる雫の外には、何一つ聲立てるものはないといふやうな有樣であります。ふと傍の閼伽棚を見たら、菊や紅葉などを折つて投げ置いてあるのが目に入りました。やはり、住む人があるからでせう。よくもまあ、こんな淋しい所に住んでゐられるわいと、そぞろに、この庵の主人の心も奥床しく感じられて、しみじみと眺めてをりました。

【摘解】 ○神無月―陰暦十月○栗栖野―京都市伏見區醍醐の邊の古名○遙かなる苔の細道をふみわけて―遙かに長く續いてゐる、苔におほはれた細道がずつとあつての意○心細く住みなしたる庵―見ると如何にも心細げに感じられるほど、ただ一軒の庵が、しよんぼりとある。庵の主人自身もさぞ心細く住んでゐるであらうと思ひやつて、兼好が自ら「心細い」庵と感じた心を、そのまま庵の主人の心に及ぼした言ひ方である○かけ樋―筧とも書く。山の清水を竹などで宙に導いて又棒で支へて來させる裝置○つゆ―少しも○おとなふ―訪れる。筧の雫がぽたりぽたりと垂れるやうな場所であり雰圍氣である。

○十二箇月の異名
一月……睦月
二月……如月
三月……彌生
四月……卯月
五月……皐月
六月……水無月
七月……文月
八月……葉月
九月……長月
十月……神無月
十一月……霜月
十二月……師走
シハスはシワスと發音

○讀み方
神無月　カミナヅキ
　　カンナヅキ
栗栖野　クルスノ
細道　ホソミチ
庵　イホリ
（イオリと發音）

音だけが、この庵をおとづれる、ただ一つのおとづれで、外には誰も訪ねるものもないことをいふ○閼伽棚―「閼伽」は梵語で「水」のこと。轉じて、佛に奉る水のことになる。閼伽棚はその水を入れ物に入れておいておく棚。

かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に、大きなる柑子の木の、枝もたわわになりたるが、まはりを嚴しく圍ひたりしこそ、少しことさめて、此の木なからましかばとおぼえしか。

【口譯】 ああ、かういふ寂しい所にも、住めば住まれるものだなあと心から感じ入つて、あたりを見まはしてをります内に、向うの庭に、枝も撓むほどに實のなつてゐる大きな蜜柑の木が、その周圍を嚴重に圍んであるのを見出しましたが、どうもいささか興がさめて、なんと、この木が無いならよからうに、此の木が、用心してあるので矢張り庵主は慾張りな俗物だと思ひました。

【摘解】 ○かくてもあられけるよ―此のやうな寂しいところでも住めば住めるわいの意。「あられ」の「れ」は可能の助動詞○あはれ―心からしみじみと感じたことを示す。「あはれにおぼえて見るほどに」の略と見るべきである○柑子の木―蜜柑と同木の葉　コノハ
閼伽棚　アカダナ

【參考】
○少しことさめて　兼好は山里の庵へ訪ねてそれほどの世捨人なら蜜柑が出來たら誰に呉れてもよかりさうな無慾なものである。嚴重に圍つた蜜柑を見て今まで奥床しく感じてゐた主人公の人柄が一度に憂無しになつてしまつたのである。
まはりをきびしくかこつたのは、一、他人に實を盜まれまいとの爲。二、霜や雪に傷められぬ爲に根もとをかこふ。との二説がある。何れにしても物慾の心ある意に當る。
○係結
まはりを嚴しく圍ひたり

じ類。實は今のよりもずつと小さく、味も酸く、種子が多い。實を食用にした○たわわ―たわむほどに○なりたる―實がなつてゐる○ことさめて―興がさめて○なからましかばと―「ないならば、よからう」。「なからましかばよからまし」の意。

(第十二段) 同じ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしき事も、世の果敢なき事も、うらなく言ひ慰まんこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらんとむかひゐたらんは、獨ある心地やせん。

【口譯】 自分と氣が合つてゐるやうな友人と、しんみり話をし合つて、其の話は互に面白く感ずる事柄でも、また、世間のくだらない事柄でも、遠慮なく氣をおかずに話合ふことは（之は親友といふもの故）誠に互に嬉しからうと思はれるけれども、此の世には、さういふ親友が有りさうでないから、少しもお互に相手の心に違はないやうにしようと思つて對坐して話合つてゐたならば（之は面友といふべき者で）氣づかひばかりして、恰も自分一人でゐるも同樣な寂しい心持がしよう。少しも言ひ慰むものではなからう。

【參考】
○世の果敢なき事　「世間話」の意。「此の世の無常なる事」の意ではない。
○べきに　「べき」は助動詞の連體形。其の下に「に」といふ助辭があれば、反對又は意外の意となる。由て「のに」の意に譯す。「言ひ慰まん」は「言ひ慰めん」とは違ふ。
○心地やせん　「心地せんや」を強めた言ひかたである。「誰あるか」を「誰かある」などいふのと同樣。
○うらなく言ひ慰まんコソ嬉しかるべきニ　コソの係辭に對して、「嬉しかるべケレ」と結ぶべきに、下に「ニ」が有り、其の「ニ」に接せしむる爲に、結びの「べケレ」を轉じて「ニ」に接せしむる爲に「べキ」「ニ」にとしたのである。

【摘解】 ○同じ心ならん人―親友。兼好でいへば、趣味性が同樣でもあらうといふ人○物語―話○をかし―面白み○世の果敢なき事―世間にあるくだらない、つまらない世間話○うらなく―心おき無く。「うら」は「心」○言ひ慰まん―互に言ひ合つて互に嬉しと思はう○嬉しかるべきに―嬉しくあるべき筈なのに。「べき」は筈。「に」は「のに」○さる人―さういふ人。即ち親友○あるまじければ―有るまじ、さればの意○つゆ―少しも○心地やせん―「心地せんや」と同じ。心持がするであらう。「獨ある」は「寂し」の意で、言ひ慰むことにはならない。

互にいはん程の事をば、げにと聞く甲斐あるものから、聊かたがふ所もあらん人こそ、「我れはさやは思ふ」など爭ひ憎み、「さるからさぞ」と打語らはば、徒然慰まめと思へど、げには少しかこつ方も。我れと等しからざらん人は、大方のよしなし事言はん程こそあらめ、まめやかの心の友には、遙かに隔りたる所ありぬべきぞわびしきや。

【口譯】 （今度は自分と大同小異ある友の事をいふが）お互に話し合ふやうな事柄を、相手が「成程さうだ」と話相手になつてよく理解してく

【參考】
○聞く甲斐あるものから　理解して同意に聞いてくれるのは、友達甲斐があるとうれしく思ふけれども、しかし。
○げには少しかこつ方も　下に「有り」と入れる。
○程こそあらめ　「程こそ(よく)あらめ」の意。此の言ひ方は國文に多くある注意を要する。勿論コソと係つた故ラメと結んだのである。

れて聞き入れてくれる友達甲斐はあつても（自分とは小異の有る友であつて）少しは自分と意見の異なるものもあるやうな友は、誠に「イヤ、私はあなたの言はれる様には思はない」などと、言ひ争ひ、「かういふわけだから、それでかういふのだ」などと反對理由を説明したりなどして話し合ふのは、只默從してゐるのとは違つて、話に花が咲いて退屈しのぎになることであるとは思ふけれども、（その少しでも意見が自分と違つて反對説のあるだけ）成程なあ、（親友の場合とは違つて）少少、自分には不足がましく思はれる。（それにつけても）我れと全然同心である親友ではなくて（等しい心でない友即ち大同小異の友）はまあ、世間話といふやうな（大體どちらになつても差支はないといふつまらぬ）事をお互に言ひ合つて居るなどのうちは、それでもよいだらうが、さあ眞劍の話をするといふ場合になると、誠の心の友即ち親友に比べると、ずつとたしかに感じの違ひが有る事になるのが、自分としては物寂しいのである。

よ。どうしても全然同じ心の友即ち、親友が一番よいのである。

【摘解】 ○げに云云―成程あなたの御話の通りだと言つて、共鳴してくれる點が、自分にはかひのある心持がする。甲斐は宛字○ものから―ものではあるが、しかし○たがふ―自分とは少少心の行き方が違ふ即ち心の大同小異ある人○さやは思ふ―然うは私は思ひませうか、思ひません。あなたには反對です○爭ひ憎み―此の「憎

○わびしきや　「や」は感動詞である。

○この文は、兼好の説としては、大同小異の友では不十分で、全然の親友でなければ不可だといふのである。

○此の文は難解の文であるから、よく口譯と照合して見て貰ひたい。これらの文が徹底的に自ら解釋が出來たならばよいのである。第一に兼好の主意のある所を見定めて、次に詞のいひまはしを見、最後に、語句の文法に離れないやうに解さなければならないのである。

○げに　成るほど尤だなあと思ふこと。

○ものから　この語をよくもの故と解釋する人があるが「物故」を「モノカラ」としたのではない。「モノカラ」で「物ノ」

み」は輕い意味である。只「反對する」といふほどの意味○さるからさぞ―然る理由によつて、然るのです。即ちこれこれの理由によつて、私はこれこれと思ふのであなたに反對するのです○徒然―退屈○げには少しかこつ方も―成程、親友に比べると少しは不足がましく思ふ方もある。ここで句を切る○我れと等しからざらん人―自分とは全然等しい心を持つた親友では無からうと思はれる人、即ち大同小異の友○程こそあらめ―程は誠にそれで善くあらうが○まめやかの心の友―前の「同じ心ならん人」のこと、即ち親友○隔り―違ひ○わびし―物足らず寂しい。

（第十四段） 和歌こそなほをかしきものなれ。あやしのしづ山がつのしわざも、いひ出づればおもしろく、おそろしき猪も、ふす猪の床といへばやさしくなりぬ。

【口譯】 何といつても矢張り和歌といふものは、誠に趣味のあるものである。賤しい賤民も、又きこりのする仕事でも、歌に詠めば面白く、恐ろしい猪でも、これを「臥す猪の床」といふ言葉で其の語の中に入れて猪（ヰ）といへば、やさしく優美に聞えるやうになる。

【摘解】 ○あやしの―いやしい○しづ―下賤の者○山がつ―樵夫○ふす猪の床―猪が枯草を掻き集めて作つた臥床。此の「臥す猪の床」といふ語中に「猪」が入つて

「物ナガラ」「物デアルガ併シナガラ」といふ如く、反對の意にしなければならない。

○さやは思ふ「さ思ふや、否思はず」

【參考】

○臥す猪の床　八雲御抄に「寂蓮法師がいひけるは、歌のやうにいみじきものなし。おのししなどいふおそろしき物も、ふすゐの床などいひつれば、やさしきなりといふ」

○あやしのしづ山がつのしわざ「あやし」は「賤し」の意で、「しづ」にも、「山がつ」にも兩方にかかる。

ゐる。

この頃の歌は、一ふしをかしくいひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、ことばの外にあはれにけしきおぼゆるはなし。貫之が、「いとによる物ならなくに」といへるは、古今集の中の歌くづとかやいひつたへたれど、今の世の人の詠みぬべきことがらとはみえず。其の世の歌には、姿・言葉、此のたぐひのみ多し。此の歌に限りてかくいひたてられたるも、しりがたし。源氏物語には、「ものとはなしに」とぞかける。新古今には、「のこる松さへ峰にさびしき」といへるうたをぞいふなるは、まことに、すこしくだけたるすがたにもや見ゆらん。されどこのうたも、衆議判の時、よろしきよし沙汰ありて、後にも殊更に感じ仰せ下されけるよし、家長が日記にはかけ

【参考】
○衆議判（シユウギハン）　シユウギハンとも讀む。歌合せの時にその判定をする人を判者といふが、判者だけでなく、左右にそれぞれ方人（カタウド）といふ役があつて、その各各の側の歌を互に批判しあふ。それで決定出來ない時に判者が定める。それを衆議判といふ。
○家長が日記　「春日（カスガ）の社の歌合せとて侍りき。（中略）祝部成茂と申す者、始めて歌召されぬ。（中略）詠みて奉りし内、落葉といふ題の歌、冬の來て山もあらはに木の葉降り殘る松さへ峯にさびしき。此の歌、和歌所にて衆議判ありしに、この歌よみあげたるを、たびたび詠ぜさせ給ひて、よろしく詠める由のみけしきなり、次の朝に、昨夜の御歌合めしよせて御覽ずるに、成茂が歌、感じ思召す由、御教書を仰せ下さる」
○品詞に分類して見ん。

この	代名詞
頃	名詞
の	助詞
歌	名詞
は	助詞
一節	名詞
をかしく	形容詞
いひ	四段動詞
かなへ	下二段動詞
たり	完了助動詞
と	助詞
見ゆる	下二段動詞
は	助詞
あれ	ラ變動詞
ど	助詞
古き	形容詞
歌ども	名詞

り。

【口譯】　此の頃の和歌は、どこかちよいと面白くうまく言ひのけたと思はれるのはあるけれども、昔の多くの歌のやうにはうまくは言つてはない。言外に餘情のある、情趣の有るのは無い。貫之（ツラユキ）の歌で「絲による物ならなくに」といふのがあるが、これは古今集の中での歌の屑（クヅ）だとかいひ傳へられてゐるけれども、現代の人人が詠み得べき言葉つきとは思へない。貫之の時代の歌には、歌の格調も、用語も、かういふ種類のものばかりが多い。さればこの外に歌屑といはれる歌も多いはずであるのに特にこの歌のみ取り立てて、歌屑だと強く言はれてゐるのも、一體貫之が有名な歌人である爲代表的に槍玉にあげられたのかも知れん。此の歌は源氏物語には「絲によるものとはなしに」として引用されてゐる（して見ると、「物ならなくに」の言葉が悪いのかとも思はれるが）別に歌屑といふ程まづい歌とは思はれぬ。さてまた新古今集の中では、「殘る松さへ峰に淋しき」といつてゐる歌を、歌屑だといつてゐるが、なるほど、此の歌は、少し調子が整はない姿もあるやうだ。けれども、此の歌も、皆して批判した時に、まあいいだらうといふ判定があり、後になつても、後鳥羽上皇が、殊更に御感あらせられた旨を仰せ下されたと云ふこ

とが、家長の日記に書き記してある。

【摘解】 ○いかにぞや―出來がわるい○ことばの外に―餘情・言外○けしきおぼゆる―氣色を感ずる。情趣を感ずる○貫之―紀貫之。歌人。古今集の撰者の一人。古今集の和文の序を作り、土佐日記を書いた。土佐守となる○いとによる物ならなくに―古今集羇旅に「絲によるものならなくに別れ路の心細くもおもほゆるかな」「ならなくに」は「でもないのに」。絲に捩るものなら、元のよる材料の方は細いものでそれをより合せて太くなるのであるから、元は細いものであるが別れ途といふものは、絲ではないのに心細く思はれるといふ意。理窟で作つた歌である○歌屑―歌の中での屑。最も劣つた歌○詠みぬべき―たしかに詠むことのできる○ことがら―言柄。ことばつき○其の世―その當時。乃ち古今集の撰ばれた當時○奏―歌全體の調子。格調○言葉―用語○此の歌によりて……知り難し―他の同種の歌にはさういはれないで此の貫之の歌だけが歌屑と言はれて居るのは、一體貫之が上手な歌人であるから、代表的に犧牲的に槍玉に上げられたのかも知れん。といふのである。「擧げられたのは理由が知られない」の意ではない○源氏物語―紫式部の著になる長編小說。全五十四帖。光源氏君を主人公とした宮廷祕史である。その總角の卷に、「もとはなしにとか貫之がこの世ながらの別をだに云云」と書いてある○新古今―新古今集○のこる松さへ―新古今集の冬の部に祝部成望の作として、「冬の來て山もあらはに木の葉ふり殘る松さへ嶺にさびしき」とある。冬が來て、山も秀山になるほど木の葉が落ちてしまつたので、葉の殘つてゐる松の姿さへも山の頂に淋しげであるといふ意。上の句三句が如何にもどたどたしてゐる○くだけたるすがた―歌の調

のやうに助詞
いかに名詞
ぞ助詞
や助詞
言葉名詞
の助詞
外名詞
に助詞
あはれに名詞
けしき助詞
覺ゆる名詞
は下二段動詞
なし助詞
形容詞

○書ける「書」の下に「ける」が接したのでは無く、「書け」の下に「る」が接したのである。「書いてある」の意。「書け」はカ行四段活用の已然形、「る」は完了助動詞の連體形。

子がととのはず、どこか缺點があつて、すつきりしないこと○よろし―「まあ良い」の意。一番よい意には「よし」といふ○沙汰―定の意、よろしい歌だと言ひ定められたの意○仰せ下されけるよし―新古今集は後鳥羽上皇の仰を受けて藤原定家等が輯めたものである。ここで仰せ下されと敬語を用ひたのは、後鳥羽上皇を申すのである○家長―源家長。從四位上但馬守。後鳥羽上皇に仕へ、和歌所の事務に携はつた。

歌の道のみいにしへに變らぬなどいふ事もあれど、いさや。今も詠みあへるおなじ詞・歌枕も、昔の人の詠めるは、さらに同じものにあらず。やすくすなほにして、姿もきよげに、あはれも深くみゆ。

梁塵祕抄の郢曲の言葉こそ、又あはれなることはおほかめれ。昔の人は、ただいかにいひすてたることぐさも、皆いみじくきこゆるにや。

【口譯】 歌の道ばかりは、昔に變らないなどといふこともあるが、さて、どうだらうか、さうでは無いやうに思ふ。今の人がお互に詠み合つてゐ

○略したもの
見ゆる（歌）は
おほゆる（歌）は
いへる（歌）は
いひたてられたる（事）
は括弧内の語を略す。

【參考】
○梁塵秘抄 平安朝時代に行はれた謠物といへば、神樂歌・催馬樂・朗詠・今樣などがあるが、さういふ謠物を輯めた書である。近頃、その一部が發見された。「梁塵」の名は、昔、支那の魯の國の虞公は非常に聲がよくて、歌を謠ふと、美聲に梁の上の塵が動いたといふ故事によるものである。
○郢曲 郢とは支那の楚國の都である。郢曲とは、

る、同じ用語でも、或は歌枕でも、昔の人が同じ用語・歌枕を用ひて詠んでゐるのを見ると、やはり古人の詠んだのは、趣を異にして感じる、全然、今の人のとは同じ感じではない。古人の歌は、安易で、且卒直であり、格調も純一であり、趣味も深く感じられる。

梁塵秘抄の中にある郢曲の言葉は、又、實に情趣深きものが多いやうだ。一體、昔の人の作だといへば、ただ、どんなになげやりに吐き捨てた言葉でさへも、凡て立派に聞えるのだらうか。

【摘解】 ○いさやー「いさ」といふのも同じ。「いさ」は下に必ず打消の動詞がくる。ここは「知らず」などの言葉が略されてゐるのであつて、「さあ、どうでせうか」といふほどの意○やすくー強ひて奇拔な所を示さないこと○すなほー奇を衒つたりしないこと○歌枕ウタマクラー古歌によみ入れた名所○梁塵秘抄リヤウヂンヒセウー後白河天皇の御撰。平安朝に行はれた謠物ウタヒモノを集めてある○郢曲エイキヨクー謠物の總稱。催馬樂・風俗・朗詠・今様等をいふ○おほかめれー「多く有るめれ」の意○ことぐさー言草の意。言葉○聞ゆるにやー下に「あらん」とか「ありけん」を略した。「立派なものとして聞えるやうだ」の意。

(第十五段) いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそめさむる心地すれ。

支那では流行歌の意であるが、日本では、當時謠はれた謠物の總稱に用ひられた。

詠
メ ム ム ミ マ
合
ヘ フ フ ヒ ハ
レ ル リ リ ラ

詠
メ ム ム ミ マ
レ ル リ リ ラ
は

【參考】 ○見ありき 「ありき」は「あるき」の古語。見歩

そのわたり、ここかしこ見ありき、わなかびたる所、山里などは、いとめなれぬ事のみぞおほかる。都へたより求めて文やる、「その事かの事、便宜に忘るな」などいひやることをかしけれ。

【口譯】 どこでもよい、暫く旅行に出かけるのは又、目のさめるやうな氣持になるものだ。

その邊を、ここ、あすこと見物して歩くにつけても、田舍めいた土地や、山里などは、見慣れない物珍らしい事ばかりが多いものだ。故郷なる京都の家へ、序ツイデがあつて、手紙を書く。その中に、「あの事、この事、その折折毎に、うまく處置をつけて、忘れないやうにせよ」などといつてやるのも趣が深いものだ。

【摘解】 ○いづくにもあれーわざわざ名所へなど行つたといふのではなく、どこでもよいの意○旅だちー旅行に出發するのを旅立つといふが、ここは、むしろその旅中にあること。旅行してゐること○めさむる心地ー物珍らしいものばかりであるから、目がさめるやうな氣持がするのである○わたりーあたり・邊○めなれぬ事ー見慣れない物珍らしいこと○たよりー誰か京都へ行く人などがある時に、その人に託しての意○便宜ビンギに忘るなー「便宜」はよき機會。よき機會の度毎に忘れるなの意。

○のみぞおほかる 「ぞ」の係に對して「多かる」で結んだ形である。

○便宜に 然るべき折に、その事かの事をやれの意。よき折。よき機會といふに當る。

○都へたより求めて 田舍に旅行してゐるのであるから、都へ便宜を求めて音信するのである。郵便通信の不便の時代であるから尤なことである。

○いひやる 家族等留守居の者更に具體的にいへば家妻等に、命令を通信するのである。

○をかし 一、馬鹿らしいので、あなどらはしく笑つてやるの意。笑ふには嘲笑・感賛・侮弄の場合がある。二、怪し。三、愛すべく。賛すべく。面白い。

例へば、この事は何何の折に處置をつける、かの事は、これこれの際に始末するといふやうなのをいふ。

さやうの所にてこそ、よろづに心づかひせらるれ。もてる調度まで、よきはよく、能ある人、かたちよき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。

寺・社などに、忍びて籠りたるもをかし。

【口譯】 さういふやうな旅先にあつては誠に色色なことに氣を配るやうな必要が起るのである。所持の手廻り道具などさへも、よい品は、一層そのよい所が分るものであり、何か藝能でもある人、又容貌の秀麗な人など、ふだんよりも、一層きはだつて立派に目立つものである。なほ、お寺や社などに、知人には知らせず、こつそりと參籠するなども趣あるものである。

【摘解】 ○心づかひ―萬事につけて色色と氣をつかふの意○せらるれ―される○もてる調度―携帶して來た手廻りの諸道具○能ある人―藝能ある人○かたちよき人―容貌の秀れた人○をかし―ここでは、すぐれて立派に見えて面白く感ずること○忍びて―人しれず、こつそりと○籠り―參籠する。

【參考】
○旅に出ると、神經が鋭敏になる。感受性が鋭敏になつてゐるからして、調度のよし惡しも、殊更氣につくし、能ある人かたちよき人も、心がとまるのである。
○寺社　神社や寺などに參籠して祈願することは平安時代からの一つの流行であつた。ここは、知人にも告げず、そつと參籠するのである。
○心づかひせられる「心づかひ」は名詞、其の名詞がサ變に活用せられてサ變動詞「心づかひせ」となり、其の未然形に「ラルレ」がつく。ラルレはコソの結。

（第十八段） 人はおのれをつづまやかにし、おごりを退けて財をもたず、世を貪らざらんぞいみじかるべき。むかしより、かしこき人のとめるはまれなり。

【口譯】 人は自分一個人に對しては、儉約を旨とし、驕奢を排し財寶を持たず、すべて世の中の名利といふものを貪らないやうにするのが、一番よいやうである。昔から聖賢の人にして富める者はめつたにない。

【摘解】 ○おごり―奢侈驕奢をいふ○財（タカラ）―財寶○世―世の名利をいふ。權勢とか利益とか金錢とか地位とかいふやうなもの。

唐土に許由といひつる人は、さらに身にしたがへるたくはへもなくて、水をも手してささげて飲みけるを見て、なりひさごといふ物を人のえさせたりければ、或時、木の枝にかけたりけるが、風にふかれてなりけるを、かしがましとてすてつ。また手にむすびてぞ水ものみける。いかばかり心のうち涼しかりけん。

【參考】
○世　この言葉は、「あだし野の露の」項でも説明した、彼此對照して考察するとよい。そこでも「世をむさぼる心」としてでてゐる。同じである。
○むぞ……べき　「ぞ」の係に對する結びとして「べき」となつてゐる。「むこそ」に對する時は、「べけれ」となる。

【參考】
○唐土の許由といひつる―徒然草によく見る書き方である。「唐土にありし許由といひつる人」といふ意。
○たくはへ―　は單に金錢のみをいつてゐるのでなく、生活必需品米も、味噌も、又諸道具も、何一つとして自分の所有に屬

【口譯】 支那に昔許由といふ人があつた、彼は、一向に我が身につけた著へもなく、水をさへも、手でしやくつて飲んでゐたが、それを見て、瓢簞を或人が吳れたところが、或時その瓢簞を木の枝にぶら下げておいたところが、風に當つて、音を發した。彼は、この音を聞くと、やかましいと云つて、その瓢簞をすててしまつた。そして、再び手でしやくつて水をも飲んだといふことである。どんなにかまあ、彼れ許由の胸中はさばさばとして無欲でゐたことであらうか。

【摘解】 ○唐土―支那○許由―支那の隱士。箕山に住んでゐたが、帝堯がその賢を聞き傳へて、己の位を讓らうとしたところが、承諾しない、そんな話を耳にするのも耳の汚れだといつて、潁川の水で耳を洗つたといふ傳說の人○さらに―一向に。何一つとして○したがへるたくはへ―我が身に附屬した蓄へ。我が個有の財產○さげて―捧げての意。掬むこと。しやくふ○なりひさご―瓢簞のこと。昔はこれを縱に二つに切つて、水をむすぶ（掬む）に用ひた○えさせ―得させる。得しめたこと。與へたこと○かしがまし―喧しい。やかましい○涼しかりけん―さつぱりしてゐたことであらう。

孫晨は、冬の月に衾なくて、藁一束ありけるを、夕には是にふし、朝にはをさめけり。もろこしの人は、これをいみじとおもへばこそ、しるしとどめて世にもつたへけめ、これらの人は、かたりもつたふべからず。

【口譯】 又、孫晨といふ人は、冬になつても寢具がなく、只、藁が一束あつたが、夕方になると、之に寢て、朝になると、之を取片けたといふことである。支那人は、これらの話を、えらいことだと考へればこそ、さうやつて書き留めて、世の中に傳へもしたのであらう。日本の人は、第一、かういふやうな淸い心の人があつても、それを偉いとも思はないからして、てんで書き留めて、後世に傳へるといふやうなこともしない。

【摘解】 ○冬の月―冬季。月は、空にかかる月でなくて、年月の月である○衾―夜具○夕○一束○朝○をさめ―しまふこと○これらの人―我が國の人○かたりもつたふべからず―語り傳へることさへもしなからう。「べからず」推量に取るのが正しい。

（第十九段） 折節の遷り變るこそ物毎にあはれなれ。「物のあはれは秋こそまされ」と人毎に言ふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮き立つものは、春の氣色にこそあ

するものがないといふいひ方である。

○風に吹かれて鳴る　笛が鳴る理法で、かかるものは風に鳴り音を出す。高士傳に「許由、箕山に隱る。手を以て水を捧げて之を飲む。人一瓢を遺る。得て以て取りて飲む。飲み訖りて樹上に掛く。風吹いて歷歷聲を作す。尙ほ以て煩と爲し、遂に之を去つ矣」とある。

○なりひさご　瓢簞・夕顏・ふくべ・瓢の總稱。

○「手して捧げて飲む」も、「手に掬びてぞ飲み」も同じことを云つて居る。

【參考】 ○孫晨　蒙求に曰く、「孫晨字は元公。家貧にして席を織るを業と爲す。詩書に明かなり。京兆の功曹となる。冬月被ふもの無し、藁一束を有す、暮に臥し、朝に收む」

○朝と夕　朝はアサともアシタとも讀む、夕はユフともユフベとも讀む。口調の上にて定めることで何れに讀んでもよろしい。ここはアシタ、ユフベと讀む。

○けむ　○　○　ケム　ケム　ケメ　と活用する。上にコソが有るからケメといふ已然形を用ひた。

【參考】 ○秋こそまされ　拾遺集―に「春はただ、花の一重に咲くばかり、物のあはれは秋ぞまされる」源氏

めれ。

【口譯】 四季折折のうつりかはつて、それぞれ四季の變化のあるのが、色色の物に對して我れ我れが興趣のあることになるのだ（四季一樣であつたなら、單調で我れ我れはあきるであらう）。「物事に興趣のあるのは、秋が一番勝つてゐる」と各人が言つて居るやうであるが、成程、さういふのも最もな事であつて（私もそれには賛成するが）、しかし、もう一段と（勝つたもので）心も陽氣に浮き立つ時季といつたら、誠に、春の樣子であるらしい。

【摘解】 ○折節―四季の時節○遷り變る―春から夏、夏から秋、秋から冬、冬から春といふやうに段段推移變化する○物毎―各物おのおの。物事何でも○あはれ―興趣深き事。ああと心にしむことをいふ。善惡共にいふ○さるもの―然るもの。最もと賛成する○今一きは―それより一層。「もう一層『あはれ』の事で」の意。○めれど―「めり」「しかれども」の意○氣色―樣子○あめれ―有るめれ。あるらしいの意。

鳥の聲なども殊の外春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萠え出づる頃より、やや春深く霞も渡りて、花もやう

【參考】
○鳥の聲　有仲集「百千鳥、朝げの空に遊ぶなり、殊物語「春秋の爭ひに、昔より秋に心寄する人は數勝りけり」白樂天「大抵四時、心すべて苦、就中腸の斷つは是れ秋天」劉禹錫「古より秋に逢うて寂寥を悲む。我れは言ふ、秋夕は春朝に勝ると」萬葉集一の額田の王「花も見つ紅葉をも見つ蟲の音も聲聲多く秋はまされり」などをいふ。
○今一きは心も浮き立つ　「秋よりもなほ一きは」の意即ち、心が浮き立つことが一層の意でない。一層哀れな事で、心の浮き立つ。

やう氣色だつ程こそあれ。折しも雨風打續きて、心あわただしく散過ぎぬ。青葉になり行くまで、よろづに、唯、心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、猶、梅のにほひにぞ、古の事も立返り戀しう思ひ出でらるる。山吹の清げに、藤の覺束なき樣したる、すべて思ひ捨て難き事多し。

【口譯】 小鳥の樂しさうに鳴くのも甚だ春らしい氣分を與へ、のびのびした氣分のする春の日光に、垣の草が春の始め頃芽を出す頃から、段段春が進んで、春霞もずつとたなびき、櫻花も段段咲く樣子になると、其の時分には、春風・春雨が續いて起り、櫻花は急いで、全く散り去つてしまふ。それから花散つて青葉になつてしまふまで、何につけても萬事人人はただただ、氣ぼかりもんで苦にしてゐる（もうだめかなあなどと氣をもむ）。偖、花橘は古を思ひ出すものだとして有名であるが、私はやはり梅花の香によつて、古昔の事を回想し戀しく自然に思ひ出すのである。山吹の花が胸のすくやうに咲いてをり、藤の花の色が薄ぼんやりと不たしかに咲いてゐる樣をしてゐるなど、それら凡てのものが、多く見捨てて置かれぬ思ひのするものが多い。何れもなつかしく思はれる。

○花もやうやう　「花」は狹意の「櫻花」
○花橘云云　橘（田道間花の約轉）は今の通名では柑子蜜柑のこと。これを實の方でいはなくて、花を賞美する時に花橘といふ。昔、垂仁天皇が田道間守に命じて橘を南洋に求めしめたところ、十年後に色色の困難の末、遂に持ち來つた時に垂仁天皇は既に崩ぜられたので、田道間守は歎いて死んだ。その連想から古今集に「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」と詠んである。夫によつて昔の人を思ひ出すといふ名を負つて居ると言つたのである。梅に昔を思ひ出すは源氏物の外にも春めきにけり」

【摘解】 ○殊の外―特別に。甚だ○春めく―春になつたといふ氣分を與へる○日影―日の光○垣根―垣。屋根・心根・岩根・杵根等の如く「根」は意味が無い○萠え出づ―芽を出す○霞―春霞○渡る―ずつと遠くまで連なる○氣色だつ―氣色ばむ。咲きさうになる○程こそあれ―程になると○心あわただし―櫻花があわただしく急いで○散過ぎぬ―たしかに散り去る○心をのみぞ惱ます―人が氣をもむ○花橘―花を觀て樂しむ場合の橘（實を目的としてのその橘をいつたのではない）。橘は柑子蜜柑○名にこそ負へれ―有名であるが。下の文によつて、「昔の事を思ひ出す事としては有名になつてゐる」の意○猶―やはり○藤の覺束なし―藤の花色のふたしか。之は花色でなくて、形がふたしかと見てもよい○思ひ捨て難き―思ふことにおいて捨ててしまふことが、しにくい。即ち、捨てておいて觀ないで居ることがしにくい。

「灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂り行く程こそ、『世のあはれも、人の戀しさもまされ』」と人の仰せられしこそげにさるものなれ。五月、菖蒲葺く頃、早苗取る頃、水雞の叩くなど心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に、夕顏の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓

語に「花（紅梅）の香も、賓客の御匂も、橘ならねど昔思ひ出でらるるつまなり」新古今集に「梅が香に昔を問へば春の月、答へぬ影ぞ袖にうつれる」等多い。

○藤の覺束なき　色が不明瞭とする。一說に、藤の花房が覺束無いふうに、ぶらぶらもしてゐるとも見る。

【參考】

○世のあはれ云云　「世のあはれも、人の戀しさもまされ」が人の仰せ言とすると、「灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂り行く程こそ『世のあはれも、人の戀しさもまされ』」を人の御せ言とす

またをかし。

【口譯】 さて、「四月八日の灌佛をする頃や、四月の中の酉の日の賀茂祭の頃や、櫻の若葉の梢が涼しさうに茂つて行く時分は、『此の世の中の事事の心にしむことも、離れてゐる人を思ひ出して戀しく思はれることも甚だしいものだ』」と或人がおつしやられたことも、成程さうである。五月五日端午の節句に、屋根に菖蒲を葺く頃や、田植をする頃、水雞鳥が鳴くを聞くなどは、凡て心細い寂しい感じがする。六月の盛夏に賤しい家に夕顏の花が白く見えて、そこに蚊いぶしをふすべ焚いて居るなども心にしみて興趣がある。六月祓も亦興趣のあるものである。

【摘解】 ○灌佛―舊四月八日釋迦の誕生日に行はれるその祝日。我が國、推古天皇の時初まる○祭―單に「祭」といへば舊四月中の酉の日に行はれる賀茂祭。今は五月十五日に行はれる○さるもの―最もだ。さういふ事と贊成だ○五月―菖蒲葺く―五月五日端午の節句に屋根にあやめ草を葺いて祝ふ○早苗取る―田植をする。早苗はただ稻苗の事。早い意はない○水雞の叩く―くひな鳥の鳴き聲は、戸を叩くやうに聞える故に、其の鳴くのを、たたくといふ○六月○あやしき―賤しき○蚊遣火○六月祓―六月晦日に清い川に臨んでミソギをしてもろもろの罪をはらひのける行事。

ると兩說がある。どちらもよいと思はれる。

○水雞　涉禽類の一種。體長七八寸、尾長一寸八分位、雞の幼きものに似、體色黃褐色で白い斑がある。鳴聲は物を叩くに似、水邊にすみ小魚を食ふ。

○心細からぬかは　心細く無いことが有らうか、それは心細いといふ意。「かは」反語である。

○げにさるものなれ　成程、誠に、さういはれるとほりであるの意で、贊意を表したのである。

○蚊遣火　蚊遣火は燃やさないで、わざわざいぶるやうに燃やすものである。それをフスブルといふ。

七夕祭るこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になる程、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づく程、早稲田刈りほすなど、取り集めたる事は秋のみぞ多かる。又野分の朝こそをかしけれ。言ひ續くれば皆源氏物語・枕の草紙などに事舊りにたれど、同じ事又更に言はじとにも非ず。おぼしき事言はぬは腹ふくるるわざなれば、筆に任せつつ、味氣なきすさびにて搔い破り棄つべき物なれば、人の見るべきにも非ず。

【口譯】 七夕をお祭りするのは優美な事である。その七月も過ぎて段段、夜が寒くなる程になり、雁が鳴き來る頃、萩の下葉が枯れ色する程、又、早稲田の稲を刈り乾すなど、色色物事が一時に集まり會ふのは、秋の時候ばかりが多くある。又、野分の風が吹いた翌朝は誠に興趣がある。さて、斯樣に續けて言へば、みんな源氏物語や枕の草紙などで言ひふるしたことで、又自分が事新らしく言ふには及ばないことであるが、同樣な事を再び言はない事にしようとは限つたことではない。思つてゐる事を言はないで居るのはお腹が張つて氣持のわるい事であるから、何此の

【參考】
○源氏物語・枕の草紙　源氏物語の幻の卷に四季のことばがあり、枕の草紙には、開卷第一の景を書いてある。
○おぼしき事いはぬは云云　大鏡の文もあるが、蘇東坡の文にも「事を忍べば腹は囊の如し」ともいつてある。
○搔い破り棄つ　かういつたのは、つまり他人が見る、即ち他人に見せるつもりで兼好が書いたことをいつてゐる意味になる。
○七夕の事　天河の畔に織女が有り、天帝の子である。年年ハタを織つて天衣を綴り、容姿を理めて居る遑が無い。天帝が其の獨居なのを憐んで、河西の牽牛に嫁した所、其

書は、筆次第に書いて、つまらないいたづら書きであつて、破り棄てて他人に見せるものではないから、他人が見る筈がない。何も遠慮して居るには及ばぬ、二度いつても恥づかしいことは無い。

【摘解】 ○七夕―舊七月七日牽牛星と織女星といふ夫婦の星が天上に於て年に一度相會ふと傳説にいはれて居て、此の日に女は之を祭つて各自の女巧がうまくなるやうに祈つた○なまめかし―優美○早稲田―ワセダの轉音。早く熟する種類の稲田○取り集めたる事―色色物事が一時に集まり合ふ○野分―晩秋頃吹く強い風。その風が吹き荒れて野中の草木を吹き倒し分けるから名附ける。ノワケともいふ○朝―翌朝○事舊る―前に言つてあつて古くなつてゐる○腹ふくるるわざ―大鏡（書名）の序に「覺しき事いはぬは、げにぞ腹ふくるる心地しける。かかればこそ昔の人は物いはまほしくなれば、穴を掘りて言ひ入れ待りけめ」とある○味氣なきすさび―つまらない慰み○搔い破り棄つ―破つて棄てる。「搔い」は「搔き」の音便で、ここは無意の接頭語。

さて、冬枯のけしきこそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散り止まりて、霜いと白う置ける朝、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れ果てて、人毎に急

の後織女は遂にハタオリを廢したから、天帝は怒つて河東に歸りしめ、一年に一たび天河を渡つて相會合させた。其の日若しも雨が降れば、天河の水が增して渡ることが出來ない。晴夜で織女が河を渡る時には烏鵲（カササギ）が河を塡めて橋をなし、織女がそれを渡つて相逢ふといふことである。此等は好事者の作り話である。それで七月七日の其の夜日本女兒は七夕祭をする。

【參考】
○凄まじき　不愉快な。枕草紙に「凄じきもの。晝吠ゆる犬、春の網代、三

ぎ合へる頃ぞ、又無くあはれなる。すさまじきものにして、見る人も無き月の、寒けく澄める二十日餘りの空こそ心細きものなれ。御佛名・荷前の使立つなどぞあはれにやんごとなき公事ども、繁く、春のいそぎに取重ねて催し行はるるさまぞいみじきや。

【口譯】 偖その次ぎに、冬になつて草木が葉が落ちて寂しくなつた樣子は誠に秋に比してはさう大してはさう負けてはゐない。彼の水邊の枯草に紅葉葉が落葉し止まり、庭一面に霜が甚だ白く降りて居る朝に、流し水より氣溫の關係でもや水煙の立つのが誠に快い。それから年が暮れ切つて、各人が急いで事を年内にかたづけようと急ぎ合つてゐる頃が（私如き世捨人から見れば）比すべき物のないほど興趣がある。人が、凄じく不快のものとして、月觀などいふしやれた催しもしない誰も觀手が無い月が、只ひとり寒さうに空に澄んでゐる二十日餘の空工合は誠に心細く見えるものである。それから御佛名や荷前の使が出發するなどは、本當に心にしみ、貴く思はれる朝廷の御儀式などが、春の諸仕度に繁繁と重なつて催し行はれるさまはえらいものである。

四月の紅梅のきぬ、ちごのなくなりたる產屋」などある。

○御佛名　十二月十九日（もとは十五日）より三日間、清涼殿で、僧侶に過去・現在・未來の三世の諸佛の御名を稱して眼・耳・鼻・舌・身・意の罪を懺悔消滅する朝廷の御儀式。

○荷前の使　荷前とは、諸國のみつぎ物たる絹布の類を初め、種種の中の初物を選びて取り分け置き、それをまづ天照大御神宮に奉り給ひ、又相當にあづかり給ふ神たちに幣物にも奉り給ひ、また御世御世の山陵にも奉り給ひて、殘りをば天皇の受納し給ふこと。その爲に荷前を持ち行く使者を荷前の使といふ。立つは仕立てる。使者は公卿又は殿上人で、十二月十三日に拜任、其の後吉日に差遣される。

【摘解】 ○冬枯―冬になつて草木が葉が落ちて寂しくなるさま○けしき―氣色。樣子○汀―水際○遣水―人工で邸内に流す小水○煙の立つ―氣溫が水の方が溫い爲、もやとなつて煙の如く立ち上る○すさまじき物にして―不快（寒さうであるから）のものとして誰も觀手が無い○御佛名○荷前の使立つ―荷前の使者を朝廷で設ける○公事―宮中の公務や行事○繁く―催し行はるるを修飾してゐる。春の仕度に重ねて繁く催し行はれる○いそぎ―用意・仕度○いみじ―えらいことだ。

追儺より四方拜に續くこそ面白けれ。晦日の夜いとう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで、人の門叩き走りありきて、何事にかあらん事事しく罵りて、足を空に惑ふが、曉方よりさすがに音無くなりぬるこそ、年の名殘も心細けれ。亡き人の來る夜とて魂祭るわざは、此の頃都には無きを東の方には猶爲る事にてありしこそあはれなりしか。斯くて明け行く空のけしき、きのふに變りたりとは見えねど、引きかへ珍らしき心地ぞする。大路の樣、松立て渡して花

【參考】
○追儺　鬼やらひ。十二月晦日の夜行つた朝廷の儀式。今の節分の豆撒きはこの名殘である。「福は内、鬼は外」といつて豆をまくのである。
○四方拜　元旦午前四時天皇が清涼殿で天地四方及び山陵を拜し、年災をはらへ五穀豐穰、寶祚長久を祈らる。
○人の門叩き走り　掛り取りなどのためにおそく他

やかに嬉しげなるこそまたあはれなれ。

【口譯】 追儺の夜の儀式から四方拜の曉の儀式に續き行はれるのが面白い。晦日の夜が甚だ暗い時に松明を點して夜遲くまで、他人の門を叩き訪ね走りさわいで、何事だか仰仰しく大聲をあげて足を地にもつけず宙を走つてゐる人人が、それでも何といつても明日は元旦のことなれば曉頃より、しかし音無く靜かになることは、誠に本年の終末かと思へば心細く思ふ。死人の此の世に來る夜だとして亡魂を祭る事は、此の頃は京都ではしないのを、關東地方では、まだしてゐる事であつたのは心にしむ事であつた。斯くして夜が段段明ける空の工合は、昨日の年のくれとは變つてゐるとは思はれないが、昨日とは丸でかはつて珍らし心持がする。大通の有樣などは松飾などずつと立てて、花花しく各人が新年になつて嬉しさうな樣子をしてゐる樣が誠に心にしむことである。

【摘解】 ○いとう―痛く。甚だ○松ども―松明等○夜半―夜。夜の半の意ではない○足を空に惑ふ―足を地につけず、宙にほつつきあるく。「惑ふ」は「迷ふ」意ではなく、むちやくちやにあるく事○名殘―物事の終つた後の工合○魂祭―精靈會○東―關東○大路の樣―大通りの町の道の有樣○松立て―松即ち松飾を立てる。

人の門戸を叩き走りまはるともいふし、又、子供達がたいまつをともして夜なかまで人人の家を叩き起して惡口をいひあるく習慣があるのをいふともいふ。

○罵り 大聲をあげていふことは惡口をいふのではない。

○魂祭 昔はお盆と年末とに精靈をまつたが、後にはお盆だけになつた。

○さすがに シカスガニの約言。流石・有繋・道などと書く。一、シカシナカラ。二、サリナガラ本を失ハズと美めて云ふ意に用ひていふ。ヤハリなどと譯す。

（第二十一段） 萬のことは、月見るにこそなぐさむものなさ。或人の、「月ばかり面白きものはあらじ」といひしに、又ひとり、「露こそあはれなれ」と爭ひしこそをかしけれ。折に觸れば、何かはあはれならざらん。

【口譯】 萬事につけて、月を眺めることによつて誠に氣が晴れるものである。或人が、「月ほど趣のあるものはあるまい」といつたところが、別の一人が「露こそ一番趣がある」といつて論じ爭つたことがあつたが、實に面白いものであつた。その折に當れば、何物といつて趣の深くないものがあらうか。何物でも、然るべき折に會へば、趣深く感じられるものである。

【摘解】 ○萬○月ばかり―月ほど○折にふれば―その時に當れば。何かその場合に適へば。

月花はさらなり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩にくだけてきよくながるる水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。「沅湘日夜東に流れさる、愁人の爲にとどまることと

【參考】
○面白き この短い文の中に、「面白き」・「あはれなれ」・「をかしけれ」の三通りの異なつた言葉が用ひられてゐる。いづれも、大體、趣が深い、面白いといふ意であつて、大して內容に違はない。
○何かはあはれならざらん 何でも身にしみない物はない、皆身にしみるものであるの意。「カハ」は反語である。「何、あはれならざらんかは」の意である。

【參考】
○沅湘日夜云云 三體詩（書名）
戴叔倫の湘南即事
盧橘（枇杷）花開いて楓

少時もせず」といへる詩を見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も、「山澤にあそびて魚鳥を見れば心たのしぶ」といへり。人とほく、水草きよき所にさまよひありきたるばかり、心なぐさむ事はあらじ。

【口譯】 月や花はいふまでもないことであるが、風といふものも特別に人の情緒に訴へる物であるらしい。又、岩に碎けて清げに流れる水の有樣も、四季の時節を區別せず、結構なものである。「沅江湘江は日夜東へ東へと流れ去る。愁に沈んでゐる人のために少しでも同情して留まる事はしない」といふ詩を見たことがあるが、全く此の詩の通りであると深く心に感じたのであつた。かの竹林七賢の一人の嵇康も亦、「山や川に遊んで無心に戯れてゐる魚や鳥の類を眺めると、心がのびのびと樂しくなる」といつてゐる。人氣遠く、水草清い所に、逍遙したほど、心のなぐさまることはあるまい。

【摘解】 ○さらなり―いふもさらなりと同じ。いふまでもないことであるの意○風のみこそ―「のみ」は「だけは」の意でなく、風を強めていつた語○心はつく―心に感ぜしめる。ものの哀を心に感じさせる○時をもわかず―春とか、夏とか特別に葉襲ふ。門を出でて何れの處にか京師を望まん。

沅湘日夜東に流れ去る、愁人の爲に住ること少時もせず。

○嵇康も云云　文選「山巨源に與ふる絶交の書」と題する長文の一節。「山澤に遊びて魚鳥を觀れば、心甚だ之を樂む。一たび行つて吏とならば、此の事便ち廢せん」

○コソの係結

風のみコソ人に心はつくメレ

……水のけしきコソ時もわかずメデタケレ

詩を見侍りしコソあはれなりシカ

本節のなかに右の三箇所もコソの係結が有る。コソと係つた時は、述語には活用言なら已然形。

時節を決めないで、いつでも○沅湘―いづれも、支那湖南省にある川の名。沅江・湘江○日夜―晝も夜も○愁人―京都を離れて愁に沈んでゐる人○とどまること云云―水が愁人のために同情して、少しでも流れをやめて留まつてなぐさめてくれることはしない。冷然として愁人の傍を、日夜東に流れ去るの意○少時もせず―ただ、ほんの僅かな時間でも留まることをしない○嵇康―字は叔夜。晉の時代の隱士。所謂竹林七賢の一人○魚鳥○たのしぶ―樂しむ○人とほく―俗世間から遠く離れた所○水草―水中の草。水や草の意ではない○さまよひありきたる―さまよつて歩きたる。逍遙すること。

（第二十四段） 齋宮の野宮におはします有樣こそ、やさしく面白き事のかぎりとは覺えしか。「經」「佛」などいみて、「なかご」「染紙」などいふなるもをかし。

すべて神の社こそ、すてがたくなまめかしきものなれや。物ふりたる森のけしきもただならぬに、玉がきしわたして、さか木にゆふかけたるなど、いみじからぬかは。ことにをかしきは、伊勢・賀茂・春日・平野・住吉・三輪・貴

○竹林の七賢
嵇康　ケイカウ
阮籍　ゲンセキ
山濤　サンタウ
向秀　シヤウシウ
劉伶　リウレイ
阮咸　ゲンカン
王戎　ワウジウ

【參考】
○伊勢　伊勢にましますの神宮を申す。神宮は只、神宮と申すのが正式で、伊勢神宮といふいひ方は間違つてゐる。
○賀茂　京都にある上下の賀茂神社。共に官幣大社。
○春日　奈良市の春日神社。官幣大社。藤原氏の氏神。
○平野　京都市の平野神

布禰・吉田・大原野・松尾・梅宮。

【口譯】 齋宮が潔齋のため野宮にいらせられる御有樣は、まことに優雅にも趣き深いことの最上だと感じられた。「經」とか「佛」とかいふ言葉を忌み嫌つて、之に代るに「なかご」「染紙」の語を以てするなどといふことも面白い。

一般的にいつて、神社といふものは、どことなく人の興趣を引きつけ、優雅なものであることだよ。ものさびて年經た森の樣子も、何となく他所では見られぬ、神神しい感じがする。その上、お社の周圍には玉垣をめぐらし、榊に木綿をかけたりなどしてあつて、それらの凡てが、いづれとして莊重森嚴でないものがあらうか、悉く莊重森嚴そのものである。神社の中でも殊に、有難い神神しい感じの深いのは、恐れ多きことながら伊勢の神宮を始め奉り、賀茂神社・春日神社・平野神社・住吉神社・大神神社・貴船神社・吉田神社・大原野神社・松尾神社・梅宮神社などである。

【摘解】 ○齋宮―古、伊勢の神宮に奉仕する皇女の稱。天皇の御代の改る毎に職を解くのを例とした。國訓では「いつきのみや」といふ。齋宮は元來、その宮殿を指していつたのであるが、後には、その皇女をも申すやうになつた。なほ齋宮と同樣

○住吉　大阪市の住吉神社。官幣大社。
○三輪　奈良縣磯城郡の大神神社。官幣大社。
○貴布禰　京都府愛宕郡の貴船神社。官幣中社。
○吉田　京都市の吉田神社。官幣中社。
○大原野　京都市葛野郡の大原野神社。官幣中社。
○松尾　京都市の松尾神社。官幣大社。
○梅宮　京都市の梅宮神社。官幣中社。
○齋宮の忌み詞
内（内典）の七言
中子　佛
染紙　經
あららぎ　塔
瓦葺　寺
髮長　僧
女髮長　尼

にして賀茂の社に奉仕した皇女を齋院といひ、同じく「いつきのみや」と訓んだ○野宮―齋宮が伊勢の神宮に赴き給ふ前に潔齋するためにいらせられる宮殿。多くは嵯峨野にあつた○やさしく―優雅なること○面白き―趣深い○かぎり―極點○覺えしか―「しか」は「こそ」の結び。思はれたの意○いみて―忌み嫌ふ。避けて用ひないやうにすること○なかご―中子。佛をいふ。中尊の意○染紙―經文。經文は黃紙・紺紙などに書したからいふ言葉○なまめかしき―優雅であること。今の艶つぽい意とは違ふ○ただならぬ―あたりまへでない。一種神神しい○玉がき―神社の社殿の周圍にめぐらした垣根○さか木―榊○ゆふ―木綿四手のこと。榊の枝につけて神前に飾る木綿。今日は白紙の折りたたんだのを用ひる○いみじからぬかは―結構で、神神しく立派でないものがあらうか。「かは」は反語。

（第二十五段） 飛鳥川の淵瀨常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、樂び悲び行き交ひて、花やかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、變らぬ住みかは人改まりぬ。桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん。まして見ぬ古のやんごとなかりけん跡のみぞいと果敢なき。

【口譯】 飛鳥川の淵や瀨がいつも變つて一定の樣にはあらぬやうな此の

片膳　齋
外（外典）の七言
直る　死ぬ
やすみ　病
鹽垂る　哭
汗　血
塩づ　打つ
菌　宍
壞　墓
齋宮は後醍醐帝時廢絕

【參考】
○飛鳥川　大和國武市郡飛鳥の地を流れる川。此の川は深淵や淺瀨が常に變ずるものとされゐる。古今集「世の中は何か常なる飛鳥川、昨日の淵ぞ今日は瀨になる」などもある。
○世にし　「し」は強めていふ助辭。

變化流轉の甚だしい世の中の事であるから、時世がかはり、事事は去つて變化し、樂しい事も悲しい事も始終變化流動して、花花しくあつた處も、今は寂びれて人の住まない野となり、たまには住處が昔のまま存在してゐると見れば其の内容たる住人が新らしくなつてゐる。その門前に成長してゐる桃や李は昔のままに存在してゐても、それ等は言語が遺はれないから私とは話が出來ない、さうすればそれとは昔話も出來ないで誰と私は昔話が出來ようか、それは出來ない。私の見たところでもさうであるから、まして我が見ることの出來なかつた昔の貴くもあつたらうと聞いてゐる舊跡は、昔にかはる今の樣で、誠につまらぬ末路になつたと思ひ起されるものである。

【摘解】 ○飛鳥川の淵瀬―「常ならぬ」の序○時移り事去り―時間が經ち、事柄が消え去り○桃李―俗桃妖李などいつて、支那の俗では此の桃や李は澤山門邊に植えてあつた。從つて其の家とは永い知り合ひでよく家情を知つてゐるはずのものである○誰とともに昔を語らん―其の家に永年あつて其の家情を知つて居る桃李は言語が語れない、そして其の他では斯くも其の家情を知つてゐる人は無いから、昔話をする相手にせられる人の無いこと○まして―自分の實驗でさへもさうであるから、まして自分の知らない過去の時代。

○時移り事去り　古今集の序文に「たとひ時移り事去り、樂び悲び行き交ふとも」ともある。陳鴻といふ人の長恨歌傳に「時移り事去り、樂み盡き、悲み來る」とある。

○野ら　「ら」は輕く添へた語で無意。

○桃李

滿城の桃李、春宮に屬す（劉禹錫）

桃李言はざれども下自ら蹊を成す（史記、李將軍）

桃李を樹うる者、夏休息を得、秋食ふことを得（說苑、復恩）

洛陽城東桃李の花（唐詩選）

華として桃李の如し（詩經）

憐むべし桃李斷腸の花（唐詩選）

京極殿・法成寺など見るこそ、志とどまり事變じける樣はあはれなれ。御堂殿の造り磨かせ給ひて、庄園多く寄せられ、我が御族のみ帝の御後見世の固めにて、行末までとおぼし置きし時、如何ならん世にも斯くばかりあせ果てんと思してんや。大門・金堂など近くまでありしかど、正和の頃南門は燒けぬ。金堂は其の後倒れ伏したるままにて取り立つるわざもなし。

【口譯】 京極殿や法成寺などを今見ると、其の建立者藤原道長の未來永久に存立せしめておかうとした志が、もう中斷され、其の事が變つた有樣が、實に哀れなものである。法成寺について云へば、御堂關白道長樣が此のお寺を造り綺麗になされて、庄園を多く寄附せられ、自分の一族ばかりが天子樣の輔佐役となり、日本の鎭めと考へて未來の永き間もさうしようと思つて居られた創建の際に、まさか、どんな時代になつても、斯くの如くに荒れ果てようとは豫想されたであらうか、そんな豫想はされなかつたであらう。其の中大門や金堂などは近來まで存在して居た

【參考】

○行末までと　行末長く存在せしめんと。

○思してんや　「てん」の「て」は完了助動詞テ、テ、ツ、ツル、ツレ、のテである。由て「てん」は未來完了であるが、かる時のテは無視して省くのがわかりよい。由て「思してんや」は「思さんや」の意としてよろしい。

○正和　花園天皇の年號。道長薨後二百八十餘年。

○京極殿と法成寺とを揭げたが、其の後の記事では法成寺のことばかり言つて、京極殿の事は言つてない。京極殿の方は略したのである。

法成寺は山城國京都近衞の北、京極の東、現今寺町から東、荒神口からは

が、それも正和年間に南門は燒失した。金堂は其の後倒壞したままでそれを立てなほすといふ事もせずにある。

【摘解】 ○京極殿―藤原道長の邸宅。道長薨じた後十三年目に燒失。殿はデンと讀んでもよい○法成寺―道長の建てた寺○御堂殿―道長。御堂は寺の事。道長は寺を多く建てた故、御堂殿と敬稱してゐる○庄園―莊園とも書く。私有地で多くは稅金を出さない地であつた。これは法成寺の維持費として道長が寄附しておいたのである○御族―ミゾウとよむ。族を音便でゾウとよむ○御後見―世話する。即ち攝政・關白・大臣等となつてゐる事○行末○あせ―「褪せ」は色がさめ、川が淺くなることであるが、ここは荒れ果てること○大門―外廓の一番外にある門○金堂―佛殿。佛を金人といふから其の金人を入れておく堂を金堂といふ。

無量寺院ばかりぞ其の形とて殘りたる。丈六の九體いと尊く並びておはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉鮮やかに見ゆるぞあはれなる。法華堂なども未だ侍るめり。これも亦何時までかあらん。かばかりの名殘だに無き所所は、自ら礎ばかり殘るもあれど、さだかに知れる人も無し。されば萬に見ざらん世までを思ひ掟てんこそ果敢なかるべ

【參考】 ○九體―極樂淨土の上品上生・上品中生・上品下生・中品上生・中品中生・中品下生・下品上生・下品中生・下品下生」の九に像つたのである。

○無量壽院ばかりゾ――殘リタル見ゆるゾ――あはれナル

北に當つて居た所に在つた。地域は方二町。治安二年に藤原道長が建てた。各建物が具足した寺で各堂の供養には天皇・東宮・三宮も臨御された。康平・永久年間前後二回の火災に遭ひ再建もあつたが、南大門は正和年中に燒け、金堂は貞永に倒れ修復しなかつた。

けれ。

【口譯】 法成寺中の一小寺なる無量壽院だけは法成寺のあつた形として殘つてゐる。一丈六尺の高さがある佛が九體あつて、甚だけ高く並んで安置されてゐる。藤原行成大納言の書かれた額や藤原兼行の書いた扉が今でも色彩鮮明に見えてゐるのが哀れである。又法成寺の一小寺の法華堂もまだ殘つてゐるやうである。これだとて何時までさう永く存在してゐよう。法成寺はまだ無量壽院や法華堂などが形見として殘つて居るが、これ位の形見も殘つてゐない諸所では、自然土臺石だけが殘つてゐるのもあるが、それとてももう何の跡だかはつきり知つてゐる人もない。(さういふ風に末は荒れ果てるものであるから)萬事に見ない即ち自分の死後の世までを生前に考へて、色色ときまりをつけて置くなんかといふ事は誠につまらぬ事であらう。

【摘解】 ○無量壽院―法成寺内の一小寺○形○丈六―一丈六尺。この像は阿彌陀如來である○九體―九箇○行成―藤原行成。字のうまかつた平安朝人○額○兼行―藤原兼行。書や畫に巧みであつた○扉―戸。戸に兼行が字を書いた○鮮やかに○法華堂―法成寺の一小寺○何時○名殘○所所○礎―土臺○萬○見ざらん世―死後の世○掟てん―定めよう○果敢なし―つまらぬことだ。

はゾと係りて連體形で結んだのである。

掟てんコソ果敢なかるべケレ

はコソと係つたので已然形で結んだ。

○無量壽院・法華堂

道長が創建して治安二年に成つた法成寺には、其の初は、中央に大御堂、左に阿彌陀堂、右に五大堂がある。大御堂の東に藥師堂(一名、淨瑠璃殿と稱す)、藥師堂の北に釋迦堂がある。大御堂の西阿彌陀の東に齋堂がある。又觀音小堂・三昧堂があつた。五重塔は一名八角堂と言つて、其の他、經堂・寶藏・鐘樓・諸門が具足してゐた。之を建てる爲には諸國に課して資財を惜しまなかつた。榮花物語に詳し。

（第二十九段） 靜かに思へば、よろづに過ぎにしかたの戀しさのみぞせんかたなき。

人しづまりて後、長き夜のすさびに、なにとなき具足とりしたため、殘しおかじと思ふ反古などやりすつる中に、亡き人の手習ひ、繪かきすさびたる見出でたるこそ、ただ其の折の心地すれ。此の比ある人の文だに、久しくなりて、いかなるをり、いつの年なりけんとおもふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心もなくてかはらず久しき、いとかなし。

【口譯】 ぢつと、靜かに思を廻らして見ると、何事にまれ、過ぎ去つた過去に對する戀しさばかりは、何とも止めやうもなくしかたのないものである。夜が更けて、人が寢靜まつてから後に、夜長のしよざいなさに何といふあてもなく、手あたり次第に、そこらの道具類を整理し、殘しておくまいと思ふほど紙など破りすててゐる内に、ふと、今はもう此の

【參考】

○心もなくてかはらず久しき　いとかなし　無心の道具類に、ふと愛着を覺えたことをいつたのである。人によつては、深く考へて、非情の道具が、今迄も、自分の身に添はつて、久しい間、使はれてゐたが、我が亡き後までも、いつまでもいつまでも、此の道具は、今のやうに、變らずに此の世の中に殘ることだらう。と、かう考へて、人生のはかなきを歎ずるやうに解するかもしれないが、そこまで考へるには及ばない。

○懷舊　「增鏡」の序文にも、「おのづから、古き歌など書きたるものの片はし見るだにその世にあへる心地するぞかし」とある此處と同じ心理狀態である。

世にゐない人が書き習つた字や、筆にまかせて畫いた繪などを、ふと見出した時には、ただ、その人の生きてゐた時、――そして、あの時に、これを書いたのだ、といふやうに、その時のことがまざまざと思ひ浮かべられて、その字や繪を書いた當時の氣分が湧然として蘇つて來るものである。今でも、現に存命でゐる人の手紙などでも、あまり時が經つてゐるのなどは、はて、どういふ時の手紙であつたらうか、何時の年のことであつたらうかと、思ふにつけても、しみじみと感慨深いものがあるものであるよ。さては、自分が常日頃、身の廻りに所持してゐる道具類などを、しみじみと見るにつけて、それらが何の感情もなく、無心のまま、何時までも何時までも、同じ形でゐるを見るにつけても、非常な愛着を感ずるものである。

【摘解】 ○過ぎにし方―「方」は時間をいふ○せんかたなき―何ともしやうのないものである。感慨の胸に切なるもののある意○長き夜のすさびに―「すさび」はなぐさみになどの意。しよざいなさの暇つぶしに○なにとなき―これと決つたものではなく、ただ手に觸れただけといふやうな意○具足―道具類。甲冑をも具足といふが、ここはそれではない○とりしたため―取片附けの意。整理する○反古―ほご。ほど紙○やりすつる―破り棄てる○かきすさびたる―「すさぶ」は何といふことなく筆にまかせて書くこと○其の折の心地―その時の樣子がまざまざと思ひ出でられ

枕草子第二十七段「すぎにし方戀しきもの」の段には、「枯れたる葵。雜遊びの調度。二藍、菊襲など。裂出の押し壓されて、草子のなかにありけるを見つけたる。又折からあはれなりし人の文、雨などの降りて徒然なる日搜し出でたる。去年の蝙蝠。月の明き夜」とある。

○繪かきすさびたる見出でたる「すさびたる」は下に「反故を」を入れて見よ。斯く連體形の下に名詞を入れる形の所が間間ある。

○長き夜のスサビ　繪かきスサビたる　スサ(荒)ブは自動詞で、四段活にも、上二段にもなる。意は同じ。一、甚だしくなる。二、慰む・

て、自分が再度、その時に立戻つた感じがするの意○此の比ある人―今も生きてゐる人○心もなくて―無心に。道具類は非情の物○かはらず久しき―道具はいつも變化なく長いことあるの意。暗に、その道具の所有者には、色色と身の上に變化もあつたことも匂はせてゐる。

（第三十段） 人のなき跡ばかり悲しきは無し。中陰の程、山里などに移ろひて便り惡しく狹き所に數多相居て、後のわざども營み合へる、心あわただし。日數の早く過ぐる程ぞ物にも似ぬ。果の日はいと情無う、互に言ふ事もなく、我れ賢げに物引きしたため、散り散りに行きあかれぬ。

【口譯】 人の死んだ跡位、後までの様を見ると哀な事は外には其の類がない。死の當座中陰の間は、山里の寺などに引き移つて、萬事便利惡しくせまい場所に遺族や親類どもが多くお互に住んでゐて、追善供養などをし合つてゐる（事が）各人共心が落ち着かない取急いでゐる事である。此の間は心が落着かないから氣ぜはしくて、日數の早く經つ工合はくらべる物が無い。中陰の終りの日になると甚だ無愛想に、お互に無口

【參考】
○物にも似ぬ　似る物も無しの意。
○あかれぬ　この「ぬ」は確實性をあらはしてゐる。それ故に「別れた」では無くて、「たしかに、別れる」の意。
○人のなき跡悲し　死後の永い末を見渡すと遂に死者は哀れな境遇だ。死の當座中陰四十九日の間は山寺等にて追善供養に專心であるが、四十九日の長い外泊、其の終日頃は家に歸りたくなる。そこで愈歸るとなると、死者の最近親少數は別として、弄ぶ。三、衰へ止む。の諸意がある。また「スサム」といふ活用にもなる。

になつて、さつさと、我れ敏捷さうに持つて來た物を引きまとめてそれから各自散り散りばらばらにめいめいの家に引き上げ別れる。

【摘解】 ○なき―死ぬ○悲しきは無し―大層悲し○中陰―死後七七四十九日の間をいふ○山里―山里の寺。寺は凡そ山に在る○移ろひ―移りの延言○便り惡しく―不便○數多○後のわざ―其の死人の死後の追善供養。之で死者の罪は段段輕くなる○營み合へる―連體形止めとなつてゐるから、下に「事は」などを略す○果の日―四十九日目の日○情無う―歸宅されると思つて、荷物まとめに專心し、ついお互は無愛想無口になる○我れ賢げ―我れは利口だといふ様な様子卽ち敏捷の動作をいふ○物引きしたため―持つて行つた荷物類を、歸宅するとて各まとめる事。「引き」は無意の接頭語○行きあかれぬ―別れ行くの意。「あかれ」はわかれと同じ。

もとの住みかに歸りてぞ更に悲しき事は多かるべき。しかじかの事は、あなかしこ、あとの爲に忌むなる事ぞなど云へるこそかばかりのなかに何かはと、人の心はなほうたて覺ゆれ。年月經ても、つゆ忘るるにはあらねど、「去る者は日日に疎し」と云へることなれば、さは云へど其のきはばかり覺えぬにや、よしなしごと云ひて打ちも笑ひぬ。

他は之で一先づ儀禮はすんだと、荷物纏めに專心に、事務的になつて無愛想に、從つてお互に無口になつて（そろそろ此の時、もう死者は關心されないといふ初めの取扱ひを受ける）、その心地で各自は別れて、それぞれ各自の家に重荷でも下りた様に急ぎ歸る。

【參考】
○何かは　何でそんなことをいふはずがあらうか、いふはずがない。人生の無情を感じて生死を超越して信仰心を起すはずだ。
○去る者は日日に疎し　死んだ者に對しては、段段日が經つに從つて忘れる

【口譯】 寺から、めいめいが別れて各自の家に歸ると、氣が落着いて死人を思ひ出し改めて悲みが多く感ぜられるはずである。此の際「これこれの事は、ああこはいことだ、そんな事いふと、後に殘つた生者の爲によくない、嫌はなければならないことだ」などと言ひ合つて互に警め合ふが、(寺住で死者に由つて純眞になつてゐた生死觀をして居た人人が、又生に執着するかと思はれるやうなことを云ふので)あんな淸い心でゐた間において何でそんなことをいふかと思はれて、人の心といふものは、本來執着のあるものだと思ひついて、やはりつまらないものだと思はれる。其の後年月がたつても、其の死人については、少しも忘れてしまつて、もう悲しくはないといふわけではないが、古語に「死んだ人に對しては日一日と段段うとくなる」といつてあることであるから、いくら忘れないと云つても、其の死んだ當時ほどには悲しいと思はないのであらうか、陽氣になつてゐて、つまらない冗談など云つて笑つたりなどする。

【摘解】 ○住みか―住み處の意。遺族・親戚の者が各自の家に歸る。住家の宛字を用ひる○しかじかの事―云云の事。これこれの事の意で、死者のあつた時には、それぞれ緣起を云つて忌むことをする。例へば友引きの日に葬式を出すと、ついで死人が出るなどと迷信多い時代にはよくいふことである○あなかしこ―嗚呼恐るべき事だ。避けなければならない事だなどいふ意○あとの爲に忌む―これから後にも死人の意。文選(書名)に「去る者は日に以て疎く、生者は日に以て親し。郭門を出でて直に視る、但丘と墳とを見る。古墓は犂かれて田と爲り、松柏は摧かれて薪と爲る。白楊は悲風多く蕭蕭として人を愁殺す」とあり、註に「去る者とは死をいふ、來るとは生をいふ。容貌を見ず故に疎きなり、歡愛して日を終ふ故に親しきなり」とある。

○更に悲しき事　歸りたいと希つて居た我が家に歸ると落着いて、更に(改めて)死者をいたむ心が再び生ずる。

○かばかりの中　死者に由つて山寺住みをして追善供養等佛道心を生じた、此の際にあたつて、なぜこんな事を云ふかと。

が次いで起るなど忌み避けること○斯ばかりの中―「死」によつて人生のはかない事など痛切に感じて居るこの際に、そんな生命を惜むことなどいふは、地金の出た口調だとの意○何かは―無常感の起つてゐる際に、そんな生を惜む意なることは何でいふ心持になるか、そんな事いふはずがないと○なほうたてけれ―やはり、俗人だなあと思はれて、死者をいたむ心が薄らぐことがなげかはしい。

骸は氣疎き山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつつ見れば、程無く卒都婆も苔蒸し木の葉降り埋みて、夕の嵐夜の月のみぞ言問ふよすがなりける。思ひ出でて忍ぶ人あらん程こそあらめ、其も亦程無く失せて、聞き傳ふるばかりの末末は、あはれとやは思ふ。

【口譯】 死骸は寂しい山の中に埋葬して、忌日忌日といふやうな相當な日だけ參詣して見ると、間もなく墓標は古くなつて苔がむし落葉も落ちたまつて埋め、人の來訪は無く、只、夕の嵐、夜の月ばかりが訪ふ知己の人にあたるだけである。それでも、死人を思ひ出して墓參りなどしてくれる人のあるうちはよいが、其の人もまた間もなく死亡して、其の後

○人の心はうたて　また生に執着して、死者には關心しない心持ちであるから、歎かはしい。

【參考】
○埋み　古は四段活用に用ひた。
○人あらん程こそあらめ　「人有らん程こそよくあらめ」の意。さういふ人があるうちはよいが、さういふ人も無くなるの意。
○末末　後世の子孫のこと。身分の低い意味ではない。
○あはれとやは思ふ　死の當座は、他人も死者を悼む。四十九日目位には、そろそろ死者は忘れられる。その人情が我れには

は只噂で聞き傳へるだけの子孫の人は、ああなつかしいと其の死人の事を思はうか、それきり墓參の人もなくなる。

【摘解】 ○骸○氣疎き山―寂しい山。氣は人氣などの氣ではない。只無意の接頭語○さるべき―然るべき○卒都婆―墓標。梵語である。細長い板と太い角柱のとがあつて上部は塔形をしてゐる○苔蒸し○木の葉○言問ふ―話をする。訪問する意○よすが―知己の人。便りとする人○忍ぶ―思ひ出して懐かしく思ふ○失せ―死に○末―後の子孫。

さるは、あと問ふわざも絶えぬればいづれの人と名をだに知らず、年年の春の草のみぞ心あらん人は、あはれと見るべきを、果は嵐に咽びし松も千歳を待たで薪に摧かれ、古き塚は鋤かれて田となりぬ。其の形だに無くなりぬるぞ悲しき。

【口譯】 さうなると。死後を弔ふ事も絶えてしまふから、其の墓主が何處の人とも名だけでも知られない樣になり、年年咲く春の草ばかりは、感傷の人はその春草を見て、ああここに古墓があると、あはれに見るで

【參考】
○いづれの人　白氏文集「古墓何の代の人ぞ。姓と名とを知らず。化して路傍の土と爲り、年年春草生ひたり」
○薪に摧かれ　前の「去る者は日日に疎し」の註にある「古墓は犂かれて田と爲り」である。
○田となりぬ。…無くなりぬる　「ぬ」「ぬる」は完了の意でなく、「たしかに」の意。
○さるは　一、然有るは。それは。二、さうではあるが。しかしながら。ことは一の意で、「さうなると」と譯する。
○形だになくなる　死のしるしたる墓も無くなつて死者の思出の何も殘らぬ、此處まで考へると、初め云ふ如く死者は哀だ。

「うたて覺」えて死者は哀れと思ふ。其の後は死者は日に疎く思はれ墓參もされず、子孫は全く無關心になる、故に死者は哀れである。

あらうに、その人も間もなく死に遂には嵐に吹かれて音立ててゐる松も天壽は千年であるけれども其の千年にならぬ中に伐り倒されて薪にされる通り、此の古墳もすき平げられて田に改造されてしまふ。そしてそこに墓があつたといふかただけでも見附からぬやうになるのが悲しいことである。即ち最初の「人の亡き跡ばかり悲し(哀れ)」である。

【摘解】 ○さるは―さうなると。あはれと思はないやうになると○心あらん人―物のあはれを知る人○果―遂には○嵐に咽ぶ―松を擬人していふ。嵐に吹かれて音を立てること○千歳を待たで―千年の壽命のあるとされてゐる松も、其の千年も來ぬ内に○其の形。

(第三十一段) 雪のおもしろうふりたりし朝、人のがりいふべき事ありて文をやるとて、雪のことなにともいはざりし返事に、「此の雪いかが見ると、一筆のたまはせぬほどのひがひがしからん人のおほせらるる事、ききいるべきかは。返す返す口惜しき御心なり」といひたりしこそをかしかりしか。

【參考】
○人のがり　「がり」は「が在り」のつづまつたもので、「の所」「の許」などの意。「の」の字なしに、「人がり」「醫師がり」などとも用ひるのが本體である。
○この雪いかが見る　よほど取急いで書いた手紙であつたのだらう。相手の

いまはなき人なれば、かばかりの事もわすれがたし。

【口譯】 雪が面白く降つた或朝、人の許へ、言つてやらなければならない事が生じて、手紙をやつたのに、雪のことを一言もいはなかつた、その返事に、「この雪を、どう御覽になるかとぐらゐ、一言仰しやらないやうな沒趣味なお方の仰せられる事は、どうして御承知できましようか、誠に、どう考へても、あまりお情けない御心です」と、いつてよこされたことがあつたが、全く面白いことであつた。その人は、今はもう此の世の人ではないからして、ますます偲ばれて、こんな些細なことでも忘れられない。

【摘解】 ○人のがり―人の許へ。人の所へ○文をやるとて―手紙を遣はすといふので。下に「必要な要件のみは書いたが」といふやうな語が略されてゐると見る○返事（カヘリコト）―手紙の返事○いかが見る―どう見るか。この雪を見てどう感じたか○一筆のたまはせぬほどの―ただ一筆でも仰しやらないほどの意。「ほど」はそれほどの意○ひがひがしからん人―心のねぢけた人―（不正直といふのではなく）つまり趣味を解しない人の意○口惜しき―殘念な。情ない御心であるの意○かばかり―これぱりの些細なこと。

（第三十二段） 九月廿日の比、ある人にさそはれ奉つりて、

【參考】 方では、兼好に一本參つて、この雪いかが見ると一筆のたまはせぬほどの云云と、ちよいと、すねて見せたといふやうな趣のある返事でもあり、また受信人は多分女であらう。そして兼好とは親しい間柄でだつたらう。更に此の時の兼好の申し送つた手紙の要件は、返事を要する樣な大切な事件でなかつたか。或は兼好の申し込みに從はれない要件であつたものかとも推量される。それで返事はしないで、よそごとで紛らしたものとも思はれる。

明くるまで月見ありく事侍りしに、おぼしいづる所ありて、あないせさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬにほひしめやかにうちかをりて、しのびたるけはひ、いとものあはれなり。

【口譯】 九月（陰暦）二十日頃、ある身分ある方に誘はれて、そのお伴をして、夜があけるまで、月を見て歩いた事がありましたが、その途中、その方が、ふと思ひ出された所がありまして、供の下人（シモベ）に案内を乞はせて、其の家の内におはひりになりました。私は、その間暫く外に立つて待つてゐましたが、見れば、手入も行屆かないと見えて、庭は荒れてをり、草には一面に露がおいてをり、どこともなく、殊更焚いたやうなのではない香のにほひが、しつとりと、あたりに立ちこめ、その家の主人は、世を避けて、こつそりと住んでゐるらしい樣子が、いかにも趣深く感ぜられるのでした。

【摘解】 ○九月廿日頃（ナガツキハツカ）○ある人―次に、「さそはれ奉りて」「おぼし出づる」等の敬語が使はれてゐるので、身分ある人に相違ない○あないせさせて―案内をさせて。「案内」は取次を乞ふこと。「せさせ」は使役の助動詞○わざとならぬにほひ―わざ

○明くるまで　二十日頃の月は、八時過ぎになつてから登る。そして、西の空に入らない内に夜は明けてしまふのである。

○わざとならぬ　平素からのたしなみで焚いてゐる香である。

○ありく　「歩るく」こと。「ありく」も「あるく」も同意の語である。本居宣長翁は「ありく」は早く、後に「あるく」が出來たといふ。

○はべり　ラ行變格。「這へり」を音便にてハンベリと濁るを、更に約めた語といはれてゐる。本來は會話として用ひられる語であるが、後に會話ならずして、只「有り」「居り」の敬語として用ひられてゐる。

○せさせ給ふ　此の「サセ」は使役として用ひらる。

わざと香を焚いて人に示すやうなのではなく、何時も焚いてゐる○忍びたるけはひ―世を忍んでゐる氣配。

よきほどにて出で給ひぬれど、なほ事ざまの優におぼえて、物のかくれよりしばし見ゐたるに、妻戸を今少しおしあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、くちをしからまし。跡まで見る人ありとはいかでかしらん。かやうの事は、ただ朝夕の心づかひによるべし。その人ほどなくうせにけりと聞き侍りし。

【口譯】 さて、自分のお供した方は、それから暫くして出ておいでになりましたけれど、自分は、なんだかまだ、その家の樣子が優雅に感じられましたので、物蔭から、暫く見てをりました。ところが、中の人は妻戸を、もう少し押しひらいて、靜かに月を見てゐる樣子でありました。自分は思ひました、客が歸られた、そのとたんに戸をしめて家の中へはひつてしまつたのでは、あまりに現金すぎて、どんなに殘念な氣がするだらう、一體、こんな場合、そつと隱れて、客の出たあとまで覗いてゐる者

【參考】
○妻戸　兩方へ開く戸。ひらき戸。舞戸ともいふ。部屋の隅だの、廊下の端などにあつて、人の出入口になるもの。板でできてゐて、兩びらきになつてをり、開く時は外方にひらく、內外に懸金が打つてあつて、戸が風にあふられないやうになつてゐる。
○まし　最初に事實と反對した事を假定して置いて其の後にマシを用ひてその狀態を推量する語。「今日來ずは明日は雪とぞ降りなマシ消えずはありとも花と見マシや」といふ如く、現在來てゐながら、「今日來ずば」と反

があらうとは、どうして知つてゐる筈があるだらうか、(して見ると、客の出た後まで、佇んでゐるといふ、情緒の深いやりかたは、その人が、わざわざやつたのではないことは當然である。かういふ事は、俄にやらうと思つても、できる事ではない。)ただかういふ動作といふものは、常日頃の心掛けによつて生ずるものであるのだ。と。その人は、其の後、間もなく亡くなられたといふことであります。

【摘解】 ○よき程―暫くして○事ざま―その全體の樣子○優―優美○物のかくれ―物の蔭になつた所○妻戸―部屋の出入になるひらき戸○今少し―貴人の出る時、開いたのを、更に今少しの意○けしき―樣子・氣配○やがて―すぐさま。貴人が出る、そのとたんにの意○かけこもらましかば―騙けて家の中に入ること。「ましかば」推量の言葉○くちをし　からまし―兼好自身が口惜しいといふ感じがしたであらうの意。「くちをし」は殘念○跡まで見る人ありとはいかでか知らん―客が歸つてしまつた、そのあとまで覗いて見てゐる人があらうなどと、どうして知つてゐようかの意○その人―その家の主人。貴人ではない。

(第三十七段) 朝夕へだてなくなれたる人の、ともある時、我に心おき、ひきつくろへる樣に見ゆるこそ、今更かくやはなどいふ人も有りぬべけれど、なほげにげにしくよき人

對の狀態を假定し、其の後で「明日は雪の如くになつて、此の櫻花は落花しようさうしたらもう花とは見られまい」と二度推量してゐるのである。このマシは、一、只「ダラウ」と推量する意で、ムと同意の事もあり。二、もう一度反轉する場合もある。上にマシカバとあつて、下に更にもう一度マシと止める古格である。此處の、かけこもらマシカば、口惜しからマシの如し。

【參考】
○ともある時　ふだん仲のよい友達などで、互に笑談などいひ合つてゐる仲間であると假定し、その

かなとぞおぼゆる。

うとき人の、うちとけたる事などいひたる、又よしとおもひつきぬべし。

【口譯】 平生(イヘイ)、何の遠慮もなく馴れ馴れしくしてゐる人が、どうかした時に、自分に對して氣がねをし、何となく改まつた樣子に見えることがあるのを、「何も今更になつて、こんな風をしないでもよかりさうなものだ」といふ人も事によるとあるかもしれないが、自分には、やはり、さういふのは、尤もらしくて、いい人だわいと思はれるのである。又、一方、ふだんは疎遠な人で、ふと、打解けた事などを話しかけるのも、これ又よいとたしかに考へられるであらう。

【摘解】 ○へだてなくなれたる人―隔てなく慣れたる人○ともある時―どうかした折○心おき―氣がねをする○ひきつくろへる樣(サマ)―態度を改めること。わざとらしく―他所行(ヨソユキ)の樣子をすること○今更かくやは―今となつて、かう改つてきちやうめんな態度をする必要があらうか。(反語)○げにげにしく―尤もらしいこと。成程さうもあるべき事と○うちとけたる事―笑談(ジヤウダン)など、くだけたことをいふ意。

(第三十八段) 名利につかはれて、しづかなる暇なく、一生

【參考】

一人の方に、何か改つた場合が生じた――例へば、その人の師とか父母とかに出會つた時など、一緒にゐる友達は、その友に對して、改つた態度を取るのがふさはしいのである。さういふ場合を取上げて述べてゐるのであらう。

○有りぬべけれど「慥に有るべし、されど、それは」の意。

有	ラ	ナ	ベク
	リ	ニ	ベク
	リ	ヌ	ベシ
	ル	ヌル	ベキ
	レ	ヌレ	ベケレード

を苦しむることそおろかなれ。

財おほければ身を守るにまどし。害をかひ累をまねくなかだちなり。身ののちには金をして北斗をささふとも、人のためにぞわづらはるべき。おろかなる人の目をよろこばしむるたのしみ、またあぢきなし。大きなる車、肥えたる馬、金玉のかざりも、心あらん人は、うたておろかなりとぞ見るべき。金は山にすて、玉は淵になぐべし。利にまどふは、すぐれておろかなる人なり。

【口譯】 此の世の名聲や利欲を得んとして、それに追ひ使はれて、心靜かな暇もなく一生をあくせくと苦しんで終るといふのは實に馬鹿げたことである。

一體、人間といふものは、財寶が多ければ、表面から見たところでは、いかにも安樂のやうに見えるが、自分の身を、ほんたうの意味から保全する上からいへば、却つて不安なものである。卽ち、財寶が多いといふことは、他人から危害を受け、心配事を招くための、きつかけになるも

○金(コガネ)をして北斗をささふ　白樂天の勸酒に「身後に金を堆(ウヅタカ)くして北斗をささふとも、生前一樽の酒に如かず」

○金(コガネ)は山にすて　班固の東都賦に、「織美を恥ぢて服せず、綺麗を賤みて珍とせず、金を山に捐(ス)て、珠を淵に沈む」

○「名利に使はれて、靜かなる暇なく、一生を苦しむるこそ愚かなれ」

これが全章の總論・骨子であつて以下は其の箇別的の論評である。

先づ全章は名と利とに就いての論である。

「利」についていへば、財はつまらぬもの、その爲に害を受け煩ひとなる。死後までも財ある爲に子孫の爭ともなる、財あるが爲に得らるる樂みは無

のである。自分が死んでからの後に、たとへ黄金を積んで北斗星にまで屆かせるほどであつたとしても、つまるところは、死後に財産爭ひなど生じて、他人から厄介視されるのが落ちである。又、財があるとて、心の愚かな人の目を喜ばせるやうな享樂も至極つまらないものであつて、大きな立派な乘用車、肥えふとつた馬、黄金や珠玉の裝飾といつたやうな物も、物の道理を辨へた人にとつては、甚だしい愚の骨頂だと思はれるに相違ない。いつそのこと、黄金は山に捨て、珠玉は淵に投ずるに如くはない。總じて、利欲に迷ふのは、極めて愚な人である。

【摘解】 ○名利(ミヤウリ)―名譽や利益○つかはれて―迫ひつかはれて。驅使されて。利欲とか名聞を得る爲、一生をすりへらしてしまふ○財(タカラ)―財寶○まどし―貧し。貧弱である。缺けるところがあるの意。財寶が多いと、それを失はじとて、人生の尊嚴平和などを考へる暇もないことをいふ○害をかひ―危害を受ける。「かひ」は買ふことで、まねく意○累(ワヅラヒ)○なかだち―きつかけ。よすが○身ののち―死後○金(コガネ)をして北斗(ホクト)をささふ―「北斗」は北斗星のこと。北天にあたり、杓子の形をなしてゐる七つの星。北斗七星ともいふ。ここの句意は、「黄金を積んで北斗星の支へ棒とする」といふので、北斗を支へ得るほど高く黄金を積むこと○人のためにぞわづらはるべき―「わづらはる」はわづらひとなること。厄介物に考へられる。あつかひに困るの意。子孫等の爭材となること○おろかなる人の云云―愚な人が喜ぶ耳目の樂しみを黄金によつて得ることもつまらぬといふのである。愚なる人が、耳目を喜ばせて樂しむやうな享樂○あぢきなし―つまらない。何の意味もない○金玉(キンギヨク)のかざり―金や珠玉で作つた裝飾○うたて―うたたと同じ。厭はしく。

意味なものといひて、遂に金玉の如き財に遠ざかべしといふ。

次に「名」に就きていへば、名は決して其の人の眞の價に由つて與へられる物では無い。運命にて凡夫も家に生れなば名を得、聖人・賢人も名を得られぬ事がある。

又、名の内で「智慧」あり、「心」が高潔だといふ名を得ても、それは一時的のもので永存すべきものではない。一時的の物を得んとて苦心するは愚である。否智や心は老子の言に依れば却て害となる。其の智は本體的の智では無い。故に「名」と「利」とは人生に無意味なものだといふ。つまり前途有爲の青年には消極厭世的な論でよゝないのである。

うづもれぬ名をながき世に殘さんこそ、あらまほしかるべけれ。位高くやんごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。おろかにつたなき人も、家に生れ時にあへば、高き位にのぼり、おごりをきはむるもあり。いみじかりし賢人・聖人、みづからいやしき位にをり、時にあはずしてやみぬる、又おほし。ひとへにたかきつかさ位をのぞむも、次におろかなり。

【口譯】 不朽の名を後世長く殘さうといふことは誠に願はしいところであらう。しかしながら、單に位階勳等が高く身分が尊いことだけで、その人が偉い人であると斷言できるだらうか、それは何とも斷定できない。そのわけは愚かで劣つた人でも、よい家柄に生れ、うまい時節にぶつかれば、高い位に昇つて榮華を極めるのもゐる。之に對し、實に立派

【參考】
○うづもれぬ名　白氏文集「故元少尹集の後に題す」詩の中の、「遺文三十軸、軸軸金玉の聲、龍門原上の土、骨を埋めども名を埋めず」(龍門原は唐代の長安附近の墓地)
○みづからいやしき位にをり　嵇康の「山巨源に與へて絶交する書」の中の句、「老子・莊周は吾が師なり、親ら賤職に居る、柳下惠・東方朔は達人なり、卑位に安んず」
○やんごとなき　已むこと無しの意である。「貴い人」の義。
○いみじかりし賢人・聖人　これらは却て世には不遇

な聖人・賢人が、其の身は卑い位にあり、時節に遭はずして、そのまま一生を終つてしまふとしふやうなものも多いのである。かう考へて見ると、只一途、高位高官を希望するのも、前にあげた、ひとへに利を求めるものに次いで馬鹿なことである。

【摘解】 ○うづもれぬ名―埋もれてなくなつてしまふのでない名。不朽の名聲○ながき世―長き後世にいつまでも殘す意○あらまほし―ありたいものである○やんごとなきをしも―「ヤンゴトナ貴き人をしも」と補つて考へる○やはいふべき―いふべきであらうか、否さうでない○家に生れ―「家」は名門。其の名門に生れ○時にあへば―時節にうまく會へば○いみじかりし―非常に立派であつた○ひとへに―むやみ一途と。ひたすらに。

智慧と心とこそ、世にすぐれたる譽ものこさまほしきを、つらつら思へば、ほまれを愛するは、人の聞きをよろこぶなり。ほむる人、そしる人、共に世にとどまらず。つたへきかん人、又又すみやかに去るべし。誰をかはぢ、誰にかしられん事をねがはん。譽は又毀の本なり。身の後の名のこりてさらに益なし。是を願ふも、次におろかなり。

【參考】 ○世にすぐれたる 「世に、すぐれたる譽も、のこさまほしき」であるか、「世にすぐれたる譽も、のこさまほしき」であるか、古文では、「世にすぐれたる」であつて、「すぐれたる譽も、世にのこさまほしき」ではないのである。「非常に優れた名聲である。孔子は委吏や乘田となり。一生不遇であつた。賢人たる顏回は一瓢の飲一箪の食で陋巷に貧であつた。されば社會上の地位や貧富で、其の人の人格を定めることは出來ない。その不定なものを得んとするは物質上の慾望以外には凡そ無意味だ。

【口譯】 知識と精神とこそは、特に優れて立派な人だといふ名譽を、後の世までも殘したいものであるけれど、それも亦、よくよく考へて見れば、一體、名聲名譽を重大視するといふことは、他人の評判を喜ぶことである。さて然らば、その褒める人又毀る人はどうかといふに、兩方とも、いつまでも世の中に生きてゐるものではない。またその名聲を傳へ聞く人も亦、直ちに、この世を去るであらう。では一體、誰に對して恥づかしい思をし、誰に我が名聲を知られようといふ事を願ふのであるか、誰といつて、相手が無いことになるではないか。元來、人から褒められるといふことは、一面他人からそしられる原因である。我が身死しての後の名聲が、よしんば殘つたところで、何の益もない。であるからして、かく名聲を死後にまでも、希ふのは第三に馬鹿らしいことである。

【摘解】 ○智慧(チエ)○人の聞き―他人の聞え。世間の評判○世にとどまらず―この世に永久に生きてはゐない○誰をかはぢ―誰に對して恥づるかの意○譽は又毀(ソシリ)の本(モト)なり―一方で譽められるといふと、必ず他の一方で惡くいはれる○身の後の名―死後の名聲○是を願ふ―死後の名聲を願ふのもの意。

ただし、しひて智をもとめ賢を願ふ人のためにいはば、智慧出でては僞あり。才能は煩惱の增長せるなり。つたへて

を後に遺すの意である。○智慧と心とコソ、世にすぐれた譽も殘さまほしきを「コソ」の係辭に對する結(ムスビ)としては、「殘さまほしケレ」とすべきであるが、最後の「ヲ」に接續する爲に「欲シケレ」を「欲シキ」として(ヲは活用語の連體形に接續する定めである)「殘さま欲シキを」したのである。即ち結(ムスビ)を轉じて、つまり結ばないことにしたのである。これは大槻博士の命名せる「聯構文の、數文聯絡するものは、結を轉ず」に當る。

【參考】 ○智慧出でては云云 老子(ラウシ)に、「大道廢(スタ)れて仁義有

聞き、學びてしるは誠の智にあらず。いかなるをか智といふべき。可不可は一條なり。いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく、德もなく、功もなく、名もなし。誰かしり誰かつたへん。是れ德をかくし愚をまもるにはあらず。もとより賢愚得失のさかひにをらざればなり。

まよひの心をもちて名利の要をもとむるに、かくのごとし。萬事は皆非なり。いふにたらず、願ふにたらず。

【口譯】 但し、無理にも知識を求め、賢明にならうといふことを希望してゐる人に對して說明するならば、一體、人間は知識が發達して來たその結果僞りといふものが生じたのであり、才藝智能といふものは、人間の慾望の聚積したものである。（太古、人間が至純な心情を有してゐた時代には僞りといふものはなかつたのである。又、何とかして名譽を得よう、金を得よう、高位を得ようと慾望を働らかせるものであるからして、互に競爭して、そこに藝能が發達して來たのである）。他人から傳へられて始めて知り、人から敎へられて始めて分るやうなのは、ほんたうの知識ではない。では、如何なるものを知識といふか、ほんたうの知識は人間の世の中にはないのである。又我我のいふ善とか不善とかも、例へば神とか佛とかいふ偉大な存在から見れば、畢竟は、區別のない一つのもので、只人間社會に於てのみ善惡の區別があるのである。だから、眞の善とは何ぞやといふことになると、この眞の善といふものも、人間の世の中には存在しないのである。絕對の存在、凡俗を超越した至上の存在には、智もなく、德もなく、功もなく、名もない。だからして、凡俗の目に見える何物もないのであつて、誰が之を認め、誰が之を後世に傳へることができようか。かかる超俗の存在は、强ひて、自らの德を隱し、愚をよそほふのではない。元元から賢愚とか得失とかの境界を超越してゐるからである。我我俗世間に住んでゐて、常に迷ひの心を以て名譽や利益といふ私慾を求めるとは、こんなものである。世の中のことは凡て無である。青筋たてて之を論じたり、懸命に之を求めるの必要はないのである。

【摘解】 ○智慧出でては云云—太古、人が自然のままに生活してゐる時には僞（イツハリ）といふものはなかつたので、僞の生じたのは、人智が進步して、人間が利口になつたからであるの意○才能は煩惱（ボンノウ）の云云—才能は煩惱の甚しくなつた結果出來たものであるの意。煩惱長じて才能が生じたのであるの意○誠の智—俗世間を超越した絕對

り、智慧出でて大僞有り、六親和せずして孝慈有り、國家昏亂して忠臣有り」といつたのを採つた。仁義の道は、自然に具はつた道が失はれたから生じたのであり、孝行とか慈愛とかいふ敎は、親子兄弟親戚が互に相和さなくなつたから、その必要が生じたのであり、忠臣は國家が亂れるから必要なのであるといふほどの意である。

○まことの人　莊子に、「眞人有りて、而（シカ）る後に眞知有り」とあるのを譯した語。

○この「名利につかはれて」の一段は、兼好が、佛敎の退嬰的思想に加ふるに、老莊の現實否定的な、虛無的な人生觀に深く傾到してゐた事を示すものであつて、當然、現代の思想と相反するものであり、ここに兼好がいつてゐるやうな虛無的な思想をそのまま現代に移植することは不可能であるばかりでなく、大きな間違である。かかる超世間的な虛無的な見方、思想が、老莊の敎や、一部の佛敎思想によつて、我が國民精神の中に注がれた、またその結果として、かかる國文學上の所產となつた事實は認めるべきであるけれども、それは今日の思想と根本的に相容れない思想である所以を深思し、虛無的思想に對する批判を十分に持つべき必要があるのである。

○名利の要　この「の要」を、林道春の野槌といふ書の說に從つて一般に誤りとしてあるが、しかし、此の用法はしばしばある

の智。第一義に於ける智。眞の意味に於ける智○可不可―可は善のこと。善とか不善とかは一體のものであるの意。これも、善惡の差別をつけるのは人間社會での善惡であつて、俗世間を超越せる處にあつては、善も、惡も存在しないのであるから、從つて、善惡の區別も立たないといふ意味○是れ德を云云―まことの人が、德もなく、功もなく等等といつたが、それは德があつて、それを隱してゐるといふ意味ではなくて、德とか、功とか等等の上に超越した存在であるといふ意○名利の要―今まで色色と書いて來たが、名利を求めることは、つまるところ、此のやうなもので、つまらない事であるの意。「の要」の二字は古來色色説があつて、この二字は衍文（よけいな文字）と見るのもある○萬事は皆非なり―世の中のことは凡て「非」であるといふので、「非」とは「否定」の意。「虛無」であるといふのである。

（第四十一段） 五月五日、賀茂のくらべ馬を見侍りしに、車の前に雜人立ちへだててみえざりしかば、各おりてらちのきはによりたれど、ことに人おほくたちこみて、分け入りぬべきやうもなし。かかる折に、むかひなるあふちの木に、法師ののぼりて、木のまたについゐて物見るあり。とりつきながら、いたうねむりて、落ちぬべき時に目をさます

ので、此の「要」の意味は段段轉じて、私利・私欲などの意になつて、その用法で用ひたとすれば强ち誤りとすべきものではない。今しばらく「名利の要」を「名譽や利益といふ私慾」と譯した。

【參考】
○くらべ馬　昔、內裏の豐樂院で五月五日に騎射の儀が行はれた。その時に、五位以上の人が、「はしり馬」を奉つたことがあつた。その儀は途中に廢せられてしまつたが、賀茂神社に、そつくり傳へられて、殘つたのであるといふ。今は六月五日に行はれる。
○あふちの木　楝科、楝屬に屬する落葉喬木で、幹の高さは十米にも及ぶ。枕草子に、「木のさまぞ、憎くげなれど、楝の花いとをかし。……必ず五月五日に會ふもをかし」とある。五月五日に花が咲くのも奇妙であるといつたのである。楝とも樗とも書く。
○分け入りヌべきやうもなし。
落ちヌべき時に目をさます。
のヌは完了助動詞の　ナ　ニ　ヌ　ヌル　ヌレ　の　ヌである。「恐らくは」「たしかに」「十中八九は」の意にあたる。

事度度なり。

【口譯】 五月五日に、賀茂の競馬を見物致しましたところが、車の前に一般民衆が立ち隔てて見えませんでしたので、各各車を下りて柵の傍まで近寄りましたが、その邊は、殊更に、人が混雜して、とても、柵のそばまで分けて入る方法もありません。そんな際、向う側の樗の木に、坊さんが登つて、木の叉にうづくまつて見物してゐるのがありました。木につかまりながら、よく寢込んでゐて、たしかに落ちさうになると、はつと目をさます、これを何度もくりかへしてゐるのでした。

【摘解】 ○賀茂―京都の賀茂神社○くらべ馬―競馬○車―傘好の乘つてゐた牛車○雜人―下賤の者○立ちへだて―車と競馬場の間に民衆が群集して、その間を隔てゐること○各―各自に○らち―埒の字を當てる。馬場の周圍の柵をいふ○よりたれど―寄つて行つたけれど。ここでは、事を下りて、柵の方へ近寄らうとしたけれど、混雜してゐるので、できなかつたのである○やうー樣。方法○むかひなるー向う側の○あふちの木―樗の木。俗に「せんだん」ともいふ。五月頃に紫がかつた黃色つぽい花が、一ぱいに咲く○木のまたー木の叉○ついゐてーうづくまつてゐて。「ついゐ」は膝をついて、しやがんでゐること○落ちぬべき時―落ちさうになると、その時に、の意。「ぬ」は完了の助動詞。今にも恐らく落ちなんとする時。

これを見る人、あざけりあさみて、「世のしれものかな。かくあやふき枝の上にて、やすき心ありてねぶるらんよ」といふに、我が心にふと思ひしままに、「我等が生死の到來、ただ今にもやあらん。それを忘れて、物見て日を暮す、おろかなる事は、なほまさりたるものを」といひたれば、前なる人ども、「誠にさにこそ候ひけれ。尤もおろかに候」といひて、みなうしろを見かへりて、「ここへ入らせ給へ」とて、所をさりてよび入れ侍りにき。

【口譯】で、その樹上の坊さんを見る人は、みな、嘲笑輕蔑して、めいめい、「何とまあ、世にもあきれた馬鹿者ぢやないか。あんな危ない木の上で、のんきな氣持に眠つてゐるとは、實に言語道斷な奴だ」と話し合つてゐるのを耳にしましたので、私の胸中に、ふと思ひ浮かんだことを、そのまま、「私共の死期が來るのは、今眼前にあるのかも知れませんが、それに氣づかずに、こんなに物見に興じて、日を暮すとは、その愚かな點では、あの坊さんに、輪をかけたやうなものではありません

【參考】
○生死の到來　「生死」は「生き死に」であるが、かういふやうな場合には、前後の關係から、死の方に重い意味が含まれて、生は、ただそれに添はつた語と見るべきである。
○所をさりてよび入れ　向うの木の上で坊さんが「ゐねむり」をしてゐる。兼好は一家の言を、獨り言のやうに喋つた。「五月五日」から、ここまでの叙述は、その場面を、ありのままに寫生してゐる。以下の一節は、後日、兼好が、このことを筆にして、この文を書いた時に感じた感想と見るべきである。
○(一)あさむ(自動、四段)　意外だとして驚く。
例、撰集抄「その里のものども、目も珍らかに覺

か」といひましたところが、前方に立つてゐた人達は、「ほんたうに、さうでありましたわい。全く、我我はどうも愚かでありました」といひまして、皆、後ろを見かへつて、「どうぞ、ここへおはひり下さい」といひながら、自分等の占めてゐた場所をどいて、私共を呼び入れてくれたのでした。

【摘解】○あざけり—嘲笑すること○あさみて—「あさむ」は侮る意、「あざむ」は驚きあきれる意と區別するともいふ。思慮が淺いといつて輕蔑すること○世の—世にも、世間といふ意はなく、甚だしいの意○しれもの—馬鹿者。無分別者○やすき心—安い氣持。安心しての意○ねぶるらんよ—よくもまあ、ねぶれたものだなあ○我が心—兼好自身の心○生死(シヤウジ)—「生」は意味はない。死の到來である。死期の到來○ただ今—たつた今。目前。眼前○もやあらん—たつた今であるかもしれない○物見て—物を見物して。物見遊山して○なほまさり—木の上の坊さんに比べて、なほ一層の意○さにこそ—左樣でこその意○所—その人たちの占めてゐた場所。

かほどのことわり、誰かは思ひよらざらんなれども、折からのおもひかけぬここちして、胸にあたりけるにや。人木石にあらねば、時にとりて物に感ずる事なきにあらず。

【口譯】こんな理窟は、誰が氣づかないことがあらう、誰しも思ひつく

えて、あさみののしること となのめならず」
(二)淺む(他動、四段)　賤しむ、嘲る。
例、ここの例にあたる。
(三)諫む(他動、下二段)　古語である。
例、天武紀「上は下の過ちを責め、下は上の暴を諫め、乃ち國家治まる」
(四)欺く(他動、四段)
1、いつはる。
2、嘲る。そしる。
3、風月に向ひ吟嘯す。

【參考】
○かほどのことわり　こんな道理。兼好が「生死の到來ただ今にもやあらむ云云」といつた道理。
○人木石にあらねば　人間には皆、喜怒哀樂の感情

理窟であるのだけれども、丁度、時が時だけに、思ひもかけない心地がして、各人の心に、はつと感じたのであつたのでせう。人間は皆、木石ではありませんからして、何かの場合に、はつと感ずる事があるものであります。

【摘解】 ○誰かは思ひよらざらんなれども―「誰か思ひよらざらんものあるべきなれども」の意。誰か思ひつかないものがあらうか、みんな思ひつく筈の道理ではあるのでありながら○折からの―鶯鳥を見に來て、皆、面白さに有頂天になつてゐるといふ場合が場合なのでの意○胸にあたり―心にはつと感じたことをいふ○木石(ボクセキ)にあらねば―木や石のやうに非情の物でないからして○時にとりて物に感ずる―折にふれて、何事かに感ずるといふこと。

(第四十三段) 春の暮つかた、のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家の、奥ふかく、木だち物ふりて、庭に散りしをれたる花、見過ぐしがたきを、差入りて見れば、南面の格子皆おろしてさびしげなるに、東に向きて、妻戸のよきほどにあきたる、御簾のやぶれより見れば、かたち清げなるをとこの、とし廿ばかりにて、うちとけたれど、心にくくがあつて、木や石のやうに、非情のものではないからしての意であるが、文選(モンセン)の詩に「人木石に非ず、皆情有り」の句によつて書いたのであらう。

○胸にあたりけるにや 下に「あらん」を略してある。

○誰かは思寄らざらん 「誰、思寄らざらんか」

【参考】 ○いやしからぬ家の云云 文脈からいふと、賤しからぬ家―その家の様子を、なほ細かにいふならば、次の如くならう。一、奥深くあり、二、木立は物ふり、三、庭に散つた花の風情など、凡てが、見過しがたいといふのである。

のどやかなるさまして、机の上に文をくりひろげて見ゐたり。いかなる人なりけん。たづねきかまほし。

【口譯】 暮春(ボシュン)の頃、靜かにのんびりとして、しかも花やかな空合の或日のことであつた。ふと某所を通りかかつた所が、上品な住居が一軒あつた。邸内は、相當に奥も廣く、植込なども時代がついて、庭の面に散りしをれてゐる花の趣きなど、いかにも、そのまま見捨て去るわけに行かない氣がしたので、そつと中に入つて見ると、南向きの格子戸は皆おろして、淋しげであるが、東に面して、妻戸が程よく開いてゐる、御簾(ミス)の破れから見やると、容貌の秀麗な男子が、年の頃は二十歳前後で、うちくつろいではゐるが、どこか上品に奥床しく、のんびりと落着いた様子をして、机の上に書物をひろげて讀んでゐるのであつた。どういふ人であつたのか、身分など尋ね聞きたいものだと思つた。

【摘解】 ○春の暮つかた(クレ)―春の終りどろ。「暮つ方」には夕方の意もあるが、ここは、さうでなく、春の終り頃の意○艶(エン)なる―春の空合ひが、どこか花やかに氣も浮きたつやうなのをいふ。「空」はさういふ空合の日といふ意を含めてゐる○南面(ミナミオモテ)―南に面した方○よきほどに―程よく○御簾(ミス)―格子の内部には「みす」を下げるのが例である○かたちきよげ―風貌の秀麗であること。「きよげ」は秀麗さうなといふの

○假名遣ひ 國語の歴史的假名遣によつて文を書くときは時時其の何れであつたか迷ふことがある。本段にて擧げると次の如きものがある。これらは讀書の際に注意しなければならぬ。即ち

卑	イ
家	イヘ
奥	オク
庭	ハナ
萎る	ヲレ
入り	イリ
面	オモテ
格	カウ
下し	オロシ
男	ヲトコ
机	エ
上	ヘ
居	ヰ
如何	イカ
尋ね	ヅネ

ではなく、秀麗であること○うちとけたれど―打ちくつろいだ様子ではあるが○心にくく―どこか上品に奥床しいこと。

（第四十四段） あやしの竹のあみ戸のうちより、いとわかき男の、月影に色合さだかならねど、つややかなる狩衣に、こきさしぬき、いとゆゑづきたるさまにて、ささやかなる童ひとりを具して、遙かなる田の中の細道を、稲葉の露にそぼちつつ分け行くほど、笛をえならずふきすさびたる、あはれと聞きしるべき人もあらじとおもふに、行かん方知らまほしくて、見おくりつつ行けば、笛を吹きやみて、山のきはに惣門のあるうちに入りぬ。榻にたてたる車の見ゆるも、都よりは目とまるここちして、下人にとへば、「しかじかの宮のおはします比にて、御佛事などさふらふにや」といふ。

【参考】
○狩衣　もとは狩猟に出た時に着用したもので、麻を用ひて作つたが、平安朝の中頃より、身分ある人の常服となり、地質も、綾などを用ひるやうになつた。色や紋も身分・年齢で色色ある。袖には「くくり紐」がついてゐる。今神社の祭式などの折に、神職が、冠でなく、烏帽子を頭につける時には、主にこの狩衣を着用する。
○さしぬき　指貫とも、奴袴とも書く。狩衣（又は直衣）を着用する時に、下につける袴であつて、裾にくくり紐があり、しめるやうになつてゐる。

【口譯】 粗末な竹の編戸の中から、ごく若い男が出て來る。月の光に何色だか、色合は、はつきりしないが、よい艶のある狩衣を着、濃紫の指貫袴を穿ち、いかにも、由緒ありげな樣子で、小さな可愛い童を一人連れて、遙かに續いてゐる田圃の中の細道を、稲葉に置く露にぬれながら辿り行くのであるが、歩きながら、笛を實に上手に吹き興ずる。こんな片田舎のことではあるし、ああ實によい風情だと、その趣を解する人もあるまいと思ふにつけても、かかる風雅な青年の行方を知りたくなつて、うしろから、そつと見送りつつ、あとをついて行くと、やがて彼は笛を吹きやめて、山の傍の惣門のある所へはひつたのである。見れば、門内には、榻に立てた車も見える。それも、都とちがつて、この邊では、いかにも珍らしく目につくやうな氣がして、そこにゐた下部に訊ねたところが、「何某の宮樣が、この頃、此處においでになつてをられますので、何か御佛事でもあるのでございませう」と答へた。

【摘解】 ○あやしの―粗末な○竹のあみ戸―竹で編んだ戸○うちより―内より出での意○色合さだかならねど―狩衣の色ははつきり見きはめられないがの意○つややかなる―つやがよくて美しいの意。月光で見たのであるから、多分品がよいのであらう○狩衣―中古貴人の常服○こき―濃き。此の時代、男の服裝で濃き淡きといふのは、必ず紫色である○さしぬき―指貫とかく。狩衣の時にはく袴○ゆゑづきた色や紋は身分・年齢で色色である。
○惣門のあるうち　何か別莊めいた所で、その一部の建物を寺にした所であるらしい。
○の
本段中の「ノ」を拾へば、
あやしノ竹ノ編戸ノ
いと若き男ノ
田ノ中ノ細道を
稲葉ノ露
山ノ際に
惣門ノある
車ノ見ゆるも
しかじかノ宮
御佛事などノ候
御堂ノ方に
空薫物ノ香
御堂ノ廊に通ふ女房ノ追
　風用意
秋ノ野ら
蟲ノ音
遣水ノ音
都ノ空

る―何か由緒ありげなことをいふ○童―子供○具して―連れて○そぼちつつ―ぬれそぼちながら○えならず―何ともいへず上手にの意○ふきすさび―「すさぶ」は「すさむ」ともいふ。いよいよ進むこと。笛をふいて益益それをつづけて行く、即ち、興じ入ること○あはれと聞きしるべき人―ああ面白い、風情があるわいと感じて、その音に耳を傾けるやうな人○知らまほしく―知りたく思ふ○見おくりつつ―見送りながら後をついて行く○惣門―大門ともいふ。外構へにある正門○榻―牛車の牛を離した時に、その車の轅をもたせおく臺○立てたる―榻にもたせかけたの意○都よりは―都では見なれた光景であるが、かかる山里ではめつたに見ないところであるから、殊更に、それは目につくやうな氣持がするといふのである○下人―下人○しかじかの宮―これこれの宮様―下人ははつきり名前をいつたのであるが、ここには、わざと、その名を略したのである○御佛事―法會○さふらふにや―あるのでございませうかの意。

御堂のかたに法師どもまゐりたり。夜寒の風に誘はれくるそらだきものの匂も、身にしむここちす。寢殿より御堂の廊にかよふ女房の追風よういなど、人目なき山里ともいはずこころづかひしたり。

雲ノゆきき
月ノ晴れ
是等の「ノ」の意味を分類して見るも面白い。
○つつ
稲葉の露にそぼちつつ
見送りつつ行けば
○連綿體
本章は途中に「山の際に惣門のある中に入りぬ」といふ一所が終止してゐる。

【參考】
○追風　人の行きすぎた後に殘る空氣の動搖をさしていふ。昔の貴人の服裝は袖も長く、裾もゆつたりしてゐるので、一寸起居しても。ふわりと風が立つ。それをいふ。その

【口譯】見ると、佛堂の方には僧侶達が來てゐる。夜寒の風に送られて、どこともなく匂つて來る香の匂も、身にしみじみと感じられる。寢殿の方から佛堂の方へ通ふ廊下通ひの婦人連が、追風の用意など心掛けてゐる點など、かういふ人目もない山里にも係らず、よく注意が行屆いてゐる。

【摘解】○御堂―本堂○まゐり―參つてゐる。お參りしてゐるのではなく、參集してゐる意○夜寒の風―秋の夜に肌寒く感じる風○誘はれ―風に吹き送られること○そらだきもの―どこからともなく匂つて來る香の匂。香を焚いて、それが自然とあたりにたちこめ、どこからともなく薫るやうにするのを、「そらだき」といひ、さういふ風に焚く香を「そらだきもの」といふ○寢殿―寢殿造の寢殿で、それから寺院にした部分に通ふ○御堂の廊―佛堂の方へ通ずる廊下○かよふ―往復する○女房―女官。ここでは、この貴人の家に仕へてゐる侍女をいふ○追風よういー人の通つた後に空氣が、僅かに動く、その空氣に、よい香が殘るやうに、衣服に香をたきしめておくこと○こころづかひ―氣をつかつてあること。注意が屆いてゐること。

心のままにしげれる秋の野らは、置きあまる露に埋もれて、蟲のねかごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは雲の往來もはやき心ちして、月のはれくもる事さだめ

追風に、よい香が殘るやうに氣を配つて、衣服などに香を焚きしめておくことを「追風用意」といふ。
○匂（ニホヒ）
「匂」の字は「韵」の字の省文から出來た和字である。香の意である。香を「かをり」と讀めば、「かヲり」の假名、「にほひ」と讀めば、「にホひ」の假名である。
○來たる　キタる
來る　クる
出來る　でクる
出來す　しゆつタイする

【參考】
○心のままに　眼を轉じて四邊の情景を寫してゐる。この一節、兼好の趣味感にぴつたりあつた風

がたし。

【口譯】 附近の樣子に目を轉ずると、思ひのままに草が生ひ茂つた秋の野の面は、一杯にあまる程露がおりてゐて、蟲の聲は、訴へるやうであり、庭に引き入れた小流のささやきさへも、のんびりとしてゐる。都の空よりは、雲の往來も早いやうな氣持がして、月が隱れたり、現れたりするのも、とんと、あわただしく定めがないやうな氣がするのである。

【摘解】 ○野ら―野のこと。「ら」は接尾語○かごとがましく―怨みごとでも人に訴へてゐるが如くの意○遣水―庭の中に引き入れた小さな流○都の空よりは―かかる山里は、雲の往來も、都に比べてあわただしい氣がするといふ意。

(第四十五段) 公世の二位のせうとに、良覺僧正と聞えしは、極めてはらあしき人なりけり。坊の傍におほきなる榎の木の有りければ、人「榎の木の僧正」とぞいひける。此の名然るべからずとて、かの木をきられにけり。其の根のありければ、「きりくひの僧正」といひけり。いよいよはらだちて、きりくひをほり捨てたりければ、その跡おほきなる堀

【參考】
○公世の二位の兄 「公世の、二位の兄」ではなくて、「公世の二位、の兄」の意である。
○仁和寺諸師年譜 「西院大僧正 信證。輔仁親王之息。後三條院之御孫也。三宮僧正と稱す。又寺門の傍に大榎有り。

情で、兼好も、その情景にしみじみと感じ入つて書いたものであらう。
○かごとがまし 源氏物語、松風「昔物語に、みこの住み給ひけるありさまなど語らせ給ふに、つくろはれたる水の音なひカゴトガマシウ聞こゆ」同、幻「つれづれと我が泣きくらす夏の日を、カゴトガマシキ蟲の聲かな」

にてありければ、「堀池の僧正」とぞいひける。

【口譯】 從二位藤原公世卿の兄で、良覺僧正と申された方は、極く怒り易い人であつた。自分の僧坊の傍に大きな榎の木があつたので、世人が「榎の木の僧正」と渾名した。僧正は、この渾名は宜しくないといつて、その木を切つてしまはれた。と、その根が殘つてゐたので、今度は「切杭の僧正」といつた。僧正は、益益腹を立てて、其の根を掘り返して取捨てさせなされたところが、その跡が、大きな堀になつたので、今度は「堀池の僧正」と渾名をつけられた。

【摘解】 ○公世の二位―從二位侍從藤原公世。實俊の子。琵琶の名手。正安三年歿○せうと―兄。背人の音便○僧正―僧官の第一位○はらあしき―腹惡しき。腹立ち易いこと。惡人の場合は腹黑き○坊―僧坊○然るべからず―よろしくない。

(第四十七段) 或人清水へまゐりけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すがら「くさめくさめ」といひもてゆきければ、「尼御前、何事をかくはのたまふぞ」と問ひけれども、いらへもせず、なほいひやまざりけるを、度度とは

之に因つて榎木僧正と稱す。僧正之を忌んで其の木を伐る。世又伐株の僧正と稱す。又之を嫌つて其の根を掘る。世又堀池僧正と稱す。終に以て稱號と爲す」(續群書類從八輯)
○(第四十六段) 柳原の邊に强盜法印と號する僧ありけり。度度强盜にあひたる故にこの名をつけにけるとぞ。

【參考】
○尼御前 「御前」は女に對してつける敬稱である。姫御前・母御前などと用ひる。
○かくまじなはねば 當時

れて、うちはらだちて、「やや、はなひたる時、かくまじなはねば死ぬるなりと申せば、やしなひ君の比叡に兒にておはしますが、ただ今もやはなひ給はんとおもへば、かく申すぞかし」といひけり。有り難き志なりけんかし。

【口譯】 或人が清水の觀音樣に參詣しましたところが、年老いた尼さんと、道連れになりました。尼さん、道道歩きながら、しきりに、「くさめ、くさめ」とひとり言をいひながら歩いて行くので其の人が、「尼さん、何をそんなに仰しやるのですか」と尋ねました。ところが、その尼さんは、一向に返事もせず、なほも「くさめ、くさめ」といつて止みませんので、こつちも、しきりに訊ねました。度度聞かれて、尼さんは腹を立ててしまひ、「ええ、喧しい。くしやみの出た時に、かういつて、まじなひをしないと死ぬといふので、私の御育て申した若樣で、今は比叡山の稚子でおいでになる方が、たつた今も、くしやみをしてはいらつしやらないかと氣にかかるので、かうやつて、『くさめ、くさめ』といつてゐるのですよ」と答へました。しかし、さう聞いて見ると、誠に世にも殊勝な心掛でありましたよ。

多分、俗間の習慣で、人がくさめをした時は、誰か他の人がこの尼のやうに、「くさめ、くさめ」といはないと、くさめをした人が死んでしまふといふ事であつた。

○かく申すぞカシ
有り難き志なりけんカシ
カシは發表が纏つた後に、餘情として添へて、念を推す意の助詞である。これを「希望」の詞と誤り認めてはならぬ。「明日は晴天なれカシ」「去れカシ」などの發表に誤られて「希望」と思つてゐる人もあるが、さうではない。「今は午前十時なりカシ」の如きは、希望ではない。これらの例でもわかる。
「我は書を讀むカシ」
「彼ぞ死ぬるカシ」
「彼こそ死ぬれカシ」
「早く行けカシ」
「難かるべしカシ」
「然は思ひつカシ」
等完結の後に附す。

【摘解】 ○清水―京都市東山區にある清水觀世音○もて―その動作を續ける意○尼御前―「御前」は敬稱。尼さん○いらへ―返事○やや―ええ、喧ましいといふほどの心をこめた言葉○はなひたる―「くしやみをした時」○まじなはねば―まじなひをしないと○やしなひ君―自分が乳母となつて育てあげた若君○兒―寺院で召使ふ小童。多くは身分ある人の子供で、やがては、僧籍に入らうといふ人が、兒になつた○有り難き志―珍らしい、殊勝な志の意。

(第五十二段) 仁和寺にある法師、年寄るまで石清水ををがまざりければ、心うく覺えて、或時思ひ立ちて、ただひとりかちよりまうでけり。極樂寺・高良などををがみて、かばかりと心得てかへりにけり。さてかたへの人にあひて、「年比思ひつることはたし侍りぬ。聞きしにも過ぎてたふとくこそおはしけれ。そも、參りたる人ごとに山へのぼりしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へまゐることはいなれとおもひて、山までは見ず」とぞいひける。すこしのことにも、先達はあらまほしき事なり。

【參考】
○山までは見ず その山上に石清水八幡宮はあるので、極樂寺・高良などは末社で山麓にある。「山までは見ず」とは眞面目な滑稽談である。しかし、かういふことは人生百般の事に多い。「少しの事にも前達はあらまほしい」ことである。
○「かち」徒。馬・車其の他、乘物でなくて、ただ歩み行くこと。徒歩。
枕草子「車にても、カチ

【口譯】 仁和寺に居た或坊さん、年を取るまで石清水八幡宮に參詣したことがなかつたので、殘念に思つて、或時ふと思ひ立つて、只一人で歩いてお參りに行つた。極樂寺・高良神社など山の麓の末社を拜して、なるほど、石清水とは、これだけと、思つて歸つて來た。さうして、それから歸後同僚に對して、「永年氣にかかつてゐたことを、成就致しました。まことに豫め聞いて、色色と想像してゐたよりも、遙かに尊くいらつしやいました。一體、お參りした人が、誰もかれも、悉く山の上へ登つて行きましたが、何か山上にあつたのでせうか。私も行つて見たいとは存じましたが、しかし、神樣へお參りするのが目的であると存じまして、山の上までは見ませんでした」といつたのであつた。まあ、如何なる些細のことにでも、案内者といふものはありたいものである。

【摘解】 ○仁和寺―京都市右京區にある有名な寺。古義眞言宗の本山で、通稱を御室ともいひ、櫻の名所としても知られてゐる。○ある法師―或法師。○石清水―京都府綴喜郡男山にある石清水八幡宮。官幣大社。○かちより―徒歩で。乘物によらず、徒歩でただ一人參拜したのである。○極樂寺―石清水八幡に屬した宮寺の一。今は廢せられた。當時は神佛混淆であつたので、神社に附屬した寺院があつた。○高良―高良神社。末社の一。今も山麓、御旅所の傍にある。極樂寺も、この近くにあつたといふ。○かたへの人―傍の人。傍輩。○あひて―向かつて。對して。○年比―長年。永いにても、馬にても、すべて懷に（横笛を）さし入れて持たるも、何とも見えず」

「かちより」徒歩にて。

源氏物語、夕顔「君に馬は奉りて、われはカチより括り引き上げなどして出でたつ」

「かちより行く」 徒歩にて行く。

萬葉集十三「人づまの馬より行くに、おのづまがカチヨリ行ケば」

○かばかりと心得 斯計と心得。これだけと思つて。

○ゆかし 心で行きたいと思ふ意。即ち、何となく知りたいと思ふ。また、「なつかし」の意ともなる。

○先達 センダチ。先立の湯桶讀みにされたのだらう。修驗者の、勤行を積みて、峯入の時など、同行に先立ちて先導するもの。センダツとも讀む。藝術の先輩の意。

間○山へのぼりしは―高良神社の前を通つて、山に登る路があり、その山上に石清水八幡宮が鎭坐してゐるのである。○ゆかし―行つて見たい。○ほい―本意。目的。○先達―案内者。みち案内。センダツとも讀む。

（第五十二段） これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名殘とておのおのあそぶ事有りけるに、醉ひて興にいるあまり、傍なるあしがなへをとりて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめてかほをさし入れて、舞ひ出でたるに滿座、興に入る事かぎりなし。

【口譯】 これも仁和寺の坊さんの話である。寺に使はれてゐた稚子が、いよいよ一人前の坊さんにならうといふその名殘の酒宴だといふので、めいめいに遊び興ずることがあつた。ところが、その坊さん、醉つて興に乘じたあげく、傍にあつた足のある鼎を取上げて、頭にかぶつたところ、少し窮屈な工合であつたが、鼻を平べつたくして、無理に顏をつつ込んで、さうして踊り出したものだから、一座の連中悉く面白がつて、止め度もなかつた。

【參考】

○あしがなへ 鼎と云ふ字は「あしがなへ」釜の字は「かなへ」といふのが古いいひ方である。しかし、古くから「鼎」の字を「かなへ」と訓んで來たので、釜との區別がはつきりして鼎を足鼎といつた。

○名殘 ナゴリ

一、海上に、風吹き止みて、尙、波の鎭まらぬこと。又、風の吹く時に、ゆたぶりたる波の、風、風ぎて後も、尙、暫し立ちさわぎてある物。

二、汀に波の引去りて後に、尙、此所彼所に波水の殘るもの。

【摘解】 ○童（わらは）—稚子。寺に召使はれる小童○法師にならんとする名殘とて—稚子が、一人前の僧侶になる、そのお名殘（なごり）に、多くの僧侶たちが集つての酒宴○興（きょう）にいるあまり—興に乘じたあげくのはて○あしがなへ—足鼎。三本足のついてゐる鼎。鐵製で今日の釜の底にある三本足を長く太くしたやうな器○かづき—被き。かぶる○滿座（まんざ）—座中の者すべて。

—しばしかなでて後ぬかんとするに、大方ぬかれず。酒宴ことさめて、いかがはせんとまどひけり。とかくすれば、くびのまはりかけて、血たり、ただはれにはれみちて、息もつまりければ、打ちわらんとすれど、たやすくわれず、ひびきてたへがたかりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上にかたびらをうちかけて、手をひき、杖をつかせて、京なるくすしのがりゐて行きける。道すがら人のあやしみ見る事限なし。

【口譯】 さて暫く舞つて、後、さて鼎を拔かうとした所が、殆ど拔けない。酒盛りの興も何も、どこかへ飛んで行つてしまつて、皆、どうしようかと當惑してしまつた。さうかういじると、頸の周圍が傷ついて、血が垂れて來る、ただ、やたらと腫れ上がつて來て、しまひには、息もつまりさうになつて來たので、鼎を叩き割らうとしたところが、容易に割れない、第一、がんがんといふ音が頭に響いて、當人、とても耐へられないといふ譯で、結局割ることもできず、今は手の下しやうもなくなつたので、已むを得ず、三本脚の角（つの）の上に帷子（かたびら）を掛け、手を引いたり、杖を持たせたりして、京都の醫師の許までつれて行つたのであつた。その途中、他人が、不思議がつて見物すること甚しかつた。

【摘解】 ○かなでて—奏でて。踊を舞つて○大方（おほかた）—殆ど○酒宴（しゅえん）○ことさめて—興味がなくなつて○とかくすれば—拔かうとしていろいろとやると○くびのまはりかけて—頸の周りに負傷して○血たり—血が垂れ○ただはれにはれみちて—ただ、腫れに腫れ上がつて。むやみと腫れあがつて○かなはで—それも不可能で。割ることもできないで○三足（みつあし）なる角の上に—足が三本ある鼎を逆樣にかぶつたものであるから、その脚が、恰も角のやうに見えた○京（みやこ）なる—京都の。御室から、はるばると、京都の市内まで○くすし—藥師。醫者○のがり—の許へ○ゐて—率ゐて。つれて○道すがら—その道道で。

—くすしのもとにさしいりて、むかひゐたりけんありさま、

【參考】
三、餘韻。
四、別離に臨みてすること。最後。訣別。

○かたびら 帷子。單衣（ひとへ）の着物。今麻の着物を特にかたびらといふのは、轉用されたので、元は、ひとへの衣類。

○たやすくわれず
「タ」は無意の接頭語である。由て「タヤスク」は「タ易く」である。
タくらぶ
タ謀る
タ忘る
タ走る
タ弱し
タ太し（尊し）

などは皆無意の「タ」を冠らしたのである。

○とかく
助詞の「ト」に、副詞の「斯く」を續けたのである。此の「ト」と「斯ク」との二語の間に、他の語を挿んで用ひることがある。
トに斯ク
トても斯クても
トにも斯クにも
トや斯ク
ト樣斯ウ樣
の如くである。「兎角」は宛字である。
この兎角を兎角龜毛とて、兎に角を生じ、龜に毛を生ずとて、世に無き者に喩へていふことは牽强である。

【參考】

さこそことやうなりけめ。物をいふも、くぐもり聲にひびきてきこえず。「かかることは文にもみえず、傳へたるをしへもなし」といへば、又仁和寺へかへりて、したしき者、老いたる母など、枕上によりゐてなき悲しめども、きくらんとも覺えず。

【口譯】 さて、醫者の家へついて、部屋に上がり、醫者に對して坐つてゐただらうが其の樣子といふものも、それはそれは誠にどんなにか、變てこなものであつたらう。物をいつても、籠つて、不明瞭な聲に聞えて、何を云つてゐるやらわけがわからないのである。醫者も、「どうもかういふ患者に關する事は書物にも見當らず、師からなど傳へられた敎もありませんでなあ」といふので、又、仁和寺まで戻つて來た。親しい者や、老いた母親など、その枕許に寄り集つて泣き悲しんでゐるのだけれども、當人には聞えるのやらどうやらも分らない。(鼎の中で、いかに當人が悲しがつてゐても、外からは、その表情も見えないからして、ただ鼎をかぶつた病人がねてゐるだけにしか見えない。)

【摘解】 ○さこそは―どんなにかまあ ○ことやう―異樣 ○かかることと―とんなことは文にも見えず 醫師も、まことに、不思議な患者をつれて來られて、面喰つたにちがひない。それで、古今の醫書にも、師傳の敎にも、かういふ患者に對することは何も書いてないといつて、斷つて歸したのである。

○むかひゐたりけんありさま その鼎かぶりの僧が醫者の家に行つて、醫者と向ひ居たらうが、其の向ひ居た有樣はの意。

「けん」は過去推量の助動詞である。

○さこそことやうなりけめ 然(それ)は、それは、誠に、異樣(風がはり)で有つたらう。

「けめ」は ○ ケム ケメ と活用する過去推量の助動詞である。前の「けん」此の「けめ」

と。かういふ患者のこと。(同時に、かういふ患者に對する手當ての方法も含めてゐる)○文(フミ)―書物。醫術に關する書○枕上(マクラガミ)―枕もと○きくらんとも―聞いてゐるだらうとも。

かかるほどに、あるもののいふやう、「たとひ耳鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなどか生きざらん、ただ力をたてて ひき給へ」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねをへだてて、頸もちぎるばかりひきたるに、耳鼻かけうげながらぬけにけり。からき命まうけて、久しくやみゐたりけり。

【口譯】 さうかうしてゐる内に、或者がいふには、「たとひ、耳や鼻が切れてなくなつたとしても、命だけは助からないといふこともあるまいからして、ただ、力一杯に引き拔きなさい」といふので、藁のしべを頸のまはりに挿し込んで、鼎の金と頸との間を隔てておいて、頸がちぎれるほどに引張つたところが、耳も鼻も缺けて穴になつたものの、拔けたのであつた。あぶない命を辛うじて取りとめて、久しく病床に横たはつてゐたといふことである。

【參考】

○かけうげながら 「うげ」は「うぐ」といふ下二段活用の動詞。意味は、掘れて、うつろになること。穴があくこと。

○命まうけて からき命を儲けての意。今日でいふ、あぶない命を拾つてといふのにあてはまる。

○藁のしべ わらの根元を包んでゐる柔かい藁である。「藁ミゴ」卽ち「藁の心(シン)」ではない。「わらのしん」ならば、「わらのしべ」とはちがひ、却つてこのやうな時に使用すれば負傷することである。此の段は滑稽談にはなるとは同一の語である。前のは連體形、後のは已然形である。

【摘解】 ○などか―どうして生きないといふことがあらう、一命だけは助かるだらう○藁のしべ―藁の根元を包んでゐる柔かい「しべ」。わらの「しん」とはちがふ○うげ―穴のあくこと。

（第五十五段） 家の作りやうは、夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まる。あつき比、わろき住居はたへがたき事なり。

ふかき水は涼しげなし。淺くてながれたる、遙に涼し。こまかなる物を見るに、遣戸は蔀のまよりもあかし。天井の高きは、冬さむく、燈くらし。造作は、用なき所をつくりたる、見るも面白く、萬の用にも立ちてよしとぞ、人の定めあひ侍りし。

【口譯】 家の作り方は夏を主とするがよい。冬はどんな所にでも住めるが、暑い頃に工合の悪い家は、我慢ができないものである。それから、水についていへば、深く溜つてゐる水は涼しさうでない、かが、なかなか笑ひ話ではない。有名な話である。

【參考】
○用なき所をつくりたる、見るも面白く　この「たる」は連體形止めにしてある。これは「用なき所をつくりたる『事は』」の意味である。同樣に、「淺くて流れたる」もこの例である。
○用なき所をつくり　壽命院抄に「無用の用といふことあり。造作に限らず萬事にわたるべきなり」とあるが、實にさうである。
○住まる　住む事を得る意。此の「ル」は可能の助動詞である。

へつて淺くて、いつも、さらさらと流れてゐる水の方が、ずつと涼しげである。

その次に細かい物などを見るには、遣戸（ヤリド）の方が蔀（シトミ）のある部屋より明るい。天井を高く作つたのは、冬寒く、燈火が暗いものである。

凡て造作は、實用といふばかりでなく、無用な所にも手を加へてある方が、見ても變化があつて面白く、何かと用に立つてよいものであると、人人が評し合つた。

【摘解】 ○遣戸―今日の戸・障子のやうに。敷居の上を左右に辷らせて開閉する戸○蔀―格子の裏に板を張つたやうなもの○造作（ザウサク）―建築すること。

（第五十九段） 大事を思ひ立たむ人は、さり難く心に懸らむ事の、本意を遂げずしてさながら捨つべきなり。しばし此の事果てて、同じくは彼の事沙汰し置きて、しかじかの事人の嘲やあらむ。行末難無く認め設けて、年頃もあればこそあれ、其の事待たむ、程あらじ、物騒がしからぬやうなど思はむには、得さらぬ事のみいとど重なりて、事の盡

○造作　建築の細かい部分の事を今は言ふが、昔は只「建築」即ち家を建てる全部の事をいふ。
○用なき所をつくりたる　用途の無い部分を造る意にはしないで、勿論さういふ部は有つて更に其處を氣をつけて凝つて造りおくことの意にする。

【參考】
○さながら　(一)「恰も」(二)「そのまま、そつくり全部」の意がある。ここは後のもの。
○しばし此の事云云　この條は句の切れ目が色色考へられるが、(一)しばし此の事果てて、(二)同じくは彼の事沙

くる限りも無く、思ひ立つ日もあるべからず。

【口譯】 出家して佛道に入らうと欲する人は、棄てることの出來ない氣に懸る大事件があつても、其の事の目的を果たさずして、其のまま捨てて、出家入道すべき事である。さうは思ひ切らずして、「もう少しの間で此の事はまとまらう、それがまとまるまで待たう」「出來る事なら、彼の事件も處置してからにしよう」「これこれの事をしかけておいたが、それをまとめなくては他人からあざけられるであらう。それを將來も批難なくまとめておいて、それから決行しよう」「永年の間、これまで出家入道もせずしてかうやつて俗人で居れば居られたのだから、このままもう少し出家入道をしないで、あの事件のまとまるのを待つことにしよう、それは程もなく、ぢきまとまらう、それをまとめてから其の後ゆつくりあわてない樣にして出家入道しよう」などと思ひのばして居たら、それは、捨てることの出來ない事件ばかり、其の次其の次と甚だしく重なり生じて、事件は限度も無くなつて、とても萬事がすんだ、いよいよ出家入道しようと思ひ立つ日があるものではない。

【摘解】 ○大事―出家して佛道に入ることをいふ○本意―ホンイとも讀む。目的○遂げ―成功する○さながら―其のまま、そつくり○しばし―暫し。もう少しの時○汰し置きて、(三)しかじかの事人の嘲やあらむ。行末難無く認め設けて、それから(右三條をまとめてから)出家入道しよう。その三條たる事のまとまるのは程ないことだ、今まで永年の間俗人で居た所が、さはりなく俗人で居られたのだから、此のままもう少し俗人で居て、それらをまとめて後、物騒がしからぬ樣にして心靜かに出家入道しようと思ふの意とする。……行末難無く認め設けて(年頃もあればこそあれ、其の事待たむ、程あらじ)物騒がしからぬ……とつづけて見る。○さり難く。得さらぬ「さる」は「避る」で「避ける」ことと。從つて「さり難く」は「捨てて避け居ること出來ない」ことと。又「得さらぬ」は「避けてゐられない。即ち捨てて置かれない」の意。

【參考】
○ぞかし 「ぞ」は強めて「さうだよ」といふ詞。「かし」は、今まで言つた語を更に「念を押し」ていふ詞。二つで「のであるよ」と譯した。
○……人の情 下に「などといつて、それは」など入れて見る。
○「やは」「かは」「や」 反語である。しばしと「やは」いふ命は人を待つもの「かは」捨てざらん「や」
○水火の攻むるよりは速かに 此の「速かに」は中

同じくは―出來得べくんば○沙汰―「定」と同じ。定めをつける○しかじか―云云。これこれの事といつて或事をさしていふ○人の嘲やあらむ―他人が、だらしが無いといふ嘲(惡口)をするかも知れん○行末―將來○難―批難○認め―まとめ○設け―こしらへ○年頃―永年○あればこそあれ―俗人で居ても居られたのである○えさらぬ―避り得られぬ。ほつておく事の出來ない○いとど―いといと。

おほやう人を見るに、少し心あるきはは、皆このあらましにてぞ一期は過ぐめる。近き火などに逃ぐる人は「しばし」とやはいふ。身を助けむとすれば、恥を顧みず、財をも捨てて遁れ去るぞかし。命は人を待つものかは。無常の來る事は水火の攻むるよりは速かに、遁れ難きものを、其の時、老いたる親、いときなき子、君の恩、人の情、捨て難しとて捨てざらんや。

【口譯】 大體、世上の人を見渡すと、(無智の者は別として)少少分別心のある分際の人は、皆此の「物事のかたをつけてから出家入道をしよ

う」といふ豫定で居て（實行までは行かないで）、自分一生涯を過してしまふやうである。そんな思ひきりのわるいのはだめだ、例へば、近火のあつた時に逃げ延びようとする人が、暫くまつて事をまとめてから逃げようなどと言つてゐようか、そんなことは無からう。自身を助けようとするから、恥も外聞もかまはず、財産も捨ておきかまはず、只身一つにて遁れて行くのであるよ。偖、人の命は、人を待つてゐてくれるものではない、其の人の勝手のしまつをしてをる間延ばして居てくれるものではない。そして無常の「死」が來る。即ち人の死ぬことは、水や火が攻め來るより迅速なものであつて、其の災をのがれにくいものであるのに、其の死ぬ時に、老いたる親、幼き子供、君の恩、人のなさけ等と言つて居られませうか、それにはかまはず死んでしまはなければならないのである。それだから何事も俗事は思ひ切つてすぐ出家入道して死の用意をしておかなければならないのである。

【摘解】○おほやう―大體○きは―際。分際○このあらまし―事のしまつをつけてから出家入道しようといふ豫定。「あらまし」は豫定○一期―一生涯○しばし―しばし延ばさう○やはいふ―言ふか言はない○身を助けんとすれば―「すれば」は「するから」の意。「するなら」なら「せば」とする○無常―死○水火の攻むるより速かに―禪家龜鑑といふ書に「生死は水火より甚だし」とある。「速かに」は「速かなる形である「速かにして」の意。「速かに行く」などの「速かに」といふ副詞ではない。

○あらまし　一、あらかた。大概の意。二、荒荒しくある意。三、豫期の意となる。

「心凄う、アラマシげなる水の音」「風の音も、いとアラマシウ」「アラマシキ波の上」などは「荒荒しい」意で（二）に當る。

本段の「皆このアラマシにてぞ一期は過ぐめる」第七段の「榮ゆく末を見んまでの命をアラマシ」第百八十九段の「かねてのアラマシ皆違ひ行くかと思ふに」第百八十八段「學問をもせんとて行末久しくアラマス」等は皆（三）の豫期の意である。

るものにして」の意○遁れ難きものを―「を」は「であるのに」の意○その時―死の時○捨てざらんや―捨てる。

（第六十段） 眞乘院に盛親僧都とてやんごとなき智者ありけり。芋頭といふものを好みて多く食ひけり。談義の座にても、大きなる鉢に堆く盛りて、膝もとにおきつつ、食ひながら書も讀みけり。病ふ事あるには七日・二七日など、療治とて籠りゐて、思ふやうに良き芋頭を選びて殊に多く食ひて萬の病を癒しけり。人に食はする事なし、唯獨のみ食ひける。

【摘解】○眞乘院―御室にある、仁和寺の末寺○盛親僧都―僧都は僧正・僧都・律師といふ三つの最上の僧官がある第二番○やんごとなき―貴き○智者―佛法に明かなる人○芋頭―里芋の根の太いところ即ち親芋○談義座―經の講義席○堆く○書○病ふ○七日○二七日○籠り○癒す。

極めて貧しかりけるに、師匠、死にざまに、錢二百貫と坊

【參考】
○盛親　傳記不明。
○芋頭といふもの　「いふもの」は特に力說せんとしたいひ方である。
○二七日　二週間即ち十四日。
○療治とて　「とて」は「といふので」
○談義　講義。ここでは經文の講義である。室町頃からは右の外、說教の意にも用ひた。
徒然草第二百三十八段にも「那蘭陀寺にて、道眼聖、談義せしに」といふ語がある。

【參考】

一つを譲りたりけるを、坊を百貫に賣りて、かれこれ三萬疋を芋頭の錢と定めて京なる人に預け置きて、十貫づつ取寄せて芋頭を乏しからずめしける程に、又ことように用ふる事無くて、其の錢皆になりにけり。三百貫のものを貧しき身に儲けて斯く計らひける、誠にあり難き道心者なりとぞ人申しける。

【口譯】 甚だ貧乏であつたが、師の僧が死ぬ際に錢二百貫と小寺一宇を與へたのを、其の小寺の方は百貫に賣つて、合計三萬疋を芋頭金として おいて、京都の人に其の金をあづけて置き、其の中から錢十貫づつを取寄せてそれで芋頭を不足なく食べて居た中に、又芋頭代金の内異なつた用途にもつかはずに其の錢がすつかり無くなつた。三百貫といふ大金を、貧乏な身分に得て、かく芋頭費にあてるなどといふ無欲な計らひ、誠に稀らしい無欲な佛道心を持つた人であると人人が云つた。

【摘解】 ○師匠―師の僧○死にざま―死の際○錢二百貫―當時の錢は永樂錢で一貫は百疋、一疋は十文○かれこれ―彼れ（錢二百貫○とこれ（小寺の賣代百貫○と合計○芋頭の錢○乏しからず―不足なく○めしける―「めす」は「食ふ」の敬語○ことよう―異用○皆になる―すつかり無くなる○儲けて―得て○あり難き―有ること と離きの意で、「珍らし」の意。ここでは御禮にいふ意ではない○道心者―佛道心。僧の本當の心持ち。

○錢は、ゼニといふこともあり、アシとよむ場合もある。アシは錢の異名で足があつて世にあるく（通用する）についていふ。昔の魯褒の錢神論に「翼無くして飛び、足無くして走る」とある。

○儲く　手に入れる。儲くは利益を得るばかりではなく、手に入れる意。

○坊一つ　下にトを入る。

文部省許容案

一三　語句を列擧する場合に用ゐるテニヲハの「ト」は誤解を生ぜざるときに限り最終の語句の下に之を省くも妨なし。

例　月と花　宗教と道德の關係　京都と神戸と長崎へ行く

最終の「ト」を省くときは誤解を生ずべき例

史記ト漢書トの列傳を讀むべし

史記と漢書の列傳トを讀むべし。

（第六十八段） 筑紫に、某の押領使などいふやうなるものの有りけるが、土大根を萬にいみじき藥として、朝ごとにふたつづつやきて食ひける事、年久しくなりぬ。或時、館の内に人もなかりける隙をはかりて、敵襲ひ來りてかこみせめけるに、館のうちに兵二人いできて、命ををしまず戰ひて、皆おひかへしてけり。

【口譯】 九州に何某といつて押領使などいふやうな役を勤めてゐる人がありましたが、大根を、萬事に大層な妙藥だといつて、毎朝二つづつ燒いて喰べること年久しくなりました。或時、邸の中に誰も人がゐなかつたその隙をうかがつて、敵人が押しよせて來て、包圍攻擊をしましたところが、邸の中に兵士が二人出て來て、命を惜しまず戰つて、來襲した

【參考】

○押領使　地方にあつて盜賊を捕へ惡人を鎭撫する今の警察官のやうな役をした官吏。

○などいふやうなる者　そんな風なもの。はつきり押領使であるかどうか分らないから、ぼんやりとかういつたのである。

○某　ナニガシ。

外にソレガシ・クレガシなどともよむ。姓名の不明なる時にいふ。又「某の書いた徒然草」といふ如く、明かな意には、却て某と云ふ時もある。また「某はさう思はぬ」と

敵を全部追ひ返してしまひました。

【摘解】 ○筑紫―九州全體をさしていふこともあり、今の筑前・筑後地方又は太宰府を指していふこともある○土大根―大根。土のついてゐる大根といふのでなく、「土大根」で大根といふ意である○館―やかた。邸○敵―敵人○兵―兵士。

いとふしぎに覺えて、「日比ここにものし給ふとも見ぬ人人のかくたたかひし給ふは、いかなる人ぞ」と問ひければ、「年來たのみて、朝な朝なめしつる土大根らにさふらふ」といひて失せにけり。

ふかく信をいたしぬれば、かかる德もありけるにこそ。

【口譯】 主人は、非常に不思議に思ひまして、「常日頃、この邸においでになるとも見えない方方ですが、かうやつて戰つて下さつたのは、一體どういふ方でせうか」と尋ねましたところが、その二人は、「長年の間、信頼して、毎朝毎朝召し上がつた大根共でございます」といつて、消えてしまつたといふことです。深く信仰すると、かういふ功德もあるものと見えます。

【參考】
○ものし 筆を持つて「ものせば」字を書くことになり、食物について「ものせば」食ふ事になり、樂器を取つて「ものせば」音樂を奏することになる丁度、英語の動詞の do と似てゐる。
○日比 ヒゴロ。常に。この比(頃)は年頃・月頃といふ如く「長い時」の意味である。
○德 おかげ・功德。道德の意では無い。
○こそ 下に「アレ」いふ如く自分の事にもいふことがある。

(第七十一段) 名を聞くより、やがて面影は推し量らるる心地するを、見る時は又かねて思ひつるままの顔したる人こそ無けれ。昔物語を聞きても、此の頃の人の家のそこほどにてぞありけんと覺え、人も今見る人のうちに思ひよそへらるるは、誰も斯く覺ゆるにや。

又、如何なる折ぞ、只今人のいふ事も、目に見る物も、我が心のうちも、斯かる事の何時ぞや有りしがと覺えて、何時とは思ひ出でねど、まさしくありし心地のするは、我ばかり斯く思ふにや。

【口譯】 例へば、「お花」といふ名前を聞くや否やすぐお花の容貌は花の如き美しきものであらうとつい推量する心持になるが、さて、實物たるお花と面會すると又前に思つた風に花の如き美しい顔をしてはゐない。さういふ風に豫想はあてはまらない。又、昔話の例へば道長の話を聞いても、其の邸は今の何兵衞さんの家のやうであつたであらうと感じ、又

【參考】
○推し測らるる 此の「るる」は自發法助動詞で、「ツイさうなる」の意。
○心地するを 「を」は「それと反對に」の意。
○斯く覺ゆるにや 下に「有らん」を略す。
○有りしが 下に「今思ひ出せず」を略す。
○此の心理狀態を描寫した文は、日本文學中には類の少い記錄で、面白い着眼である。吾等は夢の中で往往斯ういふことを夢見ることがある。
○やがて すぐさま。直ちに。の意味もある。即ち時間についていふのであるが、又、進行を續けて「其のままにすすむ」の意のこともある。即ち「走る馬が其の慣性によつてヤガテ室にまで進み込む」などの文にても知

道長といふ人は、今のあの主人乙兵衛さんと似てゐるそれに準ずべきであるなどと思ふのは、誰も私の樣にさういふ思ひ方をするであらうか。又、どうかすると、何かのはずみに次の如きことを思ひ出す、即ち、他人の話でも、自分が實見してゐる事も、自分の思つてゐることも、それと同じやうなことを、嘗て前前に有つたが、それは何時であつたか今しかとは思ひ出せないが、正にさういふことが三つともあつたやうな心持がするのは、それは私が變態であるのでさうであるのか、それとも他人にもそんなことがあらうか。（夢の内に時時此の樣な場合がある）

【摘解】 ○名を聞くより―「より」は「何何するとすぐ」即ち、名前を聞くや否やの意○やがて―すぐ○面影（オモカゲ）―容貌○かねて―「名を聞くとすぐ想像した」この時を「かねて、前方」といつた○よそへらるる―つい、あてはめる○如何なる折ぞ―何かの場合、ひよつと、思ひ出す。ふと次のやうに思ひ出す○有りしが―有つた事であつたが、今思ひ出せない。と思ふ。

（第七十三段） 世にかたりつたふる事、まことはあいなきにや、おほくは皆虚言なり。

あるにも過ぎて人は物をいひなすにまして年月すぎ、境もられる。

○誰も斯く覺ゆるにや　我ばかり斯く思ふにや　などの文にあつては下に「有らん」を略したのである。

「ヤ」は係辭であつて此の場合には「結び」辭を略したのである。それ故に結辭を入れて解することにしなければならぬ。係辭は、ゾ・ナン・ヤ・カ・コソを用ひる。

【參考】

○あいなし　愛無しの義で、かはいらしげでないこと、轉じて面白みのないこと。

へだたりぬれば、いひたきままに語りなして、筆にも書きとどめぬれば、やがて又定りぬ。道道の物の上手のいみじき事など、かたくななる人の其の道しらぬは、そぞろに神のごとくにいへども、道しれる人は更に信もおこさず。おとに聞くと見る時とは、何事もかはるものなり。

【口譯】 世の中に語り傳へられてゐること、ほんたうの事は面白くないためだらうか、多くの事はみんな虚（ウソ）をいふ。一體、人は、實際あつたその事實以上に、物事を語り傳へるものであるところへもつて來て、況して、年月を經過し、場所も遠く隔たつては、語る人は、自分が喋りたい通りに、思ふ存分に話もし、筆に上せて書き殘したりするものだから、そのままそれが事實として決定してしまふのである。如何なる道でも、その道の達人上手といはれる人のえらい事など、頑固な愚かな人で、その道のことをよく知らぬ人達は、もう、まるで神樣ででもあるやうに言ひはやすのであるけれど、さて、その道のことを心得てゐる人は、一向それを信用はしない。話に聞くのと、實際目で見るのとでは、何事にまれ、非常にちがつてゐるものである。

○にや　「に」と「や」との複合した疑問の助詞。「にやあらん」と續くべき文脈である。

○いひたきままに語りなして、筆にも書きとどむ　韓退之の原道といふ文に「惟に之を口に舉（タ）くるのみならずして、又之を書に筆す」といふのがある。何れの國にもかういふことは有るのである。

○かたくななる人　一、愚鈍で固陋で、事物の道理のわからぬ人。二、片意地の強い人。ねぢけたいぢつぱりな人。三、見苦しい人。

○いみじ　甚だし。えらい。の意。

中古文には善いことにも惡いことにも兩方ともに用ひる。又この語ばかりで、下に嬉しとか悲しと

【摘解】 ○虚言（ソラゴト）—うそ。虚言。ここの「多くは皆」今日もかかるいひ方は用ひらるる ○かたくなな人—頑固で愚昧で、その道に通じない人。「かたくな」は「心ある人」の反對である ○そぞろに—ただもう無暗と。

かつあらはるるをもかへりみず、口にまかせていひちらすは、やがてうきたることと聞ゆ。又我も誠しからずは思ひながら、人のいひしままに、鼻のほどおごめきていふは、其の人のそらごとにはあらず。げにげにしくところどころうちおぼめきよくしらぬよししして、さりながらつまづまあはせてかたるそらごとは、おそろしき事なり。わがため面目あるやうにいはれぬるそらごとは、人いたくあらがはず。皆人の興ずる虚言は、ひとり「さもなかりしものを」といはんも詮なくて、聞きゐたるほどに、證人にさへなされて、いとど定まりぬべし。

【参考】 ○かつあらはる　一方から段段そのばけの皮のあらはれること。「かつ」は「一方においては」の意。「カツ」は「他の一方では」の意。即ち、此の事と彼の事と二つにわたつてゐる時にいふ語で、「此の事をしつつ、また他の一方では」「これにてありながら、又其れもあつて」などの意である。古今和歌集の冬の「降る雪はカツぞ消（ケ）ぬらし、足引きの山の瀧つ瀬音まさるなり」などは、一方では雪が降つて積りつつあるが、又他の一方では下積みになつてゐる雪が消えてゐるらしい。それ故、雪が降つてゐれば水分が吸收されて水も無ささうであるのに、下の古雪が消えて水となり流れ出でて、瀧つ瀬の水音が勝るの意である。古今和歌集、春の「うつせみの世にも似たるか櫻花咲くと見し間にカツ散りにけり」なども同樣の意であることがわかる。 ○まかせ　任せ。サ行下二段活用の語である。サ行四段活用の語ではない。 ○鼻のほどおごめく　鼻のあたりを動かして得意になるさま。「おごめく」は「うごめく」と同じ。「蠢く」である。今は「おごめかす」と他動詞にいふが、古は「おごめく」といふ如く自動詞でいひあらはした。

かといはないで前後の文意だけで知らせることがある。

【口譯】 喋るそばから化けの皮がはがれるのも構はず、口から出放題に喋り散らすのは、直ちに根もない嘘言だといふのが分る。次に、喋る當人でさへ、ほんたうらしくないと思ひながらも、他人が語つた通りを、さも自分の話らしく、鼻の邊をびくびくさせながら喋るのがあるが、これはその人自身の嘘言ではなく、人の嘘言を取次いだのにすぎない。（以上の二つの嘘言は、同じ嘘言でも、まだ罪の淺い方である。これらに對して）いかにも、尤もらしく、それでゐて、所所ぼんやりとさせて自分もよく知らぬやうな樣子をし、要所要所は、ちやんと辻褄（ツジツマ）を合せて喋るといふ嘘言は、全く恐ろしいものである。さて、又、自分にとつて名譽になるやうにいはれた嘘言は、その當人は、（嘘言だと承知してゐながらも）大して之に反對はしないものである。更に、多くの人が面白がつて聞いてゐる嘘言は、自分一人（ほんたうのことを知つてゐて）「さうぢやありませんでした」と口出しするのも仕方ないので、默つて聞いてゐる内に、ふと、その話の生證人にまでされてしまつて、遂には、その嘘言が、ほんたうのことと一決してしまふやうな場合もある。

【摘解】 ○かつあらはる—いふそばから露顯してしまふ ○やがて—すぐそばから ○うきたる—浮きたる ○誠しからず—本當とは思はない ○鼻のほどおごめき—鼻の邊をびくびくさせること ○其の人のそらごと—當人が製造した嘘言 ○げにげにしく

ーいかにも尤らしく聞手に聞えるやうに○うちおぼめきー「うち」は接頭語。聞手の方は、反對に、いかにもほんたうらしく感じる○よししてーさういふそぶりをすること○つまづまあはせてかたるー急所急所は、ぴたりと話を合せて喋ること。辻褄あはせて話す○面目あるやうにいはれぬるー自分にとつて、甚だ名譽あるやうな結果を將來する○あらがはずー論爭することをしない○いとど定まりぬべしーたしかにいよいよ、決定してしまふだらうの意。

とにもかくにも、そらごとおほき世なり。ただ常に有るめづらしからぬ事のままに心得たらん、よろづたがふべからず。下ざまの人の物がたりは、耳おどろく事のみあり。よき人は、あやしき事をかたらず。かくはいへど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは、世俗の虛言をねんごろに信じたるものをこがましく、「よもあらじ」などいふも詮なければ、大方は誠しくあひしらひて、偏に信ぜず、また疑ひ嘲るべからず。

【口譯】 之を要するに、何にしても、嘘言の多い世の中である。だから

【參考】
○權者　神佛が衆生を救はんがために、權に、此の世の中に人間として姿を現はしたものといふのであるが、さういふ權者が、奇特な、不思議なことをして見せたといふ傳へは多い。全國各地に殘る弘法大師の奇蹟の話などが實例である。
○とにもかくにも「ト」は助詞の「ト」である。「カク」は「斯ク」である。「何何トあることもカクカクとあることもの意で

○この段はよくいひあらはしてある。兼好はよく世態人情を知つて居た人である。なるほどと思はせる程にまで云ひ通す。

して、世間のことは、凡て常に世の中に存在する通常の事の通りに、考へておいたならば、萬事に間違ひは起らないであらう。下賤の者の話は聞いてみると、耳を驚かすやうな驚天動地の仰山なことばかりある。心得ある人は、決して奇怪な事を口にのぼさない。で、かう結論をつけたものの、神佛の不思議な靈驗とか、權化の人の傳記とかは、さう無暗に否定してかかるべきものではない。で、この種類の話に關しては、俗世間の嘘を本氣になつて信ずるのも馬鹿くさく、「そんなことは、よもや、あるまい」と眞正面から否定し去るのもつまらないことであるから、して、まづ、大體は、ほんたうらしく取扱ひ、むやみにそれを本氣にもせず、又、疑つたり、嘲つたりしてもいけないのである。

【摘解】 ○下ざまの人ー下賤の人。次の「よき人」に對する○よき人ー身分もあり、物の道理も分つた人○あやしき事をかたらずー不思議なことを口に上さない。論語の述而篇に、「子怪力亂神を語らず」とある○佛神の奇特ー神佛の不思議な驗。靈驗○權者ー衆生を助けるために、神佛が、權（かり）に姿を現はして人と化したもの○さのみーむやみと、一途に○世俗の虛言ー佛神・權者に關しての世間での嘘○をこがましーばかばかしい○あひしらひてー取扱ふ。あしらふ○偏に。

（第七十九段） 何事も入りたたぬさましたるぞよき。よき人

【參考】
ある。「何といつてもまあまあ」といふ位の意。
○心得たらん、よろづたがふべからず「心得たらん」の下に「事が」の意を入れて見よ。此の文法が徒然草には多い。連體形の下の體言を略してちよつと止めて言ひおく法である。
○をこがまし　「ヲコ」とは愚かなることである。それを「ヲコガマシ」といつた時には、一「愚かなるらし」との意にもなり、又、「差出ガマシキ」意ともなる。ここは一の意である。之に「尾籠」と宛字をしピロウと讀めば不作法の意となる。

は、知りたる事とて、さのみしりがほにやはいふ。かた田舍よりさし出でたる人こそ、萬の道に心得たるよしのさしいらへはすれ。されば世にはづかしきかたもあれど、自らもいみじと思へるけしき、かたくななり。

よくわきまへたる道には、必ず口おもく、とはぬ限はいはぬこそいみじけれ。

【口譯】 凡て何事でも、深く立入つて、よく知つてゐる樣子を見せない方がよい。物の道理を心得た人は、自分の知つてゐる事だといつても、さうむやみに知つたかぶりをして口をきかうか、決してそんなことはしない。片田舍からまかり出て來た人こそ、萬事の道道に、さも心得あるやうな應對をするものだ。彼等は、一面、いかにも、こちらが恐縮するやうな、非常にえらい所も持つてはゐるが、自分自身、思ひ上がつて、偉いと信じてゐるその樣子が、いかにも下品である。自分がよく承知してゐる道に關しては、容易に口を開かず、人から問はれでもしなければ、喋らないものであつて、かういふやうなのが、實に立派な態度なの

○かたくなり　都に出て我こそは、都人にも劣るまじいほどの達人であるといふことを鼻の先にぶらさげて、えらさうに口を利く、かういふ種類の人は兼好の趣味に凡そ反するもので、さればこそ、「かたくな」の一語を以て、田舍人を痛擊し去つた。

○田舍　ヰナカ。田舍中の上を略した語といふ。又一說には小鄙處の約音ともいふ。日本書紀にも田舍（ヰナカ）の語があり萬葉集に「昔こそ難波居中（ヰナカ）といはれけめ、今は都（ミヤコ）と都びにけり」などとも云つてある。田舍世界ともいふ。片よつて甚だしき田舍を片田舍といふ。田舍を惡しざまに言ふ語である。

である。

【摘解】 ○入りたたぬさま―「立入つた樣子」○よき人―物のわけの分つた上品な人○さのみしりがほにやはいふ―反語である。それほどに知つてゐるやうな顏附で知つたかぶりにいはうか、否言はない○かた田舍―邊鄙な田舍○萬の道―あらゆる道。「道」は學問技藝百般の道。弓・馬・禮・劍・管絃・茶・花・書・畫あらゆる道○世にはづかしき―「世に」は「世にも」と同じで、非常に。「はづかしき」はその人に對して、當方が恥づかしく感ずる程すぐれた○いみじ―えらい。自分で高慢らしい態度をとつてゐること○かたくな―頑愚。下品である○わきまへ―知つてゐる○口重く―「口輕」の反對。

（第八十一段） 屏風・障子など繪も文字も、かたくなる筆やうしてかきたるが見にくきよりも、宿のあるじのつたなく覺ゆるなり。

【口譯】 屏風や、襖などに書いてある繪なり文字なりにしても、まづい下品な筆つきで書いてあるのを見ると、その字や繪がみにくいといふよりもむしろ、それを平氣で出しておく、その家の主人の心情が下劣に思はれるものだ。

○とはぬ限はいはぬ　これは甚だよい訓言である。一般に人は利口ぶつて、何事もわれ知りたりといふ態度を取るものである。そして失敗もし、又失敗せずとも、敎養なしとせられる。井の中の蛙大海を知らぬ爲である。

【參考】
○障子（サウジ）とも讀む。今の襖（フスマ）（唐紙（カラカミ））をいふ。昔は明障子（アカリシヤウジ）と襖障子と衝立障子（ツイタテ）があつた。今はそれを障子・襖（唐紙）・衝立といふ。今の障子といふのは昔は明障子といつた。

【摘解】 ○かたくなる―下手で品のない○筆やう―筆つき○書きたるが―書いてあるのが○つたなく―拙く。「かたくな」と同じで、下品でくだらないの意。

大方もてる調度にても、心おとりせらるる事は有りぬべし。さのみよき物を持つべしとにもあらず。損ぜざらんためとてしなく見にくきさまにしなし、めづらしからんとて用なきことどもしそへ、わづらはしくこのみなせるをいふなり。ふるめかしきやうにて、いたくことごとしからず、つひえもなくて、物がらのよきがよきなり。

【口譯】 大體所持してゐる道具類で、その人に對して輕蔑の念が涌くやうなことは有り得るのである。と、いつて、何も、特別によい品物を持てといふのでもない。つまり、それは破損しないやうにといつて、下品に見つともないやうにしたり、又殊更珍らしいやうにといつて、用もないことを色色とこしらへ添へたりしたりして、うるさいほどごちやごちやと、凝つて、こしらへるのがいけないといふのである。要は、時代がついてゐるやうでゐて、甚だ仰山でなく、費用もかかつてゐず、そして

【參考】
○心劣りせらるる　我が思つて居たよりも、實際は惡くあつて、我が心にて劣つたものと思ひこむこと。「思つたほどではなく」「見下げられる」などの意である。
○わづらはしう　禪宗・茶の湯等によりて鍛錬された趣味性は、淡泊にあるといつてよい。兼好の趣味論もここに一致してゐる。
「さのみよき物を持たず」
「蛇足を附けず淡泊にする」
「珍らしからしめんため」とて淡泊性に戻つて用なきことどもをしそふ。
「わづらはしく好みなす」

その物にどこか品があるやうなのがよいといふのである。

【摘解】 ○さのみ―それほどまでに○損ぜざらんためとて云云―破損しないやうにと、むやみに頑丈一點張りに作つて、品なくしてしまふのは不可の意○つひえ―無駄な費用○物がら―その物のすべてに亘つて品がよいこと。

（第八十四段） 法顯三藏の、天竺にわたりて、故郷の扇を見てはかなしび、病にふしては漢の食をねがひ給ひける事を聞きて、「さばかりの人の、無下にこそ心弱き氣色を、人の國にてみえ給ひけれ」と人のいひしに、弘融僧都、「優に情有りける三藏かな」といひたりしこそ、法師のやうにもあらず心にくく覺えしか。

【口譯】 法顯三藏が印度に渡つた所、（故國たる支那を思ふのあまり）故郷支那の扇を見ては悲しみ、病床に臥しては、支那の食物を欲したといふことを聞いて、或人が「あれほど偉い人が、氣の弱い樣子を、どうもひどく、外國で見られたものである」といひました所が、之を聞いて、弘融僧都が、「いいえ、さうでない優しくも情味深い三藏である」といはことによつて淡泊性を害する。これらが兼好の趣味とあはぬのである。

【參考】
○故郷の扇　この話は、高僧法顯傳に見えてゐる。「法顯獅子國に到る、僧伽藍、無畏山と名づく、五千の僧有り、……心常に悲しみを懷く、忽ち此の玉像の邊に於て、商人の一白絹扇を以て供養するを見、覺えず凄然として涙下り目に滿つ」とあるのを指したのであらう。
○三藏　安帝の隆安三年に印度にわたり、歸國後佛典を飜譯してゐたが、完了しないで、遂に荊州辛寺で寂した、年八十六。「三藏」とは、經・律・論

れました。世捨人の僧侶らしくなく、まことに人情みのあふれた言葉で、奥床しく感じたのでした。

【摘解】 ○法顯三藏―支那東晉時代の高僧で、印度に渡り、佛典を得て歸り、その飜譯に從事した○天竺―印度の古稱○故郷―この場合は故國の意。即ち支那○扇―日本の團扇に當るといふ○漢―ここも支那の意○食―食事・食物○さばかりの人―それほどえらい人○無下にこそ―との上なく。實にどうもの意。下の「みえ給ひけれ」にかかる○氣色―樣子・ぐあひ○人の國―他處の國・外國○みえ―見え。「見られ」の意。今のいひ方では「見せ」に當る○弘融僧都―權少僧都。伊賀國佛性寺に住した。兼好と同時代の人○優に情有りける―やさしい情愛深い○法師のやうにもあらず―僧侶らしくもなく。僧侶は、人情を沒却し、枯木寒巖のやうにあるべきであつて、情愛とか情味などには目を向けないものであるが、さうでなくの意。

(第八十五段) 人のこころすなほならねば、僞なきにしもあらず。されどもおのづから正直の人、などかなからん。おのれすなほならねど、人の賢を見てうらやむは世の常なり。いたりておろかなる人は、たまたま賢なる人を見て、是をにくむ。「おほきなる利を得んがために少しきの利をうけず、に通じてゐる事で僧に對しての尊稱である。「玄奘三藏」などもあつた。

○病に臥し 「法苑珠林」に、法顯が印度の聖地を巡歷中に、一大寺で病臥した時、寺主が、一僧に命じて支那に行かせて漢の食を求めて來らしめた。其の僧は忽ちの中に漢食を持參したから、法顯は其の寺の人を常人でないと思つたといふ記がある。

【參考】
○おほきなる利を云云 將來大利を得んがために目前の小利を、わざと受けない、そして、人の手前、自分の本心を僞つて、欲のない正直な人だといふやうな名聲を得ようとするといふ意。

僞りかざりて名をたてんとす」とそしる。おのれが心にたがへるによりて、此の嘲をなすにてしりぬ。此の人は下愚の性うつるべからず、いつはりて小利をも辭すべからず、かりにも賢を學ぶべからず。

【口譯】 人間の心といふものは正直なものでないからして、僞つて賢人らしくして見せかけてゐる者もあらう。けれども正直な人、即ち本當の賢人も、生れつき自然とどうして無いことがあらう、きつと有らう。自分は正直でなく僞賢人にしても、他人の賢いのを見て、羨ましがるのは普通人であつて、まあよい。極端に愚かな人は、どうかして賢い人を見ると、憎むのである。そして、「彼本當の賢人は、大きな利益を得たいために、僅かばかりの利益を受取らないで、潔白らしく僞り飾つて、名聲を立てようとする」といつて悪くいふ。自分の心に賢人の心が同じでないので推量が出來ず、それでこの悪口をいふのであつて、それによつて見ても、此の(悪口をいふやうな)人は、極めて愚かな性質で、とても賢に移ることはできない、その上、僞り飾つて(小さな利益を捨てるどころか、その)小さな利益をも辭することができない。かりそめにも

○いつはりて小利をも云云 賢人を下愚な人が批評して、いつはりて小利を受けず、名聲を得ようとすると、前に云つたのを受け、下愚の人は、目前の利益をさへ取るの意。
○僞なきにしもあらず 僞つて賢人らしく見せかけてゐる僞りの者もあらう。
○おのづから正直の人 「おのづから」は「なから ん」を修飾してゐる。即ち「正直の生れつきの人も、などか、オノヅカラ無カラン」の意。
○世の常 世間普通の人であつて、まあまあ、世には有り勝ちの多くある平凡人で、それはわるい方の人ではない。この下には「いたりておろかなる人」がある。
○少しきの利を受けず そ

賢者の爲す所を學ぶことはできない人である。

【摘解】 ○世の常―世間普通○いたりて―極端に○そしる―誹る。惡口をいふ○喇―惡口○しりぬ―知りぬ。以下の事柄が分つた○下愚の性―最も愚な性分。論語の陽貨篇に、「上智と下愚とは移るべからず」○かりにも―かりそめにも。

狂人のまねとて大路をはしらば、則ち狂人なり。惡人のまねとて人を殺さば、惡人なり。驥をまなぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。僞りても賢をまなばんを賢といふべし。

【口譯】 狂人の眞似だといつて、大道を走つたならば、その人は取りもなほさず狂人である。又、惡人の眞似だといつて人を殺したならば、その人は惡人である。千里の馬を學ぶ者は千里の馬の種類であり、聖人舜を學ぶ人は舜の仲間である。嘘でもよい、賢を學ばうとする者は、賢といふべきである。

【摘解】 ○大路―都大路。大通り○驥―一日に千里（里は、ここでは、支那の里程、日本の約六百米。六町に當る）を走るといふ駿馬○舜―支那太古の天子。帝堯の位れで潔白な正しい人と言はれ、遂に其の信用を利用して大利を得んとす。

【參考】
○驥をまなぶ云云　楊子法言にある語、「驥をこひねがふ馬は亦驥の乘なり、顏（孔子の弟子の顏回）をこひねがふ人は顏の徒なり」とある。衆行の思ひ違ひで顏の事を舜と誤つたのである。
○學ぶ　「學ぶ」とは眞似をすることである。此の段では、其の眞似をすることはわるいことではなく、只よい事の眞似をするべきであるといふ。うそにも賢人の眞似をせよの意。

を受けた帝舜のこと。

（第八十八段） 或者、小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、或人、「御相傳、浮ける事には侍らじなれども、四條大納言撰ばれたる物を、道風書かん事、時代やたがひ侍らん、覺束なくこそ」といひければ、「さ候へばこそ、世にありがたき物には侍りけれ」とて、いよいよ祕藏しけり。

【口譯】 或者が、小野道風の書いた和漢朗詠集だといつて所持して居たのを、他の或人が、「御家重代の御寶物、根のないことではございますまいのでせうけれども、四條大納言公任卿の撰ばれた和漢朗詠集を、それよりも古い時代の人たる小野道風が書かれるといふことは、ちと時代が違つてをりますでせう。どうも、その點いささか疑念が挿まれますが」といつたところ、「で、ございますからして、世にも珍らしい品でございます」といつて、その人はますます大事に藏つておいた。

【參考】
○時代やたがひ侍らん　小野道風は村上天皇の康保三年（皇紀一六二六年）十二月七十一歳で歿す。公任は、其の年に生れ、長久二年（一七〇一年）正月七十六歳で歿す。
○或者と或人　この段では二にしてあるのである。
○此の段の「係結法」
時代やたがひ侍らン
覺束なくコソ（侍レ）
さ候へばコソ世にありがたき物には侍りケレ
○徒然草第六十段に「此の僧都（眞乘院の盛親僧都）、或法師を見て『しろうるり』といふ名を附けたり。『とは何物ぞ』と人の問ひければ、『さる物を我も知

【摘解】○小野道風―三蹟（藤原佐理・藤原行成と共に）の一人。醍醐天皇の御代より村上天皇の御代に至る頃の人○和漢朗詠集―朗吟に適する和漢の詩文和歌の秀句を撰び集めた書○相傳―家重代傳へること○浮ける事―根もないこと○四條大納言―藤原公任。詩歌の才に勝れた人。和漢朗詠集を撰んだ○疊束なくこそ―心もとないことです。不確なことです。下に「あれ」を略す○秘藏―大切にしまつておくこと。

（第八十九段）「奥山に猫またといふものありて、人をくらふなる」と、人のいひけるに、「山ならねども、これらにも猫のへあがりて、猫またになりて、人とる事はあなるものを」と云ふ者有りけるを、何阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の、行願寺の邊にありけるが聞きて、ひとりありかん身は心すべきことにこそとおもひける比しも、ある所にて夜ふくるまで連歌して、ただひとり歸りけるに、小川のはたにて、音に聞きし猫また、あやまたずあしもとへふとよりきて、やがてかきつくままに、頸のほどをくはんとす。

らず。若し有らましかば、此の僧の額に似てん』とぞ云ひける」といふのがあるが、此の段と同じ行き方のものである。蓋し兼好はかういふ滑稽にも面白みを感じてゐるらしい。

【參考】
○連歌しける法師　當時は連歌が流行して、それに熱中して賭物などを取つて歩いてゐた人があつた。ここも、さういふことを、しきりにやつてゐた何阿彌（陀佛）とかいふ僧が行願寺の邊に住んでゐたといふのである。連歌は和歌の上三句と下二句とを二人又は數人で相互に連ねて長く詠み連ねるものである。
○小川　攝州府志（京都の地志）に見えてゐる地名。北から京都に入り、一條戻橋を經て堀川に合する。

【口譯】「奥山には猫股といふ物があつて、人を喰ふのださうです」と人が語つたところ、又、「山でなくとも、ここらあたりにも、猫がこうらを經て、猫股になつて、人を捕ることはあるのですものを、（氣をつけねばなりませんわい）」といふ者があつたのを、何とか阿彌陀佛とかいふ名前で、連歌商賣をする坊さんの、行願寺附近に住んでゐたのが耳にして、（さてさて、怖しいことだ。私の樣に）一人歩きする身分の者は注意すべきことであると思つてをつた、丁度その頃のこと、その坊さん、或所で夜が更けるまで連歌をして、たつた一人歸途についたところ、小川のへりで、かねて噂に聞いてゐた猫股が、案の定、自分の足許へ、ひよッとやつて來て、早速、かぢりつくや、いきなり頸の邊を喰はうとする。

【摘解】○猫また―猫が年數を經て、怪しい力を備へるに至つたもの。猫又・猫股などと書く○人―或人○これら―この邊。このあたり○へあがりて―年數を經て、こうらを經て○あなる―あるのである○何阿彌陀佛―「何とか阿彌陀佛」例へば勸阿彌陀佛とか、世阿彌陀佛とかいつたので、今も「何兵衛とかいふ」などと用ひる○とかや―とかいふ○連歌しける法師―連歌を職業としてゐた僧侶○行願寺―俗に革堂といふ。京都の一條寺町にある○ありける―住んでゐる○ありかん―歩からとする即ち一人歩きをする身分ではの意○心すべきこと―注意すべきこと○比しも

○心すべきことにコソ　下に「アリケレ」を略す。
○人とる　「とる」は「捕る」の意。「猫が鼠をトル」
○此の章は接辭によつて切れ目のない一文とした。

ものありテ
けるニ
山ならねドモ
猫のへあがりテ
猫またになりテ
あなるものヲ
ありけるヲ
ありけるが聞きテ
心すべき事にこそト
思ひける比しモ
連歌しテ
歸りけるニ
小川のはたにテ
ふとより來テ
かきつくままニ

―その折しも○小川(コガハ)―固有名詞。行願寺の附近の川○あやまたず―果して、案の條○ふと―ひよつと。ひよつこりと○やがて―直ちに○かきつく―かぢりつく。とびつく。

肝心もうせて、防がんとするに力もなく、足も立たず、小川へころび入りて、「たすけよや、猫また、よやよや」とさけべば、家家より、松どもともして走りよりて見れば、このわたりに見しれる僧なり。「こは如何に」とて、川の中よりいだきおこしたれば、連歌のかけものとりて、扇・小箱など懐に持ちたりけるも、水に入りぬ。稀有にして助かりたるさまにて、はふはふ家に入りにけり。

かひける犬の、くらけれどぬしをしりて、飛附きたりけるとぞ。

【口譯】（連歌僧は）肝もつぶれ、魂も消えて、防がうとするにも、力さへ出でず、足も立たず、小川に轉げ込んで、「助けてください、猫股殿。

【參考】○猫また、よやよや　これは、其の附近の人人にむかつて、助けを求めてゐるのではなくて、その連歌師が、猫股に向つて哀願してゐるものと見て解すべきである。即ち、「猫股大明神様、どうぞお願ひでございますが、私の命ばかりは、お助け下さい。まあお願ひでございます。猫股大明神様、お助け下さいまし、お助け下さいまし」の意である。それを聞きつけて、附近の人人が、驚いて、その場に驅けつけて連歌僧を助けようとした

助けください、助けてください」と猫股に向つて大聲で叫んだものだから、それを聞きつけて方方の家から、松明(タイマツ)などをつけ馳け出して見たところが、この近所で顔見知りの坊さんであることが分つた。「これは、まあ、どうなさいました」といふわけで、川の中から抱き起したところが、連歌の席での賞品として得た、扇や小箱など懐中に持つてゐた品品も、水にひたつてしまつた。やつとの思ひで助かつた體で、這ふやうにして家に歸つたのであつた。之は實は、その人が飼つてゐた犬が、暗中でも主人を識別し、喜んで飛附いただけの事であつたさうである。

【摘解】○肝心(キモコロ)―肝も心もつぶれてしまつての意。肝がつぶれ魂を失つてしまふこと○松ども―松明(タイマツ)など○わたり―附近○かけもの―賭物。連歌の席で點數を多く得たものが取る賞品○希有(ケウ)―めつたにないこと。やつとのことで○はふはふ―這ふやうにして。足もたたず○ぬし―主人。

（第九十二段） 或人、弓いる事を習ふに、もろ矢をたばさみて的にむかふ。師の曰く、「初心の人、ふたつの矢をもつ事なかれ、後の矢をたのみて、はじめの矢に等閑の心あり。毎度ただ得失なく、此の一矢に定むべしと思へ」といふ。わ

のである。飼犬の好意が逆になつた。

「助けよや、助けよや」といふべきのを、片言(カタコト)にしたので、あわてた言ひ方である「助けてください。猫股殿。助けて下さい、助けて下さい」と猫股に對して、哀願してゐるのである。近所の人を呼んでゐるのではなく、猫股に助けてくれといつてゐるのではある。

○飛附きたりけるとぞ「けるとぞ」は文法的にいへば「けりとぞ」とすべき所である。

【參考】○もろ矢をたばさみて　弓では、二本の矢即ち、一手(二本)の矢を持つて的に向ふのが禮式である。しかし、それは禮式の時であつて、初心の人が的

づかに二つの矢、師の前にて、ひとつをおろかにせんと思はんや。懈怠の心、みづからしらずといへども、師是をしる。此のいましめ、萬事にわたるべし。

【口譯】 或人が、弓を射ることを習ふに、二本の矢を手に持つて的に向かつた。先生がいはれるに、「始めて習ふ人は、二本の矢を持つて的に向な。（二本の矢を持つと、どうしても）次の方の矢を賴りにして、はじめの矢を好い加減にする氣が起る。いつでも矢の的中するとか的中しないとかを念頭にかけず、ただこの一本であてようと心掛けるがよろしい」とのことであつた。僅に二本の矢、しかも先生の前で、その一本をよい加減に引かうなどと思はうか、誰しもそんなことは考へないのである。しかし（隱微の中に存する）おこたりの心は、自分で氣がつかなくとも、先生はちやんとこれを見拔いてしまはれるのである。この（弓を射る人に對する）訓誡は、萬事に及ぼすことができよう。

【摘解】 ○もろ矢―二本の矢。矢二本を一手（ヒトテ）といふ。そして第一の矢を甲矢（ハヤ）といひ、第二の矢を乙矢（オトヤ）といふ○たばさみ―手にはさみ持つて。左手に弓を、右手に二本の矢に向かふに二本の矢を持つことは、後の矢に賴る心が生ずるから、面白くないと誡めたのである。

○懈怠（ケタイ） ケタイ ケダイ ゲタイといふ三樣のよみ方がある。

晉の清濁は注意すべきものである。此の「懈怠」の如きは清濁の何れにしてもよいが、金（キン）と銀（ギン）とは違ひ、金婚式は五十年目、銀婚式は二十五年目で其の差二十五年である。此等は注意を要するものである。

「世の中は清（ス）むと濁るの間違ひで、人は茶（チヤ）を飲む蛇（ヂヤ）は人を飲む」

「世の中は清むと濁るの間違ひで、福は徳（トク）なり、鰒（フグ）は毒（ドク）なり」

矢の鐵に近い所を束ね持つ○初心（シロウト）の人―習ひはじめの人。初學の人○等閑（ナホザリ）の心―おろそかにする氣持○得失なく―あたるあたらないを念頭に置かず、あたれば得、あたらねば失である。それらを念頭に置かずに○おろかに―おろそかにと同じ○懈怠（ケタイ）の心―なまける心。おこたりの心○みづから―自分自身○此のいましめ―もろ矢をたばさみて的に向かはんとする人に對する師のいましめ○萬事（バンジ）―あらゆる事。弓以外のすべての事に、この誡は及ぼすことができる筈。

道を學する人、夕には朝あらん事を思ひ、朝には夕あらんことを思ひて、かさねてねんごろに修せんことを期す。況んや、刹那のうちにおいて、懈怠のこころ有る事をしらんや。なんぞただ今の一念において、直ちにする事の甚だかたき。

【口譯】 道を學ぶ人は、夕には、あくる朝があるからその時にやらうと考へ、朝には又夕方があるからそれまでのばしておいて、しようと考へ、その時に十分に勉強しようとついのびのびに思つてゐる。朝夕に比しては短い一瞬間であるから、ましてや、其の一瞬時の内にあつて、自などともいつてゐる。

「ホトトキス、ホトトキス キスキスキスニマツマツ 我れに初晉聞かせよ」の歌の如きは清濁晉を正さなければ讀めぬ。

【參考】

○刹那（セツナ） 一度指を爪彈きする間には六十五刹那があるといはれてゐる。それほど短い時間。その反對に長い時間の單位は劫（カウ）である。

○一念（イチネン） これも短い時間の單位。一念の内に九十刹那があるといはれてゐる。刹那も念も別に時間的區別なく、何れも「瞬間」の意にして見よ。

○勸學文 朱 文公

分に怠りの心あることなどには氣づかうか、とても、怠りの心あるなどとは思はないのである。なんとまあ、思ひ立つたその瞬間に、直ちにそれをしてしまふといふことが困難なのだらうか、すぐすればよいのに。

【摘解】 ○學ナ―學ぶこと。修行すること。ここの「道」は學問・藝能何事にまれ道と名づくものをいふ○夕には朝あらんことを云云―夕方にはその翌朝があるのだから、その折に一所懸命にやらうと考へ、朝になると、夕方があるのだから、その夕方には一所懸命にやらうと考へるといふのである○修せん○期○刹那―佛教でいふ極めて短い時間○一念―刹那と同じく短い時間。

（第九十三段） 「牛を賣る者あり。買ふ人、明日そのあたひをやりて牛をとらんといふ。夜のまに牛死にぬ。買はんとする人に利あり、賣らんとする人に損あり」とかたる人あり。

是を聞きて、かたへなる者の曰く、「牛のぬし誠に損有りといへども、又大きなる利あり。其の故は、生あるもの、死のちかき事を知らざる事、牛既にしかなり。人又おなじ。

勿レ謂今日不レ學而有ニ來日一、勿レ謂今年不レ學而有ニ來年一、日月逝矣歲不ニ我延一、嗚呼老矣是誰之愆。
勸學　陶淵明
盛年不ニ重來一、
一日難ニ再晨一、
及レ時當ニ勉勵一、
歲月不レ待レ人。

【參考】
○一錢　今日いふ一錢の意ではなく、一つの錢の意である。錢は穴のあいた値の低い貨幣をいふ。
○鵝毛　文選の司馬遷の任少卿に報ずる書に「人固より一死有り、或は太山より重く、或は鵝毛より輕し」とある。
○ここの論法は彼の詭辯論に似てる。詭辯論の一部

はからざるに牛は死し、はからざるにぬしは存せり。一日の命萬金よりもおもし。牛のあたひ鵝毛よりも輕し。萬金を得て一錢を失はん人、損ありといふべからず」といふに、皆人嘲りて、「其の理は牛の主に限るべからず」といふ。

【口譯】 「牛を賣る者があつた。買ふ人が明日その値段を渡して牛を引取らうといつた。ところがその夜の中に牛が死んでしまつた。この場合、買はうとした人は得をして賣らうとした人は損をしたのである」と話した人がある。

これを聞いて、傍にゐた人のいふには、「牛の持主は實際損をしたといふけれども、一方、大層な利益も得てゐる。何故であるかといふと、生ある者にして死期の近いことが分らないのは、この牛が既によい例である。人間とても同樣である。この場合には、思ひがけぬに牛は死んでしまひ、同樣思ひがけず主人は生き永らへたのである。人間一日の生命といへば萬金よりも尊い。牛の値段はそれに比較すると、鵝の羽よりも輕い。從つて萬金を得て一錢を失ふといふ人は、決して損をしたといふことはできない」と。之を聞いた人は皆、嘲り笑つて、「その理窟は、必ず

を掲ぐ。
（鱞魚論法）
鱞魚あり。或母の兒を奪ふ。母之を返さんことを求む。鱞魚約して曰く、「汝若しこの事に就きて眞實の言をなさば余は直ちに此の兒を返すべし」と、母之に謂つて曰く、「汝はわが兒を返さず」と鱞魚答へて曰く「汝は眞實の事を云ひたるか、然らざるか何れかその一なり。汝若し眞實を言ひたりとすれば汝は小兒を受領すること能はず。何となれば、余若し汝に小兒を返したる時は、汝の言ひたること虛僞となるを以てなり。又汝若し眞實を言はずとせば、契約によつて汝は小兒を受領する能はず。故に何れの場合に於ても汝は小兒を受

しも牛の持主一人に限つたことではない、生きてゐる人は誰でも同じに得をしてゐるのである」といつた。

【摘解】 ○あたひ―價格・値段○とらんと―受取らうと。引取らうと○夜の間―夜中。その晩の内に○買はんとする人に云云―牛を買はうとするに、明日その取引をすると約束しておいた所、その夜の中に牛が死んでしまつた。もしその約束が成立した時にすぐ取引をしたとすると、買主は、代金を支拂つて、受取つた牛を、すぐその夜失つたことになる。つまり、買主の損となる。之と反對に、賣主の方は、即座に取引をすませれば、代金を得てしまふから得をすることになるのを、明日に延ばしたために損をしたことになる○かたへなる―傍にゐる人○生あるもの云云―生きてゐる物は、何日死期が來るか分らない。牛は、今日の前で死んだ。よい實例である。人も同じであるの意○はからざるに―思ひがけずも○存ぜり―生き永らへた○萬金―黄金一萬枚○鵜毛―鵜鳥の羽。輕きものの譬○一錢―一つの錢○牛の主に云云―牛の持主だけが生き永らへたなら、この理窟も立つけれども牛の賣買と無關係な外の人達も皆生き永らへたのであるから、この理窟（萬金を得したといふ）は牛の持主に限つたことでないの意。

又曰く、「されば、人死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜、日日にたのしまざらんや。おろかなる人、此の樂みを

領する能はず」と。母は同一の論法を用ひて、正反對の事を推論す。曰く「余は眞實を言ひたるか然らざるか何れかその一なり。余若し眞實を言ひたりとすれば、契約によつて小兒を受領すべし。又余若し眞實を言はざりしとすれば、余が言ひたる事の正反對即ち「汝は小兒を余に返す」といふことが眞實となるを以て、余は小兒を受領すべし。故に余は何れの場合に於ても小兒を受領すべし」と。

【參考】 ○生死の相　生とか死とかいふ現象のするのは此の世の中に於ける姿である。この境地を超越した靈的な精神的な境地に至つては、生も死も無いのである。

○いたづがはしく　いたづくは勞の意。即ち苦勞すること。

○異同辨　文字の異同について少しく述べよう。

「たのしみ」

「樂」は、「苦」の反對であつて、苦ならぬこと。

「娛」は、氣ばらしをしてたのしむこと。

「嬉」は、遊びをしてたのしむこと。

「おそる」

「恐」は、未來をおそれること。

「懼」は、おそれ戒める意にいふ。恐懼、疑懼等。

「畏」は、甚だしくおそれること、敬の意を含む。

「怖」は、無茶苦茶ただお

わすれて、いたづがはしく外のたのしびをもとめ、此の財をわすれて、あやふく、他の財をむさぼるには、志滿つ事なし。いける間生をたのしまずして、死に臨みて死をおそれば、此の理あるべからず。人皆生をたのしまざるは、死をおそれざる故なり。死をおそれざるにはあらず、死の近き事をわするるなり。もし又、生死の相にあづからずといはば、實の理をえたりといふべし」といふに、人いよいよあざける。

【口譯】 又いふには、「であるから、人間、死を苦むならば、生を愛すべきである。生存の喜びを毎日毎日樂まないでよからうか。然るに愚な人は、この生存の樂みを忘れて、わざわざ苦勞をして他の樂みを求めこの何物にも代へ難い財寶を忘れて、危險な思をして、他の財寶を貪ることをしてゐる。それでは滿足するといふことは有り得ない。生きてゐる間に、その生存の樂みを樂まずして、死期に臨んで死を恐れるとしたなら、そんな理窟に合はないことはない。人、誰しもが生を樂まないのは、死

をおそれないからである。否、死を怖れないのではない。死期は近きにあることを忘れてゐるのである。もし又、否、自分は生とか死とかそんな肉體的の境地にあるのではないといふならば、そんな人は全く、眞の道を得たのだといふことができる」といふと、聞いてゐた人は、ますます嘲り笑つたのである。

【摘解】 ○死を憎まば云云―死ぬことをいやがるなら須く、生きてゐるこの生命を大切に思ふべきであるの意○存命の喜び―生きてゐるといふことの喜○此の樂み―生きてゐるといふ樂み○いたづがはしく―わさわざ苦勞して○外のたのしび―生存の喜び以外の名利を求めるとか酒色にふけるとかいふ樂み○此の財―生きてゐるといふ樂み。前の「此の樂み」と同じ事を言葉をかへていつたのである○あやふく―危險を冒して○他の財を云云―前の「外のたのしび」と同じいひ方で、生以外の金錢財寶をいふ○いける間―生きてゐる間○生○此の理あるべからず―生きてゐる間生を樂しまうとしないのは、つまり死を何とも恐れないわけである。然るに死を恐れる。これは理窟にあはない事をいつた○生死の相―生とか死とか、現世に於ける肉體的の現象○實の理―眞理。ほんたうの道理。

(第百三段) 大覺寺殿にて、近習の人ども、なぞなぞを作りてとかれける處へ、くすし忠守參りたりけるに、侍從大納言公明卿、「我が朝の者とも見えぬ忠守かな」となぞなぞにせられにけるを、「唐瓶子」ととときてわらひあはれければ、はらだちて退り出でにけり。

【口譯】 大覺寺殿で近習の人人が、謎を作つてはそれを解いてゐた所へ、醫師の丹波の忠守が參上して來たので、侍從大納言公明卿が、「我が朝の者とも見えぬ忠守かな」と謎にせられた。それを、「唐瓶子」と解いて、皆が笑ひ合はれたので、忠守は腹を立てて退出してしまつた。

【摘解】 ○大覺寺殿―嵯峨にあつた後宇多上皇の御所であるが、ここは宮城内にあつた大覺寺殿と名づけておいた御殿であらう○近習―御側近く仕へてゐる人○なぞなぞ―今の謎のこと○くすし―藥師の意。醫師○忠守―阿知使主の子孫で歸化人の末裔に當る。代代醫術を以て仕へた。忠守より十世の祖に當る丹波康頼の時に、始めて丹波宿禰の姓を賜はつた。忠守は典藥頭長有の子であつて、歌人、典藥頭、宮內卿。法名は舜阿といつた人である○侍從―中務省に屬する官吏で、天皇の御側に侍する役。大納言・中納言・參議の人たちの兼任が多い○公明―藤原實仲の子。延元元年五月權大納言となり、九月に歿した、年五十六。侍從であつた○我が朝の者とも見えぬ忠守かな―今日の謎ならば「我が朝のものとも見えぬ忠守とかけて何と解く」とでもいふのである。この謎は「日本の人とも見えぬ忠守とは何であるか」

それること。
「のぞむ」
「望」は、高きを見、遠きを見ること。望遠鏡等。
「臨」は、高き所から見おろす。川岸より川面を見おろす。
「覬・覦」は、すべき事では無いのを希望する。
「ある」
「有」は、無に對す。……が有ること。
「在」は、沒に對す。……に在ること。
「いふ」
「言」は、一般にいふ。
「謂」は、第三者を批評していふこと。
「云」は、輕い。又文末に用ひる。

【參考】
○謎の意―平清盛の父の忠盛が身分の卑い頃、御前に召された折に、朝臣共は、「伊勢瓶子はすがめなり」とはやして嘲つたといふことが平家物語に出てゐる。忠盛は伊勢に住してをり、眼が眇即ちやぶにらみであつた。伊勢から出る瓶子は酢を入れるに用ひて酢を入れる瓶子即ち酢甕といふのと、眇とを通じさせて嘲つたのである。此の忠盛と忠守と音が似てゐるので、忠守の先祖が歸化人であることをこじつけて、伊勢平氏（伊勢瓶子）の代りに唐瓶子といつたのである。
○徒然草の第百三十五段に「馬のきつりやうきつにのをか、なかくぼれいりくれんどう」は「雁」の意。又、第六十二段に「ふたつ文字牛の角文字すぐ

の意○唐瓶子―金屬性の酒徳利。「瓶子」とは酒を入れる徳利やうなもの○退り出で―貴人の前を退き出る時に「まかり」といふ。「參る」の對である。

(第百八段) 寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、おろかなるか。おろかにして怠る人のためにいはば、一錢輕しといへども、是をかさぬれば、まづしき人をとめる人となす。されば商人の一錢ををしむ心切なり。刹那覺えずといへども、これをはこびてやまざれば、命を終ふる期忽ちにいたる。

【口譯】 世間を見渡して見るに、僅の時間を大切にする人がない。で、この僅の時間卽ち寸陰を大切にしないのは、寸陰を惜しむなどいふことは、つまらぬことであるといふことを、一段高い所に立つて見拔いてゐるのであらうか。それとも全然そんなことを知らぬほど愚物であつて寸陰を惜しまないのであらうか。(いづれそのどちらかであらうが、道理を辨へて寸陰を惜しまない人に、何も言ふことはないが) 愚かで、何も知な文字ゆがみ文字とぞ君は覺ゆる」は「こいしく」

【參考】
○この節の主題は「寸陰惜しむ人なし」にある。寸陰を惜しまないのに、二色ある。知つてゐて惜しまざると、知らずして惜しまないのとである。その知らずにうかうか時を過してゐる人に對して說明してやるならば、といつて、「一錢輕しと云云」以下「忽ちにいたる」までの例を擧げたのである。
○寸陰 晉書の陶侃傳に、「大禹は聖者なり。乃ち寸陰を惜しむ。衆人に至りては、當に分陰を惜しむべし」とある。

らない癖に寸陰を惜しむことをせず、なまけてゐる人の爲に言ふならば、一錢といふ金高は實に僅のものである。けれども、これを澤山集めれば貧乏人を金持とすることができる。であるから、商人はこの一つの錢を大切にすることが極めて強い。別な例をいふならば、一刹那といふ時間は、全く知覺できない短い時間といふものの、この刹那刹那を次第次第に送つて行けば、一命を終へる時期が忽ちにして來るのである。

【摘解】 ○寸陰―僅な光陰。僅な時間○これ―上の「寸陰惜しむ人なき」を受けていふ○しれるか―よく悟を開いてゐる人であるか○一錢―一の孔のあいた、價低い錢○かさぬれば―一つの價安い孔錢でもそれを重ね重ねて行けば○商人○切なり―痛切である。極めて強い○刹那覺えず―一刹那といふ極めて短い時間は、いちいちそれを經驗できない○はこびて―その刹那を送ること○期―時期。

○知
レ―カ
ル―リ
ル―リ
リ―ラ
ラ

○富
レ―人
ル―リ
メ―リ
ム―ラ
ム―
ミ―
マ

されば道人は、とほく日月を惜しむべからず、ただ今の一念、むなしく過ぐる事ををしむべし。もし人來りて、我が命、あすは必ず失はるべしと告げしらせたらんに、けふのくるるあひだ、何事をかたのみ、何事をかいとなまん。我等がいけるけふの日、なんぞ其の時節にことならん。一日

【參考】
○一念・刹那 「或人弓射る」の段にいつた。
○ただ今の一念 たつた今眼前の時を大切にすべきで、今やらなくとも、あしたやらうとか、來月から始めようとかいふやうなことではならぬことを

のうちに、飲食・便利・睡眠・言語・行歩、やむ事をえずしておほくの時をうしなふ。其のあまりの暇幾ばくならぬうちに、無益の事をなし、無益の事をいひ、無益の事を思惟して時を移すのみならず、日を消し、月を亙りて一生を送る、尤もおろかなり。

【口譯】 さういふわけであるから、佛道に志す人は、遠い將來の月日をあてにしてそれを大事にしてゐてはいけない、なんでもかでも、ただ此の一瞬間が無駄に過ぎ去ることを惜しんで修業しなければいけない。もし誰か人が來て、あなたの生命が、明日必ず失はれるだらうと告げ敎へてくれたならば、今日一日の暮れるまで、何事を賴みとし、何事を爲さうや、とても何事もできはしまい。人間が生きてゐる今日の日といふものは、何うしてこの場合に違はうや、全く同じなのである。しかもその一日の中で飲食・用便・睡眠・會話・歩行などと、やむを得ずに多くの時を失ふのであつて、その餘りの時間はいくらもないのに、そのいくらもない大切な時間の中で、益もない事をなし、益もない事を喋り、益もない事を考へては、時間を費し、重ねては日を送り、月を送つて段段多

○時を移すのみならず　無益の事をなし、喋り、思考して時間を重ねて日となし、その時間を送り、その時間を重ねて月となし、更にそのやうに無駄に過す日を重ねて一生を送つてしまふをいふ。かくて一生を送つてしまふをいふ。

○無益の事をなし、無益の事をいひ、無益の事を思惟し　かく「無益の事」といふ如く同句を重ねるのは反覆形中の疊法。

「姓は橘名は常樹といふ人ありき。此の人、物知れど知るとも無く、酒飲めど飲むとも無く、樂しめど樂しむとも無く、親しめど親しむとも無く、憂ふれど憂ふとも無く、貧しけれど貧しとも無く、詠める歌、作れる文らも盜人にかどはされて無し。かく許り世にあやいふ。

くの時間を空費して遂にさうして一生を過してしまふ。これは最も愚なことである。

【摘解】 ○道人―佛道を修業しようと志す人○とほく日月を云云―先がある。今は道に志さないでも、先になつて道に志すと、將來の月日を大切にしようと考へること○ただ今の一念―現在の短い時間。念は短い時間の單位○我が命―言はれた方の側から書いたのである。告げる人の側からいへば「汝の命」である○何事をかたのみ―何を賴みとしようぞの意。富だの地位だの名譽だのといふものは何の賴みにもならないことをいふ○いけるけふの日―生きてゐる此の今日の日○其の時節―今述べた、明日は死するといはれた折の場合○飲食―飲み食ひ○便利―大小便をすること○睡眠―眠ること○言語―他人と會話すること○行歩―歩くこと○其のあまりの暇―その以外の時間○無益―何の役にも立たぬ○思惟―又、シキ。考へること。

謝靈運は法華の筆受なりしかども、心常に風雲の思を觀ぜしかば、惠遠白蓮の交を許さざりき。暫くもこれなき時は、死人におなじ。光陰何のためにかをしむとならば、內に思慮なく、外に世事なくして、止まん人は止み、修せん人は修せよとなり。

しければむなしの翁とこそ名附けつべけれ。かくて去年の霜月の中の九月といふに、惱める事も無くて魂さへ無くなりにける。かかれば今、墓ひ出でつつ、人人哀みあへるを、饗享くとも無くてむなしのよや。世の事はみながら無しと見し人を、ありのすさびにとふがかなしさ」(賀茂眞淵)

○日を消し、月を亙りて一生を送る。　かく段段度を進めるのを漸層法。

「一人齎死せば以て十に對すべし。十以て百に對すべし。百以て千に對すべし。千以て萬に對すべし。萬以て天下に冠たるべし」(韓非子)

【參考】

○風雲の思　古來二つの解釋がある。一つは上段で說いた通り、風雲に乘じ

【口譯】 六朝時代の謝靈運は法華經飜譯の時、飜譯者の言葉を受けて之を支那文に綴る筆受といふ役を勤めた人であつたが、心中、常に風雲に乘じて一旗あげようといふ野心を抱いてゐたので、惠遠は彼の白蓮社に入るを許さなかつた。で人としては、たとひ暫くの間でも、この寸陰を惜しむ心がない時には、それは死人と同じである。然らば一體、何のために時間を大切にするかといふに、內には、つまらぬ事を考へて心を勞する事なく、外には世間の俗事にわづらはされることなく、そのまま何もせずに無爲の境地にゐて一生を終らうと思ふ人は、さう思ふ通りに無爲にして一生を終へ、進んで道を修行しようと思ふ人は、さう思ふ通りに道を修行して終るがよいといふ其のためである。

【摘解】 ○謝靈運―六朝時代の人、後に宋に仕へて永嘉の太守となつたが、心中常に不平とする所あり、遂に亂を起して元嘉十年刑死した。年四十九○法華の筆受―法華經を支那に飜譯する時に、飜譯者の言葉を受けて、それを支那文に綴る役。(一說には。彼は涅槃經の筆受であつたといふ)○風雲の思―所謂、風雲に乘じて何か大きな仕事をやらうといふ考○觀ず○惠遠―東晉の人。二十一歲の時佛門に入り、廬山に東林寺を建ててそこに住した。義熙十二年寂、年八十三○白蓮の交―惠遠を中心にした佛敎團體。集る所百二十三人といふ。東林寺には多く白い蓮を植ゑたので白蓮社といつた。靈運もこの社中の人となりたいと希望したのであつたが、て何か野心を遂げようといふのであり、今一つは、世事を捨てて、花鳥風月を事として一生を送ることである。いづれに解しても意は通ずる。

○法華の筆受 謝靈運は涅槃經の飜譯には與つたが、法華經のには與らない。法華經のは鳩摩羅什の飜譯で、其の弟子僧睿の筆受である。象好の考へ違ひであらう。

○キシシカ(過去助動詞)筆受なりシカども風雲の思を觀せシカば交を許さざりキは皆過去助動詞である。「世事なくシて」の「シ」は過去助動詞の「シ」ではない。

○觀ゼしかば 修セん人は 此の「セ」はサ行變格活用の未然形である。

彼の心中に不純なものがあつたので惠遠が之を拒絕したといふのである○これなき時は―この「これ」は何を指すか不明であるが、古來「光陰を惜しむ心」をさすのだといふ說が廣く行はれてゐる○內に思慮なく―心中何もつまらぬ事など考へぬこと○外に世事なく―外界に對しては俗世間の俗事にわづらはされぬこと○止まん人―何もせず一生を無爲に過したい人は、そのまま何もせず無爲に過せといふ意(道敎の思想である)○修。

(第百九段) 高名の木のぼりといひしをのこ、人をおきてて、たかき木にのぼせて梢を切らせしに、いとあやふくみえしほどはいふ事もなくて、おるるときに、軒長ばかりになりて、「あやまちすな、心しておりよ」と言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛びおるるともおりなん、如何にかくいふぞ」と申し侍りしかば、「其の事に候、目くるめき、枝危きほどは、おのれがおそれ侍れば申さず。あやまちはやすき所になりて、必ず仕る事に候」といふ。

「修セヨ」はサ行變格活用の命令形である。

○光陰何の爲にカをしむは、「光陰何のためにをしむカ」の意。

かく ヤ カ の最後にあるべきを上に引上げ轉位したのを係辭といふ。

【參考】

○下萬 上萬の對。「萬」とは僧侶が功を積んだ年數を示す語。萬を積むこと多ければ上萬といひ、少ければ下萬といふ。それが僧以外にも用ひられて、身分ある人を上萬といひ、(特に官女の場合に用ひられる)身分の低いものを下萬(ここの例)といふ。

○聖人の戒―易の繫辭に、「君子は安くして危きを忘れず、存して亡を忘れ

あやしき下臈なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠も、かたき所を蹴出してのち、やすくおもへば、必ず落つと侍るやらん。

【口譯】 木のぼりの名人として有名であつたある男が、人を指圖して、高い木に登らせて梢の枝を切らせたところ、ずつと高い所で、いかにも危く思はれる内は何も言はなくて、下りる時に、家の軒の高さぐらゐの所になつてから、「失敗するなよ。注意して下りろよ」と聲をかけましたので、「これぱかりの所になつては、飛び下りても下りられるだらう。何故、さういふのか」と申しましたところが、「その點でございます。目がくらんで、枝も折れさうに危い間は、自分からして、こはいので、注意に注意を重ねてゐますから、何も申しません。失敗は、ごくたやすい所になつてから、きつとやるものでございます」といひました。身分も卑い下人でありますが、その言葉は聖人の訓へにもかなつてゐます。例へば、蹴鞠などでも、むづかしい所を蹴つて後、もう何でもないと思ふと、きつと落ちて誤るものだといふことです。

【摘解】 ○高名(カウミヤウ)の木のぼりといひしをのこ―世間で「高名の木のぼり」といはれて

ず、治にして亂を忘れず、是を以て身安くして、國家は保つべきなり」とある。

○高名の木のぼりといひしをのこ 「加藤清正といひしをのこ」といふと同形であるからといつて「高名の木のぼり」を姓名と見てはならぬ。

○飛びおるるとも 「おるるとも」は「おるとも」とするのが文法的である。トモは動詞には其の終止形に接續するのである。但し文部省許容案には連體形に接することも許容してある。即ち、

一一 テニヲハの「とも」の動詞、使役の助動詞及受身の助動詞の連體言に連續する習慣あるものは之に從ふも妨なし。

例 數百年を經るとも
如何に批評せらるるとも
強ひて遵奉せしむるとも。

ゐた男の意で、つまり、木のぼりの名人として聞えてゐた男の意。「木のぼり」は固有名詞ではない○おきて―指圖して。「おきつ」(掟つ)といふ下二段活用の動詞○のぼせて―登らせて○あやふくみえしほど―いかにもあぶなつかしく思はれる内は の意○おるる時―下りる時○軒長(ノキタケ)―軒の高さほどの所○あやまち―過失。しくじり。失敗○心して―注意して○かばかり―これぱかりの高さになつて○其の事に候―今普通にいふ「そこです」といふのが當る。「その點です」○目くるめき―目がまはる○枝危き―高い所で枝が細く何時折れるか分らないやうに危い所をいふ○おのれがおそれ―自分自身とはいものだから、十分に警戒してゐるの意○やすき所―なんでもない所○あやしき―身分の低い○下臈(ゲラウ)―下人の意。下部(シモベ)。下賤の者○かなへり―合致してゐる。合つてゐる○鞠(マリ)―蹴鞠をいふ○蹴出してのち云云―むづかしい鞠をうまく蹴つて(出すは深い意味はない)さて氣をゆるめると、きつと鞠を落すといふことをいつた。

(第百十九段) 鎌倉の海に、かつをと云ふ魚は、彼の境にはさうなきものにて、此の頃もてなすものなり。それも、鎌倉の年寄の申し侍りしは、「此の魚、おのれらわかかりし世までは、はかばかしき人の前へ出づること侍らざりき。頭は下部もくはず、きりて捨て侍りしものなり」と申しき。

【參考】
○鰹 「かつを」は武家時代には勝魚といつて、最も縁起よい魚とされてゐた。今も、鰹節はめでたい時に用ひられる。それが吉野朝頃には、貴人の食膳にまで供されるやうになつたと、わざわざ兼

○おりなん 「おりん」の意として宜し。「ナ」は完了助動詞の未然形である。そして、ここでは此の「ナ」を無視扱ひにする。

かやうの物も、世の末になれば、上さまでも入りたつわざにこそ侍れ。

【口譯】 鎌倉の海でとれる鰹といふ魚は、あの鎌倉邊では、この上ないものとされてゐて、特に近來鎌倉方面の人人が賞味するものである。しかし、その鰹も、鎌倉に住む老人のいふところによれば、「この魚は、私共が若かつた頃までは、身分ある人の食膳に供されることはありませんでした。頭などは下人どもでも食はず、切つて捨てたものでした」といふのであつた。

こんな魚のやうなものでも、衰へた世の末になると、上つ方の所までは ひり込むものである。

【摘解】 ○かつを―鰹のこと。「海にかつを」といふいひ方は、前の「仁和寺にある法師」と同じである。○境(サカヒ)―處。○さうなきもの―雙なきもの。ならぶものないほどよいもの。○此の頃―近來。○もてなす―もてはやす。賞味する。○おのれら―自分たち。○はかばかしき人―お歴歴の人。身分のある人。○前へ出づること侍らざりき―はかばかしき人の前に鰹を持出すことはなかつたの意で、食膳に供せられることはなかつたことをいふ。○世の末―末世。上代を立派な世とする思想。○上さま―上流社會。○入りたつ―はひりこむ。○わざ―こと。

好が筆に留めてゐるのである。時世の變化といふものが分る。

○かつを(川柳)

鰹賣名で呼ばれるはあたらしい

初鰹煮て食ふ氣では直がならず

そんなのも今に來ませうと鰹賣

金持を見くびつて行く鰹賣

初鰹そろばんの無い家で買ひ

發句にもならぬ鰹を伊勢屋買ひ

初鰹女房あたまも食ふ氣なり

さう押してたまるものかと鰹賣

今食へばよしと魚屋置いて行き

女房(カヽ)樣ぢゃ出來ぬと逃げる初鰹

(第百二十九段) 顏回は、志、人に勞をほどこさじとなり。すべて人を苦しめ、物をしへたぐる事、賤しき民の志をもうばふべからず。又、いときなき子をすかし、おどし、いひはづかしめて興ずる事あり。おとなしき人は、まことならねば、事にもあらず思へど、をさなき心には、身にしみておそろしく、はづかしく、あさましき思ひ、誠に切なるべし。是をなやまして興ずる事、慈悲の心にあらず。

【口譯】 顏回は自分で苦勞に思ふことは、人にもさせまいといふ志を持つてゐたといふ。すべて、他人を苦しめたり、生物をいぢめたりすることは、(惡い事であるから、避けるやうにするがよい) いかに身分の賤しい人民でも、その者が抱いてゐる志を曲げて、その欲する所をとげさせないといふやうなことがあつてはならない。又、世間では、小さい子供を、だましたりおどしたり、馬鹿にしたりして面白がることがある。大人(オトナ)の身になつて見れば、元元、そんなことが本當でないことは分つてゐるのであるからして、氣にもかけないが、小さい子供の心では、身に

【參考】

○人に勞をほどこさじとなり これは論語の公冶長(コウヤチヤウ)篇にある、「顏淵曰く、願はくは善に伐(ほこ)ること無く、勞を施すこと無けん」といふ語を取つたのである。苦勞は自分も欲する所でないからして、それを他人に及ぼすこともやらないの意である。

○賤しき民の志をもうばふべからず

次の第三條の大御心にも添ふ語である。

五箇條の誓詔(明治天皇)

憲法類編、明治元年三月十四日

一 廣く會議を起し萬機公論に決すべし

一 上下心を一にし盛に經綸を行ふべし

一 官武一途庶民に至る迄各其志を遂げ人心

しみじみとこはく、或は恥づかしく、又は、なさけないといふ感情が、實際痛切であらう。それだのに、そんな子供をいぢめて面白がるなどといふことは、慈悲の心ではない。

【摘解】　○顏回―孔子の高弟。字は子淵。二十九歳の時鬢髮悉く白かつたといふ。三十二歳で歿した○志―人に勞をほどこさじとなり―顏回は、その志す所は、一に「他人に苦勞たることがらをしない」といふ點にあつた、といふいひ方○しへたぐる―虐待する。「もの」は動物○しへたぐる事―との下に「しへたぐることは、よくないことであるから、つつしむべきである」といふやうな句を略したものとして考へるがよい○賤しきの民の志を云云―論語の子罕篇に「子曰く、三軍も帥を奪ふべし、匹夫も志を奪ふべからず」とあるのによつた語。いかに賤しい人間でも、その意志を曲げることはできないの意。ここでは、それを變へて、「奪つてはならぬ」といふやうに用ひた○いときなき―稚き。幼いこと○すかし―だますこと○いひはづかしめ―恥づかしいと思ふやうなことをわざといつて辱かしめること○おとなしき人―一人前の大人。溫順の意ではない○興○まことならねば―幼い子供をからかつてゐる事柄が、眞實のことでないのを知つてゐるから○事にもあらず―何でもなく○あさましし―ここでは、なさけない○慈悲の心にあらず―慈悲の心の本質に背いてゐるの意。

おとなしき人の、よろこび・いかり・かなしび・たのしぶ

【參考】

をして倦まざらしめんことを要す

一　舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし

一　智識を世界に求め大に皇基を振起すべし

我國未曾有の變革を爲さんとし朕躬を以て衆に先んじ天地神明に誓ひ大に斯國是を定め萬民保全の道を立んとす衆亦此旨趣に基き協心努力せよ

○本章中のズズズヌネを拾ふと、

ズ
ことにもあらず＝ズ＝思へ
うばふべからず
ズ
慈悲の心に非
ヌ
まことならず＝ネ＝ば

も、皆虛妄なれども、誰か實有の相に著せざる。身をやぶるよりも、心をいたましむるは、人をそこなふ事なほ甚だし。病をうくる事も、おほくは心よりうく。外より來る病はすくなし。藥をのみて汗を求むるには、しるしなきことあれども、一旦恥ぢおそるることあれば、必ず汗をながすは、心のしわざなりといふことを知るべし。凌雲の額を書きて、白頭の人となりしためしなきにあらず。

【口譯】　尤も、大人の喜怒哀樂なども、みな空なもので、一種の迷であるが、人は誰が、今の眼の前の姿に心を奪はれないものがあらう。誰しも眼前にあるものに心を奪はれがちなものである。さて、肉體をそこなふよりも、精神をそこなふ方が、人に害を及ぼすことが甚しい。病氣になるのも、多くは精神的な方面から來るので、外部から來る病氣は少いのである。例へば、藥をのんで汗を出さうとするに、中中汗が出ないこともあるが、一度、心に恥ぢたり恐れたりすることがあれば、必ず汗を出す、これは精神の作用であるといふことを知り得る。凌雲觀の高臺の

○藥を飲みて　文選の嵇康の養生論に「夫れ藥を服して汗を求むる時は、或は獲ざるあり。而も愧づる情一度集る時は渙然として流離す」とある。

○凌雲の額　魏の明帝が未だ書かないのに、額を釘附けにしてしまつたので、光祿太夫韋誕といふ人は、頗る書が上手であつた故、凌雲觀といふ二十五丈もある高い其の高樓の額を書くために、籠にのせられて引上げられて、その額の文字を書いたが、書き終へて、無事に地上におりた時には髮も鬚も白く變じてしまつた。それで子孫に書法を學ばせなかつたといふ話がある。

○必ず汗を流す　史記、陳丞相世家に「周勃、對ふ

額を書くために、一時の間に白髮の人となつた例もないことではない。

【摘解】 ○虛妄―虛は事實でないこと。妄は迷。實體のあるものでなく、心の迷から生ずる假の現象○實有の相―實際ある姿。眼前に見える樣子○著す―深く心をよせる○身―肉體をいふ○心―精神をいふ○人―肉體精神をひつくるめていふ人間○そこなふ―害すること○外より來る―この「外」は「心」に對していつた語。肉體的な方面から受ける病氣○汗を求むる―汗を出さうとする○しるし―驗。救果○白頭―白髮○ためし―實例。

(第百三十段) 物にあらそはず、己を枉げて人にしたがひ、我が身を後にして人を先にするにはしかず。

萬の遊にも、勝負をこのむ人は、勝ちて興あらんためなり。おのれが藝のまさりたる事をよろこぶ。されば、まけて興なく覺ゆべき事、又しられたり。我負けて人をよろこばしめんと思はば、更にあそびの興なかるべし。人にほいなくおもはせてわが心をなぐさまん事、德にそむけり。むつまる能はず、汗出でて背を沾す」

後漢書、伏皇后紀に「(曹)操、出でて左右を顧みる、汗流れて背に浹し」

○著 ヂャクとよむ。貪(頓)著はトンヂャク、執著はシフヂャク。

【參考】

○身を後にす 論語、雍也篇に「仁者は、己れ立たんと欲して人を立て、己れ達せんと欲して人を達す」老子に「民に立たんと欲せば、必ず先づ身を以て之を後にす」とある。

○しかず 「ガヨイ」の意味。「甲は乙に如かず」は「甲より乙がよい」の意である。「しく」は「若」「如」と書く。

じき中にたはぶるるも、人をはかりあざむきて、おのれが智のまさりたる事を興とす。是又禮にあらず。されば、はじめ興宴よりおこりて、ながき恨を結ぶたぐひ多し。これみな、あらそひをこのむ失なり。

【口譯】 すべて、此の世の中は、人と物事を爭はず、自分の主張を枉げて他人に從ひ、我が身を後まはしにして、他人を先にし其の人の都合のよい樣にするのに越したことはない。

いろいろの遊びごとにも、勝負事を好む人は、勝つて愉快を感じようといふためにするのである。自分の藝が他人より勝つてゐることを喜ぶ、であるからして、負ければつまらなく感ずることも、從つて想像される。自分が負けて、相手を喜ばせようと思つたのでは、遊びの面白みといふものは一向になくなつてしまふだらう。他人につまらなく思はせて、自分の心を樂しませるといふ事は、既に德に背いてゐる。親しい仲で遊び戲れるにも、人をだまして、自分の智慧の勝れてゐることを喜ぶ者があるが、これも亦禮儀に適つてゐない。であるからして、その初めは、遊樂酒宴より事が起り、長い間解けざる遺恨を結ぶやうな例が多

○物に爭はず 論語、八佾第三に「子曰く、君子は爭ふ所無し。必ずとならば射か。揖讓して升り、下りて飲む。其の爭や君子なり」とある。爭は此の態度がよろしい。スポーツマンシップを重んじなければならぬ。必ず勝負ばかりを目的としたのでは弊害がある。又、論語、八佾第三に「子曰く、射は皮を主とせず、力を爲すに科を同じくせず。古の道なり」ともある。此の意味で勝負を爭ふべきである。それを利害に目的をおいて考へたならば、それは百害を生ずる。

○己を枉げて人に從ひ 論語、雍也に「夫れ仁者は己立たんと欲して、人を立て、己達せんと欲して人を達す」とある。それ

い。これらは、皆爭を好むことより起る過ちである。

【摘解】 ○物―人物といふ如き「物」で、「人」の意○枉げて―屈して。主張をまげて○しかず―若かず。それに越したことはない○萬の遊―「遊」は遊びごと○興あらん―面白みを感じようとすること○又しられたり―それも想像できる○ほいなく―本意なく。不本意の思をさせる。つまらなく感じさせる○なぐさまん事―心を慰めようとすることはの意○德―ここでは人の道とか人道とかいふほどの意○たはぶるるも―たはむれるのも。戯れる○はかりあざむき―謀り欺く。だますこと○禮―前の「德」と同じことを、ただ語を變へていつたのである○興宴―遊興酒宴。宴會などの席上、一寸した笑談が元で、遺恨を結ぶことあるをいつた。

人に勝らん事を思はば、ただ學問して、其の智を人に勝らんと思ふべし。道をまなぶとならば、善に伐らず、ともがらにあらそふべからずといふ事を知るべき故なり。大きなる職をも辭し、利をもすつるは、ただ學問の力なり。

【口譯】 で、人に勝らうと思ふならば、ただ學問して、その學問の上の知識に於て人に勝らうと思ふべきである。かりにも道を學ばうといふの等に思ひよせたのであらうと思ふ。

○しかず 「……の方がよい」の意。即ち「甲は乙に若かず」の如き文にあつては「は」は「ヨリ」「に若かず」は「……の方がよい」の意となつて「甲ヨリ、乙ノ方ガヨイ」の意となる。

【參考】

○善に伐らず 論語、公冶長篇に「顏淵曰く、願くは善に伐る事勿れ、勞を施す事無かれ」とある。

○道をまなぶ 貝原益軒、嘗て東に居り、將に西に歸らんとし、路を海上に取る。同船數人、名姓相知らず雜然として相向ひ、喋喋として相語る。中に一少年あり。亢類、經を談ず、旁人無きが若し。益軒喑として言無し。能無き者の若し。既にして船、岸に達するに及び各姓名鄕里を告ぐ。少年始めて益軒たるを知り、恧然とし相容れず遂に其の名を陳べず鼠竄して去る。（先哲叢談）

は、自分の善行を人に自慢せず、同僚と爭つてはならぬといふ事を辨へんがためである。場合によつては、重要な官職をも辭し、名利をも捨てることのできるのは、ただ一途に學問の力によるのである。

【摘解】 ○人―他人○智を人に勝らんと思ふべし―文法的にいへば「智を人に勝らしめんと思ふべし」とあるべきである○善に伐らず―善い行をしてもそれを自慢しないことをいふ○ともがら―傍輩。同僚。仲間○べからずといふ事を知るべき故なり―善に伐らず、傍輩に爭ふべからずといふ事を辨へ知るべき故に、道を學ぶのであるの意○大きなる職―立派な官職についてゐてもそれが道に外れたことであつた場合之を辭するといふ意味を含んでゐる。下の「利をも捨つる」も同じ。それらを辨へ知るのは學問の力であるといふ意。

（第百三十一段） まづしき者は財をもて禮とし、老いたる者は力をもて禮とす。おのが分をしりて、及ばざる時は、速にやむを智といふべし。ゆるさざらんは人のあやまりなり。分をしらずして、しひてはげむはおのれが誤なり。まづしくて分をしらざればぬすみ、力おとろへて分をしらざれば病をうく。

【參考】

○財をもて禮とし云云 これは曲禮に、「貧者は貨財を以て禮と爲さず、老者は筋力を以て禮と爲さず」とあるのを轉用したのである。

○財 タカラ。

貝はタカラ（貨幣）であつて支那上古は貝を貨幣

【口譯】 貧乏なものは財寶を贈るのを以て禮となし、年老いたものは人のために筋骨を勞するを以て禮とする。けれども、これは誤つた考へ方である。自分の身の程を承知して、それが、とても自分の力に及ばない時には、早く止めるのが賢いといふべきである。早く止めようとするのに、それを承諾しないならば、それは、その承諾しない方の人が間違つてゐるのである。又、自分の身の程を承知しないで、無理に力め勵むやうなのは、その人自身が間違つてゐるのである。自れ貧しきにも係らず、その身の程を知らなければ、遂には其の願を滿足しようとして遂に盜みをはたらくやうになり、自れ老衰して力無きにも係らず、その身の程を知らなければ、老人の冷水で遂には病氣になる。

【摘解】 ○財(タカラ)―財寶。財貨○禮とし―他人に對して禮をつくすことだと思ふこと○力をもて―老人は筋骨に力がなくなつてゐる。それでゐて、ともすると、老人は他人のために、肉體を驅使したがるものである事をいふ○及ばざる時―自分の力がその事に及ばない、即ち、その事が自分の力以上である時の意○やむ―止めてしまふ○智―智慧あること○ゆるさざらん―止めようと思ふのにそれを承諾しないで、文句をいふのはの意○しひてはげむ―無理に一所懸命それを勸め勵むの意○ぬすみ―盜をする。財寶も持たぬのに、財寶の點であくまで援助しようとすれば、遂には、その財寶の出所がないので盜をするといふのである○病をうく―病氣にかかる。

とした。史記の平準書に「農工商、交易の路通じ、龜貝金錢刀布の幣起る」とある。故に貝の字を伴ふ文字は貨幣の意がある。

貢　財　貨　貪
販　貧　貽　貴
賞　貰　貸　貯
買　費　貿　賄
賈　資　賦　貨
賂　賕　賂　賂
賒　賜　賈　賞
賤　賣　賠　賦
賚　賭　購　贅
贋　贈　贐　贖

などは、皆タカラ・金錢等に關係を有する字であることが知られるのである。

（第百三十七段） 花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、垂れこめて春の行方知らぬも猶哀れに情深し。咲きぬべき程の梢、散り凋れたる庭などこそ見所多けれ。歌の詞書にも「花見にまかれりけるに、早く散り過ぎにければ」とも「障る事ありて、まからで」なども書けるは、「花を見て」と云へるに劣れる事かは、花の散り、月の傾くを慕ふ習ひはさる事なれど、殊に頑なる人ぞ「此の枝彼の枝散りにけり。今は見所なし」など云ふめる。

【口譯】 花は滿開で、月はくもりなく明らか、即ち兩者完全といふ時ばかりをよい見ものとし見るべきものでは無い。雨降りでその雨に對し、見えぬ月を見たいと慕ひ、又、病氣かなどになつてゐて、外出もせず、春花がどんなになつたかといふことも知らないで居るのも、其の不完全がまた興趣の深いものである。たしかにもう咲きさうになつてゐる程合の花咲く木の梢、又、落花ししぼんだ不完全の庭園などは誠に其の不完全な部で見るねうちが多いものである。歌の詞書(コトバガキ)を見ても「花を見に行

【參考】
○「見るものかは」「劣れる事かは」。「かは」は反語「――であるか、否、さうではない」の意。
○「咲きぬべき程の梢(コズエ)」もう間もなく、たしかに咲きさうな、花の木の梢。
○云ふめる 「める」は推量助動詞「らしい」の意。
○愛好の風流心から見ると、完全なものよりも、不完全なところに趣があるといふ大趣旨で書いた章である。
○頑(カタクナ)一、頑固。片意地。二、愚かで事の道理のわからずや。三、無風流。卑しなどの諸意がある。ここは三の意。
○たれとめて 古今集に「垂れ籠めて春の行方(ユクヘ)も知らぬまに待ちし櫻もうつろひにけり」

つた所が、最早落花し過ぎた後であつたから何何であつた」とか、また「故障が出來て、遂に花見には行かないで、何何した」など「見ない」と書いてあるのは、「花を見て何何した」と書いてあるのに劣つた事ではない（かういふ風に不完全な方が興趣がある）花がもう散つてしまひ、月が西山に入りかけるのを惜しく思つて花や月を慕ふ心持は、それはご尤も至極とは私も思はれるが、特に無風流な人は、「もう此の枝の花も、彼の枝の花も、散つた、かうなつては、花を見る價値はない」などと言つてゐるやうだ（それは不完全に美を見出すといふ心の無い人で私は賛成が出來ない）

【摘解】 ○花は盛りに―の「に」は「にして」の意で、「花は眞盛り」であり、又…：の意○月は隈無し―月がくもりを受けては居ないで、其の光が照り輝いてゐる樣○見るものかは―見るものとして賞翫すべきものと限るべきものか、否さうではないといふ反語○雨にむかひて月を戀ひ―雨天の時に向ひ合つて、月が無いのをしたひ○垂れ籠め―病氣などで、室の戸障子や幕などを垂れて風の入らない樣にし、自分は其の内に入りこんでゐること○春の行方―春の花が、どう日日變つて行くかといふ工合。「行方」とは「變化の樣」○なほあはれに情深し―でも矢張り、ああと心にしみて興趣が多いの意。「あはれ」は悲しむべき哀ではなく、興趣を感ずる事。情も興趣の意○咲きぬべき―たしかに咲きさうな○見所―見るべきねうち○歌の詞書○詞書 前歌の前に、「心地そこなひて、わづらひける時、風に當らじとて、おろし籠めてのみ侍りける間に、折れる櫻の散り方になれりけるを見て詠める」とある如きをいふ。

○不完全を美とすること

兼好の趣味らしい。徒然草第八十二段にも、「うすものの表紙は、とく損ずるがわびしき」と人のいひしに、頓阿が「うすものの上下はづれ、螺鈿の軸は貝落ちて後こそいみじけれ」と申し侍りしこそ、心まさりて覺えしか。一部とある草子などの、同じやうにもあらぬを見にくしといへど、弘融僧都が「物を必ず一具に整へんとするは、拙き者のする事なり。不具なるこそよけれ」といひしも、いみじくおぼえしなり。すべて何も皆、事の整ほりたるは惡しき事なり。し殘したるを、偖打置きたるは面白くいをのぶるわざなり」

―歌の前につけた端書。「題」ではなく、もつと長い説明の文である○まからで―花見に行かないで○劣れる事かは―負けてゐる事であらうか、否、さうではない（兼好の不完全中に美を見る心持でいふ）○習ひ―人人のしてゐる習慣○然る事―尤もなこと。賛成である○頑なる人―無風流な人○此の枝彼の枝散りにけり―此の枝の花、彼の枝の花が、もう散つてしまつた。

萬の事も始め終りこそをかしけれ。望月の隈なきを千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるがいと心深う青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うち時雨れたる村雲隱れの程、又無くあはれなり。椎柴・白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ身にしみて、心あらん友もがなと都戀しう覺ゆれ。

【口譯】 凡ての事も、眞最中の盛りといふ所ではなく、それに比しては不完全といふべき始めとか終りとかいふ場合が興趣のあるものである。例へば完全なる、くもりの部分も無い十五夜の滿月を、其の滿月が千里の遠空にあつて、其の途中には月を遮る雲や森等もなく目路遙かに完全

【參考】 ○望月の 隈無きを「隈無き望月を」の意。○またなくあはれなり これは、(一)曉近くなつて待ち出でたるがいと心深う青みたるやうにて、(二)深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、(三)うちしぐれたる村雲隱れの程、の三條をまとめたのである。○始め「萬の事も始め終りこそをかしけれ」の次に少少文を略した。

に見えるそれよりも、(一)月の出が遲くて夜明け近くなつて漸く我れ我れが待つ甲斐あつて其の月が中空に出、其の月が甚だ我れ我れの心に深くしみこむやうに凄い青色で照り、(二)又深山の杉の木どもの梢にあらはれて、木の間越しに輝く光や、(三)一寸時雨が降つた後のむら雲に月が隱れてゐて見えない時分。これらの不完全の月が、又となく興趣のあるものである。椎の木の叢立や白樫などが、濡れたやうな色つやをしてゐる葉の上に、月光がきらきらと光り輝いてゐるのは身にしみて感ぜられ、風雅心のあるわけのわかる友が居てくれればよいがなあと、此の片田舍にゐては、風雅心のある友の居る京都の地がなつかしく感ずる。

【摘解】 ○望月―十五夜の月○隈なき―くもりがない○千里―千里。遠く○待ち出づ―待つてゐた所、月が出た○心深う―興趣深し。身にしむ○青みたるやう―有明月が青みがかつて見えること○深き山の杉の梢に見えたる木の間の影―深い山の杉木立の梢に出てゐる月が、目路に有る木の間を通して我れ我れに、不完全になつて見え來る光○うち時雨れたる村雲隱れ―一寸時雨が降つて、起つてゐる群雲の内に隱れて見えなくなつた月○椎柴―椎の木の叢生してゐること○白樫―木の名。

凡て月花をば然のみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨の中ながらも思へるこそいと頼もしう

○望月云云（陰暦）
十四日月　小望月・幾望
十五日月　滿月・望月・三五月・中秋月
十六日月　既望・十六夜
十七日月　立待月
十八日月　居待月
十九日月　寝待月
○一月　孟春
二月　仲春
三月　季春・暮春
四月　孟夏・首夏
五月　仲夏
六月　季夏
七月　孟秋・新秋
八月　仲秋
九月　季秋・晩秋
十月　孟冬・初冬・小春
十一月　仲冬
十二月　季冬・臘月・極月

【參考】
○もて興ず　興じつつあるの意。

をかしけれ。よき人は偏に好ける樣にも見えず、興ずる樣も等閑なり。片田舍の人こそ色濃く萬はもて興ずれ。花のもとにはねぢ寄り立寄り、あから目もせず守りて、酒飲み連歌して、果は大きなる枝、心無く折り取りぬ、泉に手足さし浸して、雪にはおり立ちて跡つけなど、萬の物餘所ながら見る事なし。

【口譯】 凡て月や花は、そんなに目で見るべきものでない（心で翫賞すべきものである）即ち春においては、家から出でないで居ても、又月の夜は、觀月に行かないで閨の中に居ながら、如何と思つてゐることが誠に頼もしく面白いことである。一體、上品な人は、何事も、ひどく其の物ばかりを好んでゐるといふ風には、わきの人には見えず又其の事を興ずる樣もいい加減の樣に見える。然るに片よつたごくの田舍の無風流人は誠にしつこく萬事興じつつある。花觀ならば、花の下にねぢ寄り立寄つて憑どく、わき見もしないで見守り、花下で飲酒をし、連歌をし、遂には大きな花の枝を無風流にも慥かに折り取る、泉には綺麗にしてお

○折り取りぬ　この「ぬ」は完了の意ではなくて、「たしかに」折り取るの意。
○春は家を立ち去らで　「春」には「春の花を眺はふには」の意である。
○思へる　思つてゐる。かく四段活用の已然形の下に「リ」といふ完了詞が附く時は「テヰル」といふ進行形現在をあらはすことが多い。
○連歌の一例　日本武尊の「新治筑波を過ぎて幾夜かねつる」といひたるに對して、傍に居た火焚きの老翁が、「日日並べて夜には九夜日には十日を」といひたる如き、又、義家の「衣のたては綻びにけり」といつたのに、阿倍貞任の「年をへし絲の亂の苦

かうとはせずに手足をつけこみ、雪はそのまま眺めるべきものであるのに、下り立つて足跡を附けるなどのことをして、物事を萬事につけて間接的に（しつこくは無く）見ておくなどの事はない（卽ち田舍人は惡どく、都人のやうに淡泊にする事は無い物だ）。

【摘解】 ○然のみ○かは―さうであらうか、否、さうではない○圃○等閑なり―しつこくなく、淡泊だ○色濃く―しつこく○あから日―わき見○連歌―古くは短歌一首の上下二句を二人にて詠んだのであるが、後には上の句と下の句とを交る交る連ね詠んで一篇をなすに至つた。それで二十韻・五十韻・百韻より多きは千句・萬句等も連ねたのがある。詠み人も二人又は數人のことがある。

さやうの人の祭見し樣いと珍らかなりき。「見事いと遲し。其の程は棧敷不用なり」とて、奥なる屋にて、酒飲み物食ひ、圍碁・双六など遊びて、棧敷には人を置きたれば、「渡り候」と云ふ時に、各肝潰るるやうに爭ひ走り上りて、落ちぬべきまで簾張り出でて、押し合ひつつ一事も見漏らさじと守りて、とあり斯かりと物毎に言ひて、渡り過ぎぬれしさに」とつけた如き、又埴鉋の源頼朝の「橋本の君に何をか渡すべき」といふに梶原の「只柚山のくれであらばや」といつた如きもの。

【參考】
○奥なる屋　表通りに棧敷はあり、奥座敷で飲み食ひをして待つてゐる。
○圍碁　碁を打つこと。
○雙六　すごろくとも。
○肝潰る　びつくりすること。
○落ちぬべき　たしかに落ちさうな樣。

ば、「又渡らんまで」と云ひておりぬ、唯、物をのみ見んとするなるべし。都のゆゆしげなるは、眠りていとも見ず。若く末末なるは宮仕に立ち居、人の後ろに候ふは、樣惡しくも及びかからず、わりなく見んとする人も無し。

【口譯】 そんなしつこい片田舍人の賀茂祭を見物した有樣は甚だ珍らしい見ものであつた。卽ち「見物すべき神輿や行列等がまだ甚だ來るのが遲い。其の間は棧敷は必要がない」といつて、自分たちは奥座敷で、酒を飲んだり食物を食つたり、碁を打つたり、双六などをして、棧敷の方には見張り番人を置いてあるから、其の番人が「行列が來ました」と言ひ來た時には、各自がびつくりして我れ先にと其の棧敷に走り上つて、たしかに落ちさうだといふまでに簾を張り出して身體をつき出し、各自が押し合ひ押し合ひして、一事も見のがすまいと見守つて、かうであつた、ああであつたとどの物にも見た事を言ひ合つて、しつこく見、其の行列が通り過ぎてしまふと、「次にまた他の組の行列が通るまでは奥に居よう」と言つて棧敷を下りてしまふ。斯くの如く、只、物物を見ようとばかりしてゐるのであらう（思索や環境を考へようとはしないのであら

○眠りていとも見ず　あつさりとして、目をつぶつて見すごし、さう大して見守ることとはしない。
○双六（スゴロク）又スグロクといふ。骰子とて角の采の一より六までの數目を記したもの二箇を一本の筒に入れて盤上に振り出し、其の數の多少によつて碁子を進めて勝負をなす遊戯である。此の遊戯は印度から起つて支那を經て日本に傳はつた物である。持統天皇に禁制されたことがあるから、此の時の前に傳つてゐた事である。雙六盤は碁盤の如きもので、左右各十二筋に區劃せられ、黑白各十五箇の計三十箇の石とて象牙又は木のコマで、筒は竹又は木で作り、中に犀角又は象牙の骰子二箇を入れ

う）然るに京都のえら相な身分の人は、冷淡さうにして居眠りをして、ゐて、さうよくは見てゐない。都人中の身分低き末末の境遇の者は、主人の御用に立ち働き、祭をしつこく見ようとはせず、又、人の後ろにお附きしてゐる者は、行儀わるく及び腰になつて見ようとはせず、凡て無理矢理に祭を見物しようとするものはない。

【摘解】 ○祭―只、祭といへば京都の賀茂神社の祭。四月中の酉の日に行はれた。今は五月十五日と定めた○珍らか―珍風景○見事―行列等見る物のこと○遅し―まだ來ない○桟敷―高く構へた物見の床。祭を見る爲のさじきである○簾―さじきに掛けておくすだれ○物を見―心中で考へようとはしないで「物」をのみ見ようとする○ゆゆし―えらい○若く末末―年若で身分の末（低い）の者○宮仕に立ちゐ―主人の御用の爲に立ち働いてゐる。宮仕とは朝廷に仕へるだけではなく、主人に仕へることをいふ。

何となく葵懸け渡して艶めかしきに、明け離れぬ程、忍びて寄する車どものゆかしきを、それか彼れかなど思ひ寄すれば、牛飼・下部などの見知れるもあり。をかしくも、きらきらしくも、様様に行き交ふ見るも徒然ならず。暮るる

る。遊び方は、二人が盤を隔てて對坐し、一度づつ筒を取つて盤の上に骰子を振り出し、其の二つの骰子の目だけ味方の石を進め行くのである。それで早く其の石が終つたのが勝ちである。徳川時代に至つて新に佛法雙六・官位雙六などの簡易な方法が出來それで今の如きものになつた。

【参考】
○明け離れぬ　夜が明けきらぬ。
○忍びて寄する車　人目を避けて貴人などは、こつそり見物に來るのである。

程には立ち並べつる車ども、所無く並み居つる人も、何方へ行きつらん、程無く稀になりて、車どものらうがはしさも濟みぬれば、簾・疊も取り拂ひ、目の前に寂しげになり行くこそ、世の例も思ひ知られてあはれなれ。大路見たるこそ祭見たるにてはあれ。

【口譯】 賀茂祭特有の飾りな葵をずつと色色な物にも掛けて、何とはなしに優美である折に、夜明けぬ朝早くからこつそり人目忍びて、見物の爲とて寄せて來る牛馬どもの、誰かと奥ゆかしきによつて、考へて、その人かあの人かなど思つてゐると、中には其の車の牛飼や僕などで見知り越しの者もあつて、ああ、あの人であるとわかる事もある。又、快く見える様な風をし、又華美な風もした人達が色色通行するのを見てゐるのも、又退屈ではない。段段日が暮れる時分には、今まで立ちならんでゐた牛車どもや、場所一杯に並んで見物してゐた人人も、それぞれどちらに歸つて行つたのであらうか、間も無く人少なになつて、牛車も歸つて觀がはしかつたのもすんでしまふと、簾や疊など棧敷の用品も取り去つて、目前間も無く、町内が寂しくなつて行くのが、恰も世も段段知人

○行きかふ見るも徒然ならず　行きかふ（事を）見るのも退屈ではない。
○らうがはし　亂雜・雜沓してゐること。
○世の例　榮枯盛衰がかはる世の例にも當つてゐるさま。
○完了助動詞全部　つ　ぬ　たり　り　の接續の様を本章に選ぶ。

知
ラ リ ル ル レ
ら り り る れ

並
ベ ベ ブ ブ ブ レ
て て つ つ れ る

（居）
キ キ キ キ キ レ ル
て て つ つ れ る

行
カ キ ク ク ケ
て て つ つ つ れ る

が死去して我れには寂しくなる例にも思ひあたつて、ああと心にしむことである。斯く祭の行列ばかり見るのではなくて、大通りの有様が斯く盛衰することを見るのが、それが祭を見たといふ眞意であるのだ。

【摘解】 ○何となく―「蕭懸け渡して」を隔てて「艷かしきに」に接する○艷かし―優美である○ゆかし―奥ゆかしく、知りたいと思ふ○牛飼―牛車の牛を扱ふ者○下部○徒然ならず―夫を見てゐても退屈しのぎになる○何方○らうがはし―亂がはしの音便○大路。

彼の棧敷の前をここら往きかふ人の見知れるが數多あるにて知りぬ、世の人數もさのみ多からぬにこそ。此の人皆失せなん後我が身死ぬべきに定まりたりとも程無く待ちつけぬべし。大きなる器に水を入れて細き孔をあけたらんに、滴ること少しといふとも、怠る間なく漏り行かば、やがて盡きぬべし。都の中に多き人、死なざる日はあるべからず、一日に一人二人のみならんや。鳥部野・舟岡、さらぬ野山

【參考】
○漏り　古くは四段活用としても用ひた。ここはそれである。今は「漏れ」といつて、良行下二段活用として多く用ひる。
○一日に一人二人　少數。
○鳥部野　京都市の東にある火葬場の名。
○舟岡　京都市の北、大德寺の西南の小山の名。墓地・火葬場である。

濟
メムムミ|マ
ぬれ|ぬぬぬにな る
見
ミミミミ|ミ
レルル
たれ|たり|たら

にも、送る數、多かる日はあれど、送らぬ日はなし。されば棺を鬻ぐ者、作りて打ち置く程なし。

【口譯】 彼の棧敷の前を、多く往來する人が、我が見知り越しの人の多くあることで、世の人はそんなに多くは無いといふことがわかつた。此の人人が皆死ぬだらうが其の後に自分が死なねばならぬときまつたことにして見ても、それは間も無く死期を待ち取ることが慥かであらう。例へば大きな器物に水を入れて、小さい孔をあけておいたなら、滴れ出る水は少しづつであつても、引き續き漏れて行くなら、間も無く其の水は無くなるであらう。京都中に人は多いが、死人の無い日はない。それで、人の死ぬのは一日間に一人二人といふ僅かの數であらうか、否、もつと多人數だ。その死人を鳥部野・舟岡、其の他の野にも山にも、死人を火葬にせんとて送葬する數は多くあるが、送葬せぬといふ日は無い。それ故棺桶を賣る者は、棺桶を造つておいてそれが賣れずに、店に置くといふ間はない。

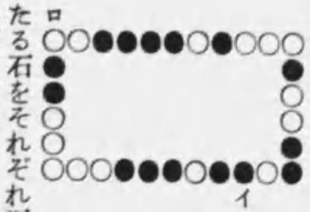
【摘解】 ○ここら―多く。數多○多からぬにこそ―下に「あれ」を略す○失せ―死ぬ○待ちつけぬべし―慥かに待ちつけ死ぬ筈である○器○滴る○あるべからず―ある筈がない○鳥部野○舟岡○さらぬ―さうではない。其の他○棺を鬻ぐ。

○本節中で「ぬ」が三種類ある。即ち、
(一) 打消助動詞「ぬ」
多からヌにこそ
さらヌ野山
送らヌ日はなし
(二) 完了助動詞「ぬ」
數多あるにて知りヌ
待ちつけヌべし
やがて盡きヌべし
(三) 動詞語尾の「ヌ」
我が身死ヌべきに定まりたり
(一) の打消助動詞「ぬ」
ズ　ズ　ヌ　ネ
(二) の完了助動詞「ぬ」
は　ナ　ニ　ヌ　ヌル
ヌレ
(三) 動詞語尾の「ヌ」
は　(死)　ナ　ニ　ヌ
ヌル　ヌレ　である。

若きにもよらず強きにもよらず、思ひがけぬは死期なり。今日まで逝れ來にけるは有り難き不思議なり。暫しも世を長閑には思ひなんや。「ままこ立て」と云ふものを、双六の石にて作りて、立てならべたる程は、取られんこと何れの石とも知らねども、數へ當てて一つを取りぬれば、其の外は逝れぬと見れど、又又數ふれば彼れこれ間拔き行く程に何れも逝れざるに似たり。兵の軍に出づるは、死に近き事を知りて、家をも忘れ身をも忘る。世を背ける草の庵には、靜かに水石を翫びて、之を餘所に聞くと思へる、いと果敢なし。靜かなる山の奥、無常の敵きほひ來らざらんや。其の死に臨めること軍の陣に進めるに同じ。

【口譯】若い者にでも、強いものでもかまはず、思ひ設けぬのにやつて來るのは此の死ぬといふ時である。我れ我れが今日まで死なずに居たのは稀らしいことで、滅多にないことである。さういふわけだから今後自

【參考】
○この段が徒然草の最長篇である。
○ままこ立て　遊戯の一種。双六の石などで白黑各十五箇左の如く並べる（形は圓でも四角でも何形でもよい）



分としては、何時死期が來るか、そんなに呑氣に思つてゐられるものではない、すぐ來るかも知れん。「ままこ立て」といふ遊戯があるが、それはすごろくの石で並べて其の形を作つた時は、取り去られようとしてゐる石は、どの石ともわからないけれども、最初數へて十目に當ててその一つを取り去つてしまへば、其の殘の石はのがれたと見えるが、其の次其の次と幾度も十づつ目の石を取去る樣に數へると、此の石彼の石と番に當る石が出來るその石を間拔いて行く間に、遂にはどの石も皆取去られるのと死期の段段まぬかれないのが似たものである。兵士が戰場に出陣する時には、戰死するにちがひない（結果には戰死しないですむとしても）と覺悟して我が家をも我が身をも、かまはずにをる。然るに、世捨人のいほりでは、死を覺悟もせずして、至極呑氣（靜か）でゐて庭いぢりをして、死の來ることを餘所事で、自分には關係がない事と思つてゐるのは、甚だあてにもならぬことでつまらぬ事である。いくら靜かな山の奥でも、常なき敵即ち死がいそいでやつて來ないものであらうか、來るものである。故に世捨人とても死にかかつてゐる樣は、恰も軍人が戰陣に進んでいつ討死をするかといふ境遇に在るのと同じである。それ故死の問題は誰でも一大事と心得、其の用意をしておかねばならぬ。

つだけ殘る。
○打消助動詞　ズ　ズ　ズ　ヌ　ネ　を本節に見出せば、
若きにもよらズ
強きにもよらズ
思ひがけヌは
何れの石とも知らネども
何れも逝れざ(ズあ)る
來らざ（ズあ）らんや
○完了助動詞　ナ　ニ　ヌ　ヌル　ヌレ　を本節に見出せば、
逝れ來ニけるは
一つを取りヌレば
其の外は逝れヌと見れ
○四段活動詞の已然形につきたる　ラ　リ　リ　ル　レ　といふ完了助動詞を本節に見出せば、
世を背けル草のいほり
之を餘所に聞くと思ヘル
其の死に臨めル事
軍の陣に進めル
○形容動詞の　ナラ　ナリ

【摘解】 ○死期○今日○思ひなんや―「思はんや」の意○双六○遁れぬと見ゆれど此の「ぬ」は「た」○間抜き―間間を飛び飛びに取り去ること○兵の軍○家を忘れ―忘れは氣に掛けないこと○世を背ける草の庵―世捨人の假りの家○水石を翫ぶ―庭の遣水や庭石を樂しむ○餘所○果敢なし。

(第百四十段) 身死して財殘る事は、智者のせざる所なり。よからぬ物たくはへ置きたるもつたなく、よき物は、心をとめけんとはかなし。こちたくおほかる、まして口をし。「我こそえめ」などいふものども有りて、跡に爭ひたる、さまあし。後はたれにと心ざす物あらば、生けらんうちにぞゆづるべき。朝夕なくてかなはざらん物こそあらめ、其の外は何ももたでぞあらまほしき。

【口譯】 自分が死んで後に、財寶が殘るといふやうなことは、智慧ある人のしない事である。ろくでもないものを蓄へ置いたのは、(その人がらさへも)くだらなく思はれ、また立派なものならば、死者が生前から、

ナリ ナル ナレは、長閑ニ 靜カニ 靜カナル 等である。

【參考】
○財―ここでは主として家財道具類或は身のまはりにつける品物などをいつてゐるのである。
○物こそ あらめ 「物こそ『持ちて』あらめ」といふ意。此の形は、國文によくある。「あらめ」は只コソの結びとだけ見ずして「あらめ、されど」の意になる。
○死して 「死」といふ語は漢字「シ」とせば、サ行變格となり、國語「シ」となれば、ナ行變格となる。語根は漢字でも、國語でも「シ」である。

その品に執着を持つてゐただらうと思はれて、氣の毒な感がある。殊に、そんなものが、ことごとく仰山に多いのなどは、一層苦苦しい。「自分が是非貰はう」などといふ人達さへ出て來て、死後に爭ひを始めたのなど、實にみつともないものである。もし、自分の死後誰にやらうなどと考へてゐる物があるならば、自分の生きてゐる内に讓るがよい。朝夕無くてはならない品物は、これは止むを得ないが、その外には、何も所有しないでゐたいものである。

【摘解】 ○身死して―自分の身體が死んで○智者―知識もあり、物の道理も辨へた人○よからぬ物―くだらない物○つたなく―だらしがないこと。ここは、その人の人柄がくだらなく見える意○心をとめけん―生前その持主が大事にしてゐただらう。從つて、死後にも執着が殘つてゐるだらうと○はかなし―つまらない。あぢきない。ここでは氣の毒になるの意○こちたく―こてこてと。仰山に○口をし―にがにがしい。殘念である○我こそえめ―自分こそ、その品物を貰はう○跡―死んだ跡○さまあし―樣惡しで、みつともないこと○物こそあらめ―さういふ品物は、これは勿論必要であるから仕方がなからうが○あらまほし―ありたい。

(第百四十一段) 悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、さうなき武者なり。故郷の人の來りて物語すと

○本節中から動詞を拾へば
死し サ變連用
殘る ラ四連體
せ サ變未然
たくはへ ハ下二連用
置き カ四連用
とめ マ下二連用
え ア下二未然
いふ ハ四連體
有り ラ變連用
爭ひ ハ四連用
心ざす サ四連體
生け カ四已然
ゆづる ラ四終止
かなは ハ四未然
もた タ四未然

【參考】
○悲田院―元、佛教の慈悲の思想から出たもので、

て、「吾妻人こそ、いひつる事はたのまるれ、都の人は、こ
とうけのみよくて、實なし」といひしを、聖、「それはさこ
そ思すらめども、おのれは都に久しく住みて、なれて見侍
るに、人の心おとれりとは思ひ侍らず。なべて心やはらか
に情あるゆゑに、人のいふほどの事、けやけくいなびがた
くて、萬えいひはなたず、心よわくことうけしつ。僞せん
とは思はねど、ともしくかなはぬ人のみあれば、おのづか
らほいとほらぬ事おほかるべし。

【口譯】 悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦の某とかいつて、元來はなら
びなき立派な武者である。或時、故郷の人が來て、種種物語をした折に
「東國人は、一度口に出したことは信用できる。京都の人は、返事ばか
りよくて、眞實がない」といつたのに對して、上人は、「それは、なるほ
ど、さうお考へになるかもしれませんが、私は京都に長い事住んで、親
しく慣れて見ましたが、人の心が劣つてゐるとも思ひません。おしなべ

古くは聖德太子の時代にその企があつた。光明皇后が奈良に建てられたのが正史に見えた最初である。平安朝時代には、施藥院、東西の悲田院の名が見えてゐるから元來は二個所にあつたのであらう。吉野朝頃には賀茂川の西岸に一個所あつた。

○それはさこそおぼすらめど「こそ」が係辭であつて「らめ」が、結辭であるが、ここではコソの結びの爲に已然形の「ラメ」としたのでは無くして、其の次ぎの「ド」と接續する爲に已然形の「ラメ」を用ひた。「ド」は活用語の已然形に接續する。大槻文彥博士の廣日本文典には、

聯構文の、數文聯絡するものは、結を轉ず。とあつて、

「都人、さこそ待つとも、郭公、同じ深山の、友な忘れそ」(新拾遺三)「雪かとぞ、よそに見つれど、櫻花、折りては似たる、色なかりけり」(玉葉二)「郭公、一聲とこそ、思ひしに、待ちえてかはる、我心かな」(續古今十七)「年頃、善く具しつる人人なむ、別れがたく思ひて云云、夜深けぬ」(土佐日記)

「宇多の御門、云云、一の皇子敦仁親王と申しけるぞ、位に即かせたまひけるぞ(ミコ)こそは、醍醐の聖帝と申して、世の中に、天の下めでたきためしに引き奉るなれ」(榮花、月宴)とある。

て、京都の人は、心がやさしく、人情が深いために、他人のいふやうな
ことを、はつきりと斷ることができず、萬事きつぱりと斷言できずに、
心弱く承知してしまふのです。嘘をいはうと思ひませんけれども、元來
貧乏で思ふにまかせぬ人が多いのだから、自然と、自分の思つた如くに
行かぬ事が多いのでせう」といひました。

【摘解】 ○悲田院(ヒデンヰン)―今の養育院のやうなもの。傘好の時代には賀茂川の西畔にあつた○堯蓮上人(ゲウレンシヤウニン)―傳記不明○俗姓(ゾクシヤウ)―在俗時代の姓名○三浦のなにがし―姓は三浦といふことは傘好も知つてゐたが、名ははつきり憶(オボ)えてゐなかつたので某といつたのである○さうなき―雙なき。立派な○故郷の人―上人と同國の人。三浦といふ姓から見ると、相州三浦郡の邊の人であらうか○吾妻人(アヅマビト)―東人。東國人。關東人○いひつる事―吾妻人の言つた事。一旦東國人が口に出した事○たのまるれ―頼まれる。信頼できる○ことうけ―言承。承諾するといふ返事○實(マコト)なし―今いふ「實(ジツ)がない」と同じ。眞實がない○聖(ヒジリ)―上人。德の高い僧の稱。ここは堯蓮上人○思(オボ)す―思ふの敬語○なれて―都の人と親しく交際して○なべて―押しなべて。一般に○情ある―情が深いこと○けやけく―きつぱりと。はつきりと○いなびがたく―否といひがたきこと。斷り切れないこと　いひはなたず―言ひ放たない。はつきりといひ切らない○ことうけしつ―承諾してしまふ。「ことうけ」は受けあふこと○僞(イツハリ)せんと―嘯をつかうといふ意志はないのだがの意○ともしく―乏しく。貧乏であること○かなはぬ人―思ふやうにならない人○ほい―本意。最初思つた本心。

あづま人は、我がかたなれど、げには心の色なく情おくれ、ひとへにすくよかなるものなれば、はじめよりいなといひてやみぬ。にぎはひゆたかなれば、人にはたのまるるぞかし」とことわられ侍りしこそ。このひじり、聲うちゆがみ、あらあらしくて、聖教のこまやかなることわり、いとわきまへずもやと思ひしに、此の一言の後、心にくくなりて、おほかるなかに寺をも住持せらるるは、かくやはらぎたる所有りて、其の益もあるにこそと覺え侍りし。

【口譯】東國人は、自分の同國人でありますけれど、全く心にやさしみがなく、情合に乏しく、ただもう一本調子な者でありますからして、最初から駄目なら駄目と斷つてしまひます。然し東國人は一般に富裕でありますから、一旦賴まれればそれをやり通す力はあるので、從つて人から賴りにされるのでせう」と說明されたので、(自分のこの上人に對する考も變つて)元來、この上人は言葉には訛りがあり、物のいひ方も荒つぽくて、尊い佛敎上の細かな道理など、よく分らないかも知れないと、

【參考】
○とことわられ侍りしこそ。このひじり云云　この文脈は一寸分りにくい。假に次の如く補ふとしよう。
　人にはたのまるるぞかし」とことわられ侍りしこそ（心にくく感ぜられけれ。そもそも）このひじり聲うちゆがみ云云。
○あるにこそと覺え侍りし
　「あるにこそ（あれ）と、覺え侍りき」の意。
○にぎはひ　一、富み足らふ。豐か。新古今、賀に「高き屋に上りて見れば煙立つ民のかまどはにぎはひにけり」二、榮ゆ、繁昌す、にぎやか。宇治拾遺「又あたりには、小家ども多く出で來て、里も賑ひけり」ことは一の意。

これまで思つてゐたのに、この一言を聞いてから後は、何となく奥床しくなつて、坊さんも多い中で、一寺の住職となられるのは、やはり、かういふ穩かな所があつて、自然とさういふ得もあるのだと思つたのであつた。

【摘解】○我がかた―自分の方。自分の鄕里○心の色―心のやさしさ。愛想○情おくれ―情合がない。なさけが薄い○ひとへに―ひたすら○すくよか―無愛想。ものに飾りけがないこと。一本調子○にぎはひゆたか―賑ひ豐か。「賑ふ」は富み足りることと○ことわられ―道理をといて說明すること○聲うちゆがみ―聲に訛があることと○あらあらしく―凶暴といふほどではなく、言葉が荒いのである○聖教（シヤウケウ）―佛敎をいふ○こまやかなることわり―細密な敎理○いとわきまへずもや―まるで辨別してゐないであらう○おほかる中に―僧侶の數も多い中で○住持せらるる―一寺の住職として、その寺を主宰して行かれる○やはらぎたる所―心におだやかな一面があること○其の益（ヤク）―上人におだやかな一面があるので、それが上人に幸ひして、一寺の住職となるやうな利益も生じて來たのであるといふ意。

（第百四十三段） 人の終焉の有りさまのいみじかりし事など、人のかたるを聞くに、ただ、靜かにしてみだれずといはば、心にくかるべきを、おろかなる人は、あやしくことなる相

○ひじり　聖。一、聖人・聖天子といふ如く德の高い意。二、天皇。三、其の道の達人。歌聖・詩聖などいふ。四、高德の僧。五、僧。等の諸意がある。ここは五の意。
○いとわきまへずもやと
　「いとわきまへずもやあらんと」の意。
○心にくくなりて　「心にくし」は「奥ゆかしく思ふ」の意。憎む意ではない。源氏物語、帚木「さてたもたるる女のためも心にくく」

【參考】
○權化（ゴンゲ）―佛が、衆生を濟度（サイド）するために、假りに人間の姿を借りて、此の現世に現れて來た人といふ

をかたりつけ、いひし言葉も、ふるまひも、おのれがこのむかたにほめなすこそ、其の人の日來の本意にもあらずやと覺ゆれ。

此の大事は、權化の人もさだむべからず、博學の士もはかるべからず。おのれたがふ所なくば、人の見聞くにはよるべからず。

【口譯】 人の死に際の樣子が立派であつたことなどを、人が物語るのを聞くのに、ただ、靜かであつて何の取亂したところもなかつたといへば、それで十分奥床しく感ずる筈であるのに、愚かな人は、何か不思議な變つた樣子をつけ加へて話し、死んだ人の言つた言葉とか動作とかも、自分の好きな方に引きまげて褒めあげるのであるが、そんなことは、その故人の常日頃の本意でもないのだらうと思はれるものである。一體この死といふ一大事は、たとへ、權化の人でも前以てどうと決めておくことはできないものであり、如何に物識りの學者でも豫め推測することはできないものである。つまるところ、自分の心さへ正しくて道に

意。「權」は「かりに」、「化」は形を變へて出ること。

○心にくかるべきを　此の「を」は活用語の連體形の下につくもので、なほ「に」「が」といふのもある。即ち、甲乙の語句を連絡して、其の事柄の裏返る意、又は、案外に思ふ時にいふ語である。

「夏の夜は、まだよひながら明けぬるヲ雲のいづこに月宿るらむ」（古今集）、「つひに行く道とはかねて聞きしかど、きのふ今日とは思はざりしヲ」（古今集）の如きである。「明けぬるヲさるヲ」「思はざりしヲ、さるヲ」と解せばよくわかる。

○あらずや　この「ヤ」は感動の意であつて、マア死者の本意のものではない。と思はれるといふ意

違ふところないならば、他人の見たり聞いたりした評判などといふものはどうでもよいものであると思ふ。

【摘解】 ○終焉―死ぬまぎは。臨終○いみじかりし事―非常に立派であつたこと○人―最初の「人」は、死んで行く人。ここの「人」は、その「死んで行く人」の終焉のことを語る別な人○靜かにしてみだれず―靜かにして何等取亂したことがない○心にくかるべき―死んだ人に對して、此方が「奥床しい」といふ感じを抱かせられる筈である○おろかなる人―愚な人。下愚の人○あやしく―不思議な。何か常人と變つた不思議なことなどが起る意○ことなる相―普通とは違つた姿。「相」は樣子。有樣○かたりつけ―結びつけて話す。附け加へて話す○このむかたにほめなす―自分が考へて立派な（臨終だ）と思つてゐる事柄に引きつけて褒めたたへる意○日來―常平生。いつも。ふだん○本意―本心○大事―死といふ人生の一大事○權化―非常に偉い坊さんなど○さだむ―下の「はかるべからず」と對になつた言葉。如何に偉い人でも學者でも、死といふ一大事のことに就いては、豫め、推測豫定しておけるものではないことをいふ○博學の士―學問を博く修めた人○たがふ所なくば―自分の心が正しくて道に外れたことなく、心中何等やましいことがないならばの意○人の見聞く―他人が見たり聞いたりして立てる評判。

（第百五十段） 能をつかんとする人、よくせざらんほどは、なまじひに人にしられじ。うちうちよく習ひえてさし出で

である。

○さだむべからず　はかるべからず　よるべからず　右の如く短かい文章中にべからずといふ語法を三度も用ひて強く言ひあらはさうとしてゐる。この「べからず」は「べき筋のものではない」の意である。「してはならない」といふ禁止の意ではないのである。

○相　サウ。すがた。人相とか家相とかは皆此の「すがた」の意である。

○日來　ヒゴロ。「來」（ゴロ）の意は「長い間」である。日頃・月頃・年頃など凡て此の意味である。

【參考】

○堅固―この言葉は次のやうに用ひられてゐた。「堅

たらんこそ、いと心にくからめと、常にいふめれど、かくいふ人、一藝もならひ得ることなし。いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、毀りわらはるるにも恥ぢず、つれなく過ぎて嗜む人、天性其の骨なけれども、道になづまず、みだりにせずして年を送れば、堪能のたしなまざるよりは、終に上手の位にいたり、徳たけ、人にゆるされて、ならびなき名をうる事なり。

【口譯】 何にまれ藝能を習ひ憶へようといふ人が、「まだ上手にできない間は、なまじつか、他人に（自分がこれこれのことを習つてゐるといふことを）知られたくない。こつそりと習つて、さてすつかり物にしてから、その上で他人の目の前に出るやうにしたら、いかにも奥床しく思はれるだらう」と、まあ、こんな風に言ふやうであるが、かういふやうなことをいつてゐる人は、結局は何一つの藝能も習ひ得ることがない。これに反して、未だ一向に未熟の内から、その道の名人上手の中にも交つて、他人から（下手だ未熟だと）悪口いはれ、嘲笑されるのにも、おめ

固の田舎人にて、仔細を知らず無禮をあらはし」（字治拾遺集）或は、「堅固のみなしどなりけれども」（源平盛衰記）「まつたく」のとか「ひたむきの」とかの意である。

○かたほ　片帆の意。眞帆に對する語。物が完全に整つてゐないで不十分であることに用ひる。

○堪能のたしなまざるよりは云云　この一節の意味は要するに、その道の天才といはれる人でも、修業を怠れば、凡才で熱心に修業する人には敗けてしまふ。何事によらず藝能で上手といはれるやうになるには、一にも二にも努力であるといふにある。

○天才といへども、必ず刻苦精勵の努力を要するものであるといふ本節説く

ず憶せず、平氣な顔で過しつつ、ひたすらその藝能を勉強する人は、たとへその人が生まれつき、その天分に惠まれてゐないとしたとても、その藝能の道に拘泥して滯ることなく、またその道をおろそかにすることなくして、年月を經る事ゆゑ、器用であるが勉強しない人間よりは、かへつて進歩して、終には名人・上手の域にも到達してその藝能の道での德も高くなり、他人からも名人として許されて、雙ぶもののない名人といふ名を得るものである。

【摘解】 ○能―藝能。音樂でも、美術でも、又學問でも何でも、或一つの道○つかんとする―今日の言葉でいふ「つけようとする」に當る○よくせざらんほど―まだ十分にできない間○なまじひに―なまじつか○人―他人○うちうち―内内。こつそり○習ひえてさし出でたらんこそ―習つて、完全に體得して、さうして、それから後に他人の前に、自分の藝を持出したならばの意○心にくからめ―心にくいであらうの意。他人から奥床しく思はれるだらうの意○常にいふめれど―いつも、さういふ風にいつてゐるらしいけれども○一藝―一つの藝能○堅固―この時代の特別な言葉づかひの一つ。「まるで」「一向に」の意○かたほ―未熟。不熟練○なるより―未だ一向に未熟である間。からの意○上手―今日いふ名人と同じ。江戸時代に名人上手と並べて用ひた「上手」は、名人に亞ぐ技を持つ人の意であるが、ここはその意味の上手ではない。むしろ、その意味でいふ「名人」に當る○まじり―立ちまじつて○毀り―悪口をいふこと○わらはるる―嘲り笑はれる○恥ぢず―自分で恥ぢとしない○

如き實例は澤山あるが、今朝比奈知泉の「頼山陽」論の一節を抄出せば次の如くである。

余曾て江木鰐水の作りたる山陽先生行狀を讀み、その「常曰「謂ニ我才子一未レ悉レ我者也。謂ニ我能刻苦一者、眞知レ我」」といふに至り、竊にその實を失へるにあらざるかを訝りしが、後かの「前兵兒謠」並に「蒙古來」の原稿を見るに及び、その苦心經營一句も苟もせざりし實跡を審にし、かつその古賀穀堂を訪ひ、初、その千言立ちどころに成る敏才に驚きしが、數月を隔てて再び訪ひたる時、その文稿の依然として改刪する所なかりしを見て玆に興し易きのみとの念を起したりしといふ逸事を聞き、その意匠慘澹、勉

つれなく―情なく。平氣で、他人から何といはれようが意に介せずに過すこと○過ぎて―過すこと○嗜む―勉強する○天性―生まれつき。この「天性其の骨なけれども」は間に挿入された句○骨―器量とか才能とか○道になづまず―「なづむ」は拘泥すること。その道に捉はれて、滯つてゐること○みだりにせず―おろそかにしない。その道を尊重して、愼重な態度で勉強すること○堪能の―堪能な人。「堪能」は上手。その道について、すぐれた天分もあり上手な人の意○たしなまざる―天分もある上手な人でありながら、その道のことをすこしも勉強しない人をいふ。努力しない天才よりは、努力する凡人の方が偉くなるといふのである○德たけ―その藝能の道に於ける藝の德が十分に築きあげられること○人にゆるされ―他人、世間の人から上手である、名人であると公認されること○雙なき―二人とない。最上の。

天下の物の上手といへども、始は不堪のきこえもあり、無下の瑕瑾もありき。されども其の人、道のおきてただしく、是をおもくして放埒せざれば、世のはかせにて、萬人の師となる事、諸道かはるべからず。

【口譯】 天下に一道の名人といはれる人であつても、その初めは、下手だといふ評判もあり、ひどい缺點もあつたのである。けれどもその人は、勵刻苦の勞を厭はざる忍耐あるを明認し、坐ろに景慕の情を催したり。けだし創意の才はかならず刻苦の力と相俟ちて後始めて、絢爛の華彩を發すべし。

○鯉と兎の騙けくらべなどと童話にて、よく知つて居ることであるが、實際さうである。

【參考】

○萬人の師となる事、諸道かはるべからず この句は「萬人の師となりたるなり。この理諸道かはるべからず」といふやうに語を補つて解するがよい。

○復呉下の阿蒙にあらず 呉志に「孫權、呂蒙及び蔣欽に謂ひて曰く、卿今塗に當り事を掌る、宜しく學問して以て自ら開益すべしと。蒙始めて學に就く。魯肅蒙に遇ひて言議し、蒙が背を拊つて曰く、吾謂へらく大弟但武略あるのみと、今は學識英博、復呉下の阿蒙にあらずと。蒙曰く、士別れて三日なれば、即ち當に目を刮して相待つべし」

○「晴信(武田信玄)喜詩賦。板垣信形稱病。潛延一僧善詩者於家。學詩數旬乃出侍宴。請賦詩。晴信不信。强請而可。立就五題。晴信大喜曰。汝何遽能如此。(日本外史)」

その道の規則を正しく守り、その道を重んじて、勝手なことをしなかつたからして、遂には、斯道の大家にして、世間の多くの人の師表となることができたのである。かういふやうなことは、凡ての藝能の道いづれも同じであつて變ることはないのである。

【摘解】 ○天下の物の上手―世間でのその道の名人といふ意。「物」はここでは藝能の或一道をいふ○不堪―堪能でないこと。即ち、下手。未熟○きこえ―世の聞え。評判○無下―この上ない。惡いことについていつてゐるのであるから、「この下ない」のであるが、今では、かかる場合にも、此の上なく下手であるなどといふ。甚だしい○瑕瑾―玉等にある傷。ここでは缺點。短所○道のおきて―その道のさだめ。規則○ただしく―規則を大事にして、正しく守ること○おもくして―「これ」は上の「道のおきて」を受ける。その道の規則を尊重すること○放埒―「埒」は馬場にめぐらしてある柵をいふ。その埒を取りはづして、馬を氣ままに走らせるといふ意。轉じて、勝手氣ままの行爲をすること○世のはかせ、―世の博士。「世の」は前の「天下の物の上手」の「天下の」と同じ使ひ方。世間での博士。「博士」とはここでは大家の意○萬人の師―多くの人の先生。萬人の師表○諸道―もろもろの道。藝能の凡ての道。

(第百五十七段) 筆を取れば物書かれ、樂器を取れば音を立てんと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、賽を取れば攤打たん事

【參考】

○攤 日本にてはダと訓む。本音はタンである。

を思ふ。心は必ず事に觸れて來る。假にも不善の戯を爲すべからず。あからさまに聖教の一句を見れば何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非を改むる事もあり。假に今この文をひろげざらましかば、此の事を知らんや。これ則ち觸るる所の益なり。

【口譯】人といふ者はつい環境に誘はれるものである。例へば、筆を持つと、つい何か書いて見ようと思ふ氣になつて書くやうになるし、樂器を手に持つと、つい音を出して見ようといふ氣になる。同樣に、盃を手に持てばつい酒を飲みたいと思ひ、サイコロを手に持つとつい雙六をして見ようと思ふものである。人の心といふものは必ず何か環境の事柄にさはつて其の氣が出でくるものである。それ故假りそめにも不善なたはむれを爲してはならぬ。それによつて心が不善になる。物につれて其の氣になる。又一例をいへば、一寸何かの氣まぐれに佛經でも見ると一句にさはる。その一句にさそはれて其の文句の前や後の文句をもつい見る氣になる。そして其の句によつて反省をして、忽ち積年の非行を改良

本來支那では、錢を兩掌の内に持つて、よく念じて投げうち、其のナメとかカタとかの表れ方のどちらかで、勝ち負けを定める遊戯であつて、擲はまき散らす意の字である。日本では雙六のことをいふ。儺(オニヤラヒ。卽ち追儺)とはちがふ。

○古は婦人子を妊めば、寢るに側せず、坐するに邊せず、立つに躁せず、邪味を食はず、割正しからずんば食せず、席正しからずんば坐せず、目に邪色を見ず、耳に淫聲を聽かず、夜は則ち瞽者をして詩を誦し、正事を道はしむ。此くの如んば則ち生るる子、形容端正にして才人に過ぎん(小學)

○太任は文王の母、其の文王を娠めるに及んで、目、

することも出て來る事もある。今思ふに、若し此の經文をつい開いて見ないなら、其の今までの非行を反省する事に氣がつかないで遂に改めることも無いであらうといふ事になる。これはつい環境の事柄によつて其の氣が出た事でこれは利益のあつた方面である。

【摘解】○物書かれ―「れ」は自發の助動詞で、つい、自然に其の氣になるの意○賽―さいころ○擲―雙六○あからさま―一寸。かりそめ。ここは「明ら樣」の意ではない○聖教―お經。ここでは、支那の聖人の書物卽ち經書の意ではない○前後の文○卒爾―突然。急に○假に今この文―この文はフミとよむ○ひろげざらましかば―開いて見ないなら。「ましか」は「ん」の意。

心更に起らずとも、佛前にありて數珠を取り經を取らば、怠るうちにも善業自ら修せられ、散亂の心ながらも繩床に坐せば、覺えずして禪定なるべし。事理もとより二つならず、外相若し背かざれば內證必ず熟す。强ひて不信といふべからず。仰ぎて之を尊むべし。

【口譯】自分の心では、ちつとも信仰の心が起らないでも、佛像の前に

惡色を視ず、耳、淫聲を聽かず、口、敎言を出さず。文王を生みて明聖。太任之に敎ふるに一を以てせば百を識り、卒に周の宗と爲る。君子、太任、胎敎を能くすることを爲すと謂へり。(小學)

【參考】

○善業　よい報い。業とは、身・口・意でする善惡の行ひのことをいふ。此の行ひは次の世に生れかはつた時に善惡の報いを生ずるものと佛敎ではいつてゐる。惡の行ひの方でいへば、「身」の惡は殺生・偸盜・邪婬で、「口」の惡は

坐つてジュズを取りもみ、お經を取り讀めば、たとひ信仰には怠けてゐても善い應報が得られる行ひが自然とをさめられるし、又、自分は一心不亂でなく、散亂した心で居ても椅子にすわつて坐禪をすれば、思はず知らず靜心が成りあがつて、佛教の眞理をも考へられるものである。事と理とはもとより同じ物で二異物では無い。外形が若しも佛道にそむかず、きちんとしてゐたなら、心内が必ず熟達して、さとりも出來上る。それであるから、外形だけがきちんとしてゐる人も、心内は不信心だなどと批評してはならぬ。その人を仰ぎあがめて、尊敬しなければならない。

【摘解】 ○數珠―ジュズのこと○經―お經○善業―よい報い○自ら修せられ散亂○繩床―繩又は木綿を張つた床（床は椅子）。禪僧のかける椅子である○禪定―專心靜慮して眞理を研究すること○事理―事柄と道理○外相―外にあらはれたすがた○背か○内證―外にあらはれない至極の妙理。前の事の理にあたる○熟す―出來上る。

（第百六十七段） 一道にたづさはる人、あらぬ道の席に臨みて、「あはれ、我が道ならましかば、斯く餘所に見侍らじも

【妄語・綺語・兩舌・惡口・惡業】で、「心」の惡は貪欲・瞋恚・邪見である。これを十惡といひ、之をせぬことを十善といふ。

○禮記に「孝子の深愛有る者は必ず和氣あり。和氣有る者は必ず愉色有り。愉色有るものは必ず婉容有り。孝子は玉を執る如く、盈をささぐる如し。洞洞屬屬然として勝へざる如く、將に之を失はんとする如し」とある如く、人は其の環境・態度の外形から其の心にも影響する。故に環境の注意が肝要である。

【參考】 ○云ひてありなん　言つて居るべきだの意。「な」は

のを」と云ひ、心にも思へる事世の常なれど、世に惡く覺ゆるなり。知らぬ道の羨しく覺えば、「あな羨し、などか習はざりけん」と云ひてありなん。

【口譯】 自分の專門を持つてゐる人が、自分の專門とは違ふ專門の座席に臨席した時に「ああ、我が專門の道であるなら、自分も乘り出して大いに自分の妙技をあらはして感心させてやらう、此の樣に引つこんで指をくはへてだまつて居て餘所事として見過ごしてゐまいのになあ、惜しいことだ」と自慢心を出して口でいつたり、いはないまでも、心中に思つてゐるなどは、世間には普通にあることであるが、それは誠に私は自慢心からであると思つて、わるいことだと思はれるのである。それが誠に自分とは違ふ專門で、自分には知らない專門の事であつたなら、謙虛な心を持つて、「ああ、うらやましい。なぜ自分は其の專門の方も習得してゐなかつたことであらうか後悔だ、習得しておけば此の席上でも一つやられたであらうのに」と言つて居た方がよからうと思ふ。

【摘解】 ○たづさはる―從事關係する○あらぬ―自分の專門とは同樣ではあらぬ○席○我が道ならましかば―「我が道」は自分の習得した專門。「ましか」は「ん」の完了助動詞　ナ　ニ　ヌ　ヌル　ヌレの「な」である。ここは無視して「な」を省き、「ありなん」を「あらん」として見れば、よくわからう。日本の完了詞は外國語のそれほど嚴格なものではない。

○我が道ならましかば、斯く餘所に見侍らじものを

「マシカバ」は　○　○　マシ　マシカ

と活用する推量助動詞で、此の語を「マシカバ」と用ひたる時は、其の末を又「マシ」ともう一度結ぶのが概則である。「あはれ、祖父おはせマシカバ、いかにいつき悲しび鬢ひたまはマシと思ふも悲し」（宇津保物語、俊蔭）とあるが如くである。故に此の文を之にあてはめれば「我が道ならマシカ

意○餘所○ものを―「を」は「のに」であつて、自分も一つ上手なところを現はさうの意。自慢の意でいふ○世の常―普通○習はざりけん―「けん」は「――であつたでせうか」

我が智を取出でて人に爭ふは、角ある物の角を傾け牙あるものの牙を嚙み出す類なり、人としては、善に誇らず物と爭はざるを德とす。他に勝る事のあるは大いなる失なり。品の高さにても、才藝の勝れたるにても先祖の譽にても、人に勝れりと思へる人は、たとひ言葉に出でてこそ言はねども、内心にそこばくのとがあり。愼みて之を忘るべし。をこにも見え人にも言ひ消たれ禍をも招くは唯この慢心なり。一道にもまことに長じぬる人は、自ら明かに其の非を知る故に、志常に滿たずして、遂に物に誇る事なし。

【口譯】 此の慢心によつて、我れ勝たんとして、其の智を出して他人とはりあふのは、恰も角を有して居る牛羊等が、其の角をまげて敵にはむかはうとし、牙ある虎狼等が其の牙をかみ出して負けまいと敵に向ふ如きである。人間たる者は此の獸類よりもすぐれてゐて、自分の善卽ち長所には威張らず人と爭はないのがよいのである。他人よりも勝る事のあるのはそれに慢心を生ずるのであるから、卽ち自分としては大きなそれが損にあたるのである。同樣に身分の高いのも、才藝が他人よりまさつてゐるのでも、先祖の名譽でも他人よりまさつてゐると思つてゐる人はよしやそれを言語で發表しないにしても、心のうちには既に若干の罪になつてゐるのである。氣を附けて其の優れた事を自分が持つてゐるといふ事に氣を止めないで居るべきである。馬鹿者とも見られ、他人からもつまらぬ者といはれ、自分に災難をも惹き出すことになるのは、この自慢心からである。それで、何の道でも一の專門に誠に長じて居る人は、視野が廣く深度が深いから、自分がまだつまらない事を自覺するから、常に自分自身滿足しては居らなく、それ故遂に他人に對して威張る事は無いものである。

【參考】
○勝る。勝れり。勝れたる。「まさる」四段活用。「まされり」は四段活用の已然形の下に完了の助動詞「り」のついたもの。「すぐれたる」は、下二段活用の連用形の下に完了助動詞の附いたもの。
○思へる人　四段活用の已然形の下に完了助動詞の連體が附き、其の下に人といふ名詞が附いたもの。
○消たれ　「ケタ」は、タ行四段活用、「れ」は受身助動詞。
○慢心を心すべきことに關して次の如き話がある。

バ、斯く餘所に見侍らざらマシ、さるを」と同形のものとなる。而して「ン」の意と心得るがよい。

【摘解】 ○人に爭ふ―他人に爭ふ○ 傾け―敵さうとする態度○物と爭はざるを德とす―物は人物卽ち人。德は道德の意味ではなく「ねうち」の意。次の「失」の反

「史記に魏の文侯、中山を伐ち、子擊をして之を守らしむ。子擊、文公の師たる田子方に朝歌に逢ひ、車を引いて避けて下謁す。子方禮を爲さず。子擊因つて問うて曰く、富貴なるもの人に驕るか、且つ貧賤なるもの人に驕るかと。子方曰く、亦貧賤なる者人に驕るのみ。それ諸侯にして人に驕るときは則ち其の國を失ひ、大夫にして人に驕るときは則ち其の家を失ふ。貧賤なる者、行ひ合はず、言用ひられざるときは則ち楚・越にゆくことくつを脫するがごとし。然ればなんぞそれ之に同じからんやと。子擊懌ばずして去る」(蒙求)

對の語○品―身分○そこばく―いくらか○とが―罪。

（第百六十八段） 年老いたる人の、一事すぐれたる才の有りて、「此の人の後には誰にかとはん」などいはるるは、老のかたうどにて、いけるもいたづらならず。さはあれど、それもすたれたる所のなきは、一生此の事にて暮れにけりと、つたなく見ゆ。「今はわすれにけり」といひてありなん。大方はしりたりとも、すずろにいひちらすはさばかりの才にはあらぬにやときこえ、おのづからあやまりもありぬべし。「さだかにも辨へしらず」などいひたるは、なほまことに道のあるじとも覺えぬべし。ましてしらぬ事、したりがほに、おとなしくもどきぬべくもあらぬ人のいひきかするを、さもあらずと思ひながら聞き居たる、いとわびし。

【參考】○おとなしくもどきぬべくもあらぬ人　これは、「おとなしく」して、その上「もどきぬべくもあらぬ」ところの人といふのである。つまり、大人しき人であり、且つその上にその人は「もどきぬべくもあらぬ」人なのである。○いひきかするを　ここの所は、原文は倒さにしてあることに注意するべきである。即ち、「まして、おとなしく、もどきぬべくもあらぬ人の、しらぬ事したりがほにいひきかするを、（自らは）さもあらずと思ひながら聞き居たる、いとわびし」として考へるがよい。○昔おはしましける帝の只

【口譯】 年をとつた人で、何か一つ他人に秀れた才能があつて、「この人が死んでしまつた後では、（この道のことを）誰に尋ね聞かうか」などと、人から言はれるやうなのは、いはば老人仲間の味方であつて、老人のために大いに氣を吐いてくれるものであるからして、年を取つて生きてゐても、決して無駄に生きてゐるのではない。さうではあるが、さて、そんな人も、その道に於ては、年を取つても一向に衰へたり、ぼけた所がないといふやうなのは、この人は一生涯この事だけでおしまひになつてしまつたのだわいと思はれて、その人が、つまらなくも思はれるのである。つまるところ、年を取つたなら、「今はもう忘れてしまひました」といつてすませたいものである。大體は心得てゐたにしても、むやみとそれについて喋り散らすのは、それほどえらい才能ではないのかと受取れるし、又喋つてゐる内には、自然と間違ひも出て來るであらう。「はつきりとも存じて居りません」などといつたのは、むしろ、ほんたうに、その道の大家とも受取れるであらう。いはんや、身分もあり年配も十分な人でこちらから非難の打ちどこもないやうな人が、知りもしない事を、しつたか振りして、喋り散らすのを、傍から、はて、さうぢやないがなあなどと思ひながら聞いてゐるのなど、誠にどうも困つたものである。

【摘解】 ○一事すぐれたる才―何か一つの事について秀れた才能があること。「すぐ

若き人をのみ思し召して、四十になりぬるをば失はせ給ひければ……中將なりける人の……七十近き親二人持たりけるが……家の内に屋を建てて、それに親を籠め据ゑぬ。……此の親いと心賢く萬づの事知りたり。……唐土の帝、此の國を打取らんとて……程久しうて七曲にわだかまりたる玉の中通りて、左右に口有りたるが、小きを奉りて「之に緒通して給はらむ、此の國に皆し侍ることなり」とて奉りたるに、いみじからむ物の上手不用ならむ。そこらの上達部より始めて、有りと有る人、「知らず」といふに、又行きて、「斯くなむ」と云へば、親「大きなる蟻を二つ捕へて、腰に細き絲を